

暁色の誓い

天ノ鳥助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

広島湾内に浮かぶ孤島の鎮守府。名を柱島泊地というこの地に配属された艦娘と人間は何を思い、何故戦うのか……

※この物語の舞台は基本的に現実の世界とほぼ同じと考えてもいですが、海域名などは原作である艦これの方に合わせたいので、途中で史実等が語られる時、少し名前が異なったりします。

例) キスカ島↓キス島、沖ノ鳥島↓沖ノ島、ソロモン海↓サーモン海
e t c ……

目次

1章 着任

1話	着任　　～柱島泊地鎮守府～	1
2話	不死鳥と呼ばれた駆逐艦	8
3話	表裏一体	16
4話	抜錨！第六駆逐隊！	31
5話	着任パーティー	48
6話	鎮守府の朝	60
7話	美代憲兵	75
8話	作戦決行前	87
9話	抜錨！ 第一水雷戦隊！	97
10話	“家族”	113
2章 私たちの鎮守府		
1話	とある柱島の1日	142
2話	頭にきました	158
3話	覚悟を決めろ	170
4話	“追加任務”	182
5話	守るために戦う	194
5・5話	呉鎮守府	213

1章 着任

1話 着任 〔柱島泊地鎮守府〕

——西暦2063年 7月11日。

俺は今、3人の少女と巨大な軍用施設に向かっている。

その名も柱島泊地。俺の赴任先だ。新生活という事で、少し気分も高揚している。これからの生活が楽しみだ。

「司令官、元氣ないわね。そんなんじや駄目よ！」

「ちよつと雷、レディーは邪魔しちやいけないわ」

「はわわわ、2人とも喧嘩しちや駄目なのです！」

……もとい、これからの生活が心配だ。

* * *

俺は姓を山村ヤマムラという。体格は中肉中背と言ったところか。まあ、典型的な日本人だ。

……と、言いたいところだが、どうも普通と思われていないらしい。22歳という若さで佐官になってしまった事が原因であると思われる。以前の作戦で、総司令官が負傷した時、代理で撤退作戦を成功させたのが効いたようだ。

当時中尉だった俺は二階級を特進。少佐となって「深海棲艦しんかいせいかん」と戦うことを命じられ、柱島泊地鎮守府に配属された……と言う訳である。

……深海棲艦しんかいせいかんとは、十数年前に初めて存在が確認されて以来、人類に敵対し続けている正体不明の怪物達の事だ。

奴らは世界各地の制海権を人類から奪い、各大陸及び島々を孤立させた。勿論島国である日本もその例に漏れず、各国との連絡さえ危うい危険な状態が続いている。それについての歴史を少し語ろうか。

いや、まあ歴史と言ってもここ十数年の話なのだが……

——西暦2046年11月……今から17年前。

当時まだ海上自衛隊と称していた日本海軍が、沖ノ島付近の海上で謎の浮遊物を発見する。それは、それまで南極や北極付近で目撃された、「ヒトガタ」や、「ニンゲン」といったオカルト的存在と酷似していたらしい。発見時、海自艦は本土に1本の通信を入れた。

“我、不審な生物に遭遇せり”

それを受けた本土司令部は“突然変異した鯨か何かかもしれない”と、その艦に浮遊物回収の司令を出そうとした。

……ところが、何故か全ての通信網が故障を起こしていたのだ。

後でわかった事だが、この時、同時に海外へ繋がる通信回路及び情報伝達網の全てが不具合を起こしていた。

その理由も現在は判明している。なんと深海棲艦は、人類が開発した電波を攪乱する電磁波の様なものを発するのだ。しかも、その範囲は驚くほど広い。

その電磁波の様なもの、どうやら奴らのナワバリ内の海全域で発生するらしく、特にその妨害が激しい海域では海全体が鉛色に染まるという。

つまり、沖ノ島付近の海上に深海棲艦が現れた時点で、海上及び海外への通信が不可能になったのだ。

……しかし、連絡をとる方法は一つだけあった。

旧式の無線機である。

これだけは、何故か攪乱されること無く通じることが判明した。それに気づいた司令部は、無線機で三度の呼び出しをかけた。

最初も、二回目も応答が無く、諦めかけた三回目の通信で、辛うじて繋がった数十秒。その時の通信士官の声は録音され、現在も保存されている。怪我による痛みで言葉が途切れ途切れだったが、死を目前にして、決して平静を失わず整然と事実を伝えたその通信は次のようなものだった。

「奴らは人工物ではない。それは間違いない……呼吸を必要とするら

しいが……詳しい事はわからない。この艦の攻撃力の全てを上げて
も、装甲に傷一つつucker事すらできなかった……奴らは……化け物だ
……！ まるで、ずっと深海に棲みついて機会を伺っていた侵略者エイリアンの
ような……！」

通信はここで途切れる。

この通信士官の報告から、司令部は現れた怪物達に「深海棲艦」の
名を付け、緊急で対策本部を開設。同時に、長期に渡って議会での情
性的な討論途中にあった憲法第9条を改正。特例として深海棲艦及
び日本国民に仇なす存在に対してのみ、交戦権を認めることと定め
た。

それに伴って、自衛隊はそれぞれ陸、海、空軍と名を改め、本土の
防衛及び深海棲艦の撃退と他国との連絡を最優先目標として活動を
開始した。深海棲艦の出現からカレンダーが変わり、西暦2047年
1月の事である。

さて、このようにして深海棲艦の攻略に挑む事になる日本だが、従
来の兵器では太刀打ちできないことが既に海自艦の遭遇戦において
証明されている。また、日本は世界大戦の教訓から非核三原則を堅実
に守り続け、当時もつとも破壊力に優れた核兵器を保持していなかつ
た。

それは平時なら賞賛されるべき事なのだが、この時ばかりは裏目に
出た。

これはただ単に深海棲艦に対する有効打を持っていなかっただけ
に留まらない。核兵器を保持していない事によって、国論が二分して
しまったのだ。現在ある兵器で可能な限り深海棲艦と相対するとい
う積極論と、あくまで防衛を主軸に置き、他国の援助を待つという慎
重論。そのどちらにも利点と欠点があり、積極派と慎重派の討論は過
激化、それぞれ勢力比4：6で派閥を作ってしまった。

もつとも国民の団結が必要であるこの時期に……

……程なく日本は、海外へ連絡を取ることに成功する。一部の無線
を無理やり改良増設し、間に合わせとはいえ、一応の通信網が完成し
たのだ。しかし、通信によつて得られた海外の状況は日本の期待とは

程遠いものであった。海外でも、日本と同時期に深海棲艦が出現し、日本と似たりよつたりの有様で、とても救援どころでは無いらしいことがわかったのだ。日本が頼りにしていた海外の核兵器も、一時的に深海棲艦を後退させる程度の効力しか示さなかったらしい。

人類は、まさに一縷の希望さえも絶たれつつあった。

——深海棲艦の出現から1年が経とうとした2047年10月。

日本は遂に、深海棲艦に対する切り札を引いた。そう、周知の通り「艦娘」を発見したのである。

艦娘とは、「在りし日の艦艇の魂を持ちし女性達」、と一般に説明される。容姿、人格、個体差等は人間となんら変わらない。唯一、人間と違う点があるとすれば、彼女達は、その身体に適正のある固有の装備「艦装」を纏い、海上を走り、砲を放って深海棲艦と渡り合うことが出来ると言う点だ。

艦娘の発見の経緯は詳しく語られない。海軍の少佐となった俺にさえ、未だ詳しい事情は伝えられていない。恐らく、何らかの人体実験か、あるいは生命複製実験クローニングの結果偶然生まれた、といったところであらうか。まあ大声で誇れない生い立ちだからこそ隠されているのだろうか……

とにかく、艦娘は日本世紀の大発見。深海棲艦に唯一まともにダメージを与えることの出来る存在。追い込まれ、虐げられた人類にとって、彼女達の存在はまさに希望だった。日本首脳部は、すぐさまこの事を公表。艦娘は一気に身近な存在として、また国民的英雄として定着した。

その後、艦娘の出現があつてもなお続く深海棲艦の通信攪乱によって、情報社会とも呼ばれた日本の経済は崩壊。第三次産業に就いていた人々の大部分は第一次産業への転向を余儀なくされ、経済水準は世界大戦期とほぼ同じにまで低下する。

しかし、日本人は諦めなかった。たとえ泥臭かろうとも、醜かろうとも、ひたすら生へと執着し、諦めなかった。彼らは他国に先駆け、対深海棲艦攻略線の先陣を切って行く事となる。現在の世界の状況は、

決して諦めなかつた彼らによつて作られたと言つても過言ではない。
艦娘の協力もあり、日本はじわりじわりと戦線を押し上げ、少しずつ制海区域を広げていった……

* * *

そして、現在俺の前をはしやぎながら歩んでいる3人の少女達。彼女達こそ、我々人類に残された唯一の希望。つまり、艦娘なのである。
……正直言つて予想外だ。

予め艦娘は女性しかおらず、しかも大抵若い女性の容姿、性格をしていると聞いてはいたが、まさかここまで若い、いや幼いとは。しかも、この少女達があの深海棲艦を相手に互角以上に渡り合うと言うのである。いくら想像力豊かな者でも、そんな想像をするのは難しいだろう。

だが、実績は十二分にある。彼女達は奴らと戦える。人類を救ってくれる。だからこそ、提督たる俺は彼女達の頭脳となり、腕とならなくてはならない。提督としてこの鎮守府に着任した俺の仕事は、持てる力の全てをあげて彼女達の補助サポートをする事だ。軍人として、自分自身の手で国を守れないと言うのは齒がゆいが、これもそれ以上に大切な仕事だ。

いくら圧倒的な破壊力を持つ艦娘と言えど、指揮系統の統一は不可欠であるし、補給、事務、施設の管理など、人間が出来ることは可能な限り人間の手でやるべきだ。酷な話だが、彼女達には戦うことに専念してもらわなくてはならない。そのためにも、これから経験を積んで、彼女達が安心して自己の身を預けられるような人物になりたいと思うのだ。

……それでいて、俺にはもう一つ思うところがある。

彼女達が人間と同様の人格を持っていると言うのなら、俺は彼女達にとつて戦友ともと呼べる存在になりたいのだ。上司と部下である前に、腹を割つて話し合える友人でありたい。互いの生命を預けられるような信頼を築きたい。

職業軍人がこのような綺麗事ばかり願うのは愚かな事なのだろうか。

* * *

そんな風にももの耽って歩いていると、もう基地についたらしい。
いかつち雷と名乗った活発そうな少女が話しかけてきた。その声で、現実
に引き戻される。

「さあ！　ここが私達の鎮守府よ！」

顔をあげると、そこには三階建てくらいに巨大な建物がそびえ立っていた。なるほど、流石、対深海棲艦前線基地。立派な建物だ。

「では、まずは執務室に向かうのです」

いなすま電と名乗った、内気そうな少女がそう言い、歩き出す。

「ちよ、ちよつと！　暁を置いていかないですよ！」

これまた活発そうな、1人前のレディーを自称する少女、あかつき暁が電を追いかけて言う。思わず苦笑を交わした俺と雷も、それを追って歩き出す。

「ところで司令官」

隣を歩く雷が不意に声をかけてくる。

「なんだい？」

「まだ私達、司令官の名前を聞いていないわ」

「あ、そういえばそうね（なのです）」

「あれ？　言っていないかったっけ？　それじゃ改めて自己紹介しておこうか……」

佐官帽を被り直し、敬礼する。

「この度、柱島泊地鎮守府に着任する事になった山村少佐だ。まだまだ未熟で頼りないところも多いけど、どうぞよろしく頼むよ」

元気で頼もしい、けれども幼さを残す声が三つ、それに呼応した。

「もちろんよ！」

「困ったら私を頼って！」

「よろしくなのです！」

これからの生活が心配だ、なんて言ったけど。

「どうしたの？　司令官」

「いや、何でもないよ。さ、行こうよ」
もとい、これからの生活が楽しみだ。

2話 不死鳥と呼ばれた駆逐艦

三人の駆逐艦娘：暁、雷、電に連れられてやって来たのは柱島泊地鎮守府中央棟の3階、執務室だ。扉には「ようこそ」と言わんばかりの「提督執務室」の札がかかっている。

「ここなのです」

「へえ……立派なもんだね」

おどおどと扉を開けようとする電。押し扉なのに思いつきり引いてしまい、

「はわわ……」

と声をあげる。

「何やってるのよ……そんなんじやダメよ！」

雷がたしなめる。

「ご、ごめんなさい、なのです」

「なのです」が口癖らしい少女は顔を真っ赤にして、今度こそ扉を開ける。一歩足を踏み入れ、内装を見渡した。

が、部屋の中央にダンボールが置いてある以外に家具らしいものは無い。

「ほう……びつくりする位何も無いな」

「内装は家具コインって言う……何て言えばいいかしら。まあ、お金みたいなもので購入して、自由に模様替え出来るのよ」

暁の説明によると、この家具コインと言う代物は、日本海軍が一部海域に箱に入れて流しているらしいのだ。それを遠征任務や出撃任務に出た艦娘達が拾い、鎮守府に持ち帰るのだという。

……何故、わざわざそんな宝探しのようなことをするのかと言うと、その理由は何とも呆れたもので、

「遠征任務が暇だ」

と言う短気な艦娘達の要望に応じて、ゲーム的要素を遠征に取り入れたそうなのだ。

……それでいいのか、大本営。

「これが司令官さんの分なのです。本当は遠征で集めなくてはいけな

いのですけれど、前の提督さんが次の提督さんのために残していつて下さったそうなのです」

「へえ……有難いねえ。2000枚もあれば一通りは揃えられそうだね」

暁と電に説明を受けていると、雷どこから持ってきたのか分厚い本を運んできた。よたよたとして見ていて危なっかしい。広辞苑か何かだろうか。かなり重いようだ。

「こ、これが家具のカタログよ……つと」

ドンツとダンボールの上に置かれる広辞苑サイズの本。ダンボールがちよつと嫌な角度にへこむ。

「か、カタログ……？」

とりあえず目次を見てみると、大まかに床、壁、机、窓、装飾、家具の6ジャンルに分けられている。見開き1ページに家具がイラスト付きで解説されているが、この様子だと家具500種類はあるだろう。

一体大本営は提督に何を求めているのだろうか。

「ま、まあとりあえずこの『提督の机』と『ブルーカーペット』、あと『青カーテンの窓』って奴を注文しようかな。ああ、それと応接用の机と椅子もね。最低限執務室として使えるようにはしておこう」

「後で申請しておくわー！」

「やれやれ……」

雷は嬉しそうに答えた。

さつきからとつても嬉しそうだね、と聞くと、何でも人の役に立てることが何よりも幸せなんだとか。姉妹である暁や電に何かと世話を焼きたがるのも、その現れなのだろう。

ところで、先程から気になっていたことがある。

暁、雷、電……

俺だつて戦史は学んだ（好成绩とは言いがたかったが）。確かこの三人の名前は皆、戦時に第六駆逐隊を編成したという特Ⅲ型駆逐艦の名前のはずだ。それなら、3人では足りない。当時の駆逐隊は4隻編成だった。

「なあ、唐突で悪いがお前達はもしかして四人姉妹じゃないか？」

「そうよ、私達は特Ⅲ型駆逐艦、暁型の四姉妹なんだから！」

ネームシップの暁が、誇らしげに言う。

「最後の1人は……確か響と言ったかな」

5年以上昔に習った名前を苦勞して引つ張り出す。全く、後悔先に立たず”とはよく言ったものだ。あの時勉強しなかったがために……

それに答えた暁の声は、明快かつ単純。しかし、俺を驚かすのに十分な質量ポリユームを伴っていた。

「ええ、今建造中なの！」

え、今なんと言った？

「今!?! 建造中!?!」

思わず素つ頓狂な声が出た。啞然と口を開ける俺に電と雷が説明する。

「そうなのです。前の司令官さんが、次の司令官さんのためにと、私達4人を建造して残してくだだったのです」

「本当は初期艦は電1人のはずだったのだけれど、姉妹がいないと寂しいだろうって」

「けど、結構ギリギリに建造して出て行っちゃったから、まだ着任出来ていないのよねー」

なるほど、彼らしいといえれば彼らしい。

眠たげな、それでいて気だるそうな表情をした若い士官の顔が、頭に浮かぶ。心の中で呟いたつもりだが、思わず口に出していたらしい。

「へえ、彼奴がねえ……」

それを聞いた電が驚いたようにこちらを見る。電は、前の提督との付き合いが（ほんの数日程度の差だが）他の2人より長かった。

「お知り合いなのですか？」

「まあね、腐れ縁とかいう奴だよ」

自分の表現に苦笑をもらす。

崎矢成仁少将サキヤ ナルヒト……俺の上官だ。

数年前まで、俺はこの人の副官を勤めていた。現在、日本海軍に存

在する18人の将官の内が一番若く、32歳。それ故に軍の上層部からは煙たがられているが、若く、親しみやすいという事で、下士官や、部下からの信頼は誰よりも厚い。もちろん。俺も彼に全面的な信頼を寄せている。彼は、元副官に出来る限りの用意を整えてくれたらしい。

現在、日本海軍は、新任提督を駆逐艦娘1人と共に新築した鎮守府に配備し、鎮守府近海の制圧を命じている。これによって提督の資質を判定しようという訳だ。

つまり、少佐は提督候補生であり、建造などの一部機関は使うことができない。建造許可をもたない新米少佐にとって、艦娘は1人でも多くいて欲しい存在なのだ。

まあ、要するに可愛い部下のために少将が職権崎矢さんを利用して特例を認めさせたという事だろう。俺個人としてはとても有難いが少将の立場は大丈夫なのだろうか？

「とりあえず工廠にいつてみましょう！　そろそろ建造が終わるころだわ」

「楽しみなのです！」

姉妹がやってくるのはやはり嬉しいようだ。気取っていた暁も素に戻ってはしゃいでいる。

「そうだな、今夜は響も交えて、着任記念パーティーでもするか！」

「さっすが司令官太っ腹！」

「ちよ、やめろ雷！　重い！」

* * *

——柱島泊地鎮守府東第一棟1階、柱島泊地海軍工廠。

中央棟にある執務室からは歩いて5分と言ったところか。何でも、主に艦娘の建造、艤装の開発などを行うらしい。士官学校の教科書では何度か読んだような気がしないでもないが、どんな建物かは全く想像がつかない。

……建造

嫌な表現だと思う。

彼女達は産まれるのではない、「造られる」のだ。そうでなかったら、このような言い方をするであろうか？この時、俺の頭には、彼女達の生まれ方に一つの仮説が出来ていた。それは考える事さえおぞましい、出来れば見ずに蓋をしてみたいもので。

ぶんぶん頭を振る。そんなこと、考えたってしようがない。人は生まれる前より、生まれた後にこそ本質があるはずなのだから……

ふと、右を見ると不審そうに俺を覗く一対の目があつた。綺麗な鳶色をしている。

「あの……司令官さん。何か悩み事があるのです？」

純粹に心配してくれているのだろう。綺麗な鳶色の瞳には気遣いの色が浮んでいる。

「……いや、何でもないよ」

それを見て、改めて思った。彼女達がどのような生い立ちであろうと関係ない。この子達はどこからどう見たって普通の、人間の女の子だ。何も変わらない。違わない。

だから、どんな事があるうと受け入れよう。

* * *

少し経って柱島泊地海軍工廠

「いやあ……これは……」

「驚いた？ 凄く大きいでしょう？」

暁が少し誇らしげにこちらを見る。

素直に驚いた。

艦娘を建造（嫌な表現だ）したり、その装備を開発する場所というのだから、小屋程度の大きさがあれば充分だと思っていた。しかし、施設の大ききを見るに建造はそんな単純なものではないらしい。工廠は、戦艦クラスの船（艦娘ではない）が丸ごと入りそうだ。

「艦娘ってさ、どんな風に建造されるの？」

これだけは聞いておかなくてはならない。彼女達の生い立ちがどうであれ、人として扱うと言う気持ちは変わらない。ただ、だからといって、彼女達のルーツをずっと知らずにいる訳にもいかない。それ

がたとえどんなに辛いものであったとしても。

すると三人が顔を見合わせ、口々に覚えていることを話す。

「それが、私達もよく覚えていないのよ」

「気がついた時にはもうこの身体が出来上がっていて、艀装との適性検査を受けていたのです」

適正検査……

艦娘には固有の艀装がある。それを身にまとって初めて、彼女達是在りし日の艦艇の力を出すことが出来るようになる訳なのだから、適性検査というのもっとも大事な、最終過程なのだろう。

「じゃあ、それ以前の記憶はないの？」

「ある事にはあるのだけれど、一番近い記憶は凄くぼんやりしていて、しかも視点が今と全然違うの。なんだか…映画を見せられているみたいな感じがしら」

横でうんうん、と暁と電が頷く。

つまり、帝国の駆逐艦だった頃の記憶という事だろうか。

「意識を失って、次に気づいた時には電が言っていたように艀装の適性検査を受けていたわね」

すると突然、雷は嘘寒そうに首をすくめる。

「不思議よね。私達、言葉とか知識とか、全く習った覚えはないのに、現にこうやって会話できてるんだから。これも昔の記憶ってやつのおかげかしらね」

「目覚めてすぐは本当に何もわからなかったのですけれど、少し時間が経つと、言葉も、知識も、まるで前から知っていたかのように使えるようになったのです」

「今思い返してみると、なかなか気持ち悪い感覚だったわよね」

すると突然、暁が声を張り上げた。

「新しい艦が出来たって！」

「ここは………何処だろう。」

私はさつき、ウラジオストク沖で標的艦となつて生を終えたはずだ。

……やつと皆のところへ行けると思つたのに。

「また生き残つてしまったのかな……」

はつと気づいた。何だこれは。意識が具現化したような、音が意識を持ったような……

「……これは声なのか？」

混沌とした脳内が整理されていくにつれ、先程から自身が発している意識の具現が「言葉」であり、また「声」である事が認識できた。そして……

「これは一体……私は……」

視線を足元に落とすと、そこには肉体があつた。記憶の奥底、遠く霞んだ場所にある記憶とは相違した、柔らかく水分を持った肉体。しかしその答えもすぐに得られた。これは間違いなく「人間」の身体。ぐるぐると頭が回る。一体私に何が起こつているというのだろうか。

転生？

いや、そんなはずはない。それなら今私の身体は赤ん坊であるはずだし、前世の記憶があるというのもおかしい。

正直何がなんだかわからない。私は一体どうなつてしまつたというのだろうか……

その時、扉の向こうから「声」が聞こえた。

「新しい船が出来たつて！」

初めて聞く声だ。

なのに、何故か懐かしいような、よく聞き慣れた声に聞こえた。そして、自分の置かれていた状況が、まるで本でも読んでいたかのように、自然に理解出来た。

様々な情報が頭に流れ込み、整理され、片付けられていく。

きつとこの扉の向こうには、大切な人達がいる。何故だかわからなけれど、そう思った。

伝えなくては。不死鳥が、また甦つたと。

護らなくては。今度こそ、彼女達を。

伝えなくては。私の名前を……

重たい扉を開け、一步踏み出す。そこには、三人の少女と、一人の青年がいた。

「響だよ。その活躍ぶりから、不死鳥の通り名があるよ。」

自然とそう名乗る。考える余裕なんてなかった。自分の名前の記憶は幾つかあり、Вэрлнный、Декабрист。色々出てきたが、口をつけて出たのは何故かその名前だった。

「これで第六駆逐隊全員が揃ったわね！」

「響、わからないことがあれば、私に頼ってもいいのよ！」

「響ちゃん、お久しぶりなのです！」

突如親しく話しかけてきた少女達。不思議と彼女達の名前も自然と出てきた。

「暁、雷、電……遅くなってすまなかったね。」

そして、彼女達の中央に立つ青年。彼の立場も何故か即座に理解出来た。記憶に馴染みのある純白の軍服。ややデザインは異なるが、間違いなく士官がかぶる制帽。

「貴方が私達の司令官なんだね。」

そう言うと、青年は制帽を脱いで敬礼した。

「ああ。この鎮守府を預かっている山村少佐だ。よろしく頼む」

人懐こそうな笑顔。

「ちよつとベタ過ぎる挨拶かな」

と、頭をかく。姉妹達が心を許しているところを見ても、悪い人ではなさそうだ。彼の手を取り、握手する。

「Xорошо（了解）。よろしく、司令官」

3話 表裏一体

響を工廠で迎え、再度執務室に戻る。

(さて、響が着任して第六駆逐隊が揃ったわけだが……)

ちらりと、隣で控える4人の少女を見る。

「司令官さん、次は何をするのです?」

「響も着任したわけだし、出撃なら何時でもいけるわよ!」

「xopopo。それはいいな」

「任務なら私達に頼っていいのよ?」

一斉に、キラキラした目で言う。

(何もする事がないなんて言えねえ……)

なんといつても着任初日だ。本来ならごたごたした事務処理に追われて、ほとんど一日が潰れることになるため、執務はない。言うなれば引越し初日のような感じだ。

しかし、俺はあの先輩崎矢さんのおかげで面倒な事務処理はほとんど無い、というか全部押し付けた。だから本当にやることがないのだ。

それなら事務処理くらい自分でしろ、と言われそうだが、崎矢さんの方も世話好きだから、こういう事を任せると結構喜んでやってくれるのだ……たぶん。

でもまあ、艦娘と親交を深めるのは悪いことではない。遊ぶ、と言ってしまうと型無しになってしまうが、この子達の人柄を知るためにも5人で出かけよう。

「そうだな……皆で母港に出てみるか」

「え、それは指令かい?」

「いや、そういう訳では無いけど、海上の見回りも兼ねてね」

我ながら言い訳をしているようでなんだか気分が悪い。響はなかなかませた感じがするし、こういう言い逃れをすると機嫌を損ねるかもしれない。

彼女の方を見やると、ジト目で(多分素だな、これ)で不審そうにこちらを見ている。うーん……やはり機嫌を損ねたかな。

と思いきや響はふっと笑ってこちらに意味ありげな視線を送る。

「わかったよ。司令官。」

「……」

なるほど、こいつはかなり頭が切れそうだ。

このわかったよ、というのはおそらく俺の意図を察したのだろう。少し笑ったのは、親交を深めたいと思っっている俺の気持ちまで察したからだと思う。これだけで気を許してもらえとは思っていないけど、少しは不審感が和らいだのではないかな。

……そしてもう一つ、響は理性を優先して動ける、ある意味姉妹で一番大人びた性格である事がわかった。しつかり者のようだし、秘書艦業務はこの子に任せるのがいいかもしれない。

「そうと決まれば早速行きましょう！」

俺と響のやり取りを聞いていた暁がせかす。そんな暁は次女と対照的にかなり子供らしい。でも、響からも全面的な信頼を得ているところを見ると、根は誰よりもしつかりしていそうだ。人のことをちゃんと見ている。直感やその場の気分で行動しているように見えるが、案外腹の底では人の事を真剣に考えて動いているのかもしれない。「どうしたの？」

暁が怪訝そうにこちらを見返す。その後ろでは響がクスクスと笑っている。(きつと今の俺の考えも見通されてるな……)

「ああ、いや。ちよつと考え事だ」

ひらひらと手を振り、ごまかす。すると、既に扉の前で準備して待っていた雷と電に呼ばれた。

「とにかく行きましょう！ 私達も見回り、頑張っちゃうからね！」

「なのですー！」

おお……すぐく張り切ってくれている。思わず苦笑いして、響と視線を交わす。

まさかここまで喜んでくれるとは……

* * *

——少し経って、柱島泊地母港

母港の棧橋に立ち、大きく伸びをする。

今日は晴れているので、水平線が綺麗に見える。内地では見れない、離島の鎮守府ならではの美しい光景だった。

「ふむ、絶景かな絶景かな」

「司令官、何を馬鹿みたいな事を言っているんだい？」

思わず漏らした感嘆の声にすかさず手厳しいツツコミを入れたのは響だ。まあらしいといえづらいが、流石にちよつと傷付く。

「水平線、いじょうなーし！ 司令官、浜に降りてもいい？」

と言いつつ既に駆け出している雷。

他の姉妹と同様まだまだ幼さが抜けないが、先程からの様子を見ると、とても面倒見の良い性格をしているようだ。妹である電とのやり取りは、まるで示し合わせたように呼吸が合っていて、見ていて心地良い。

「はわわ、待つて欲しいのですー！」

この子は……いつ見ても困っているような気がするなあ。さつきから

「はわわ……」

の連発だ。

末っ子というのもあり、一番幼さを感じる。先程から見ていたが、どうもドジっ子らしい。今も何も無いところでつまづいて、転びかけた。だが、誰よりも姉妹思い、といった印象を受ける。

ドジでも生真面目だから、事務処理に長けていそうだ。意外と、精密な作業に没頭すれば、ドジなミスも無くなるかもしれない。

「司令官、何気難しい顔してるのよー！」

ぼんやりとそんなことを考えていると、暁が声をかけてきた。

「そうだよ、司令官。何も任務外の時間に、気を張ることはないさ」

そう言つて響は目配せする。

悔しいけど、全部見通されているみたいだ。でもまあ、久しぶりに貰えたお休みなんだし、自由にするのもいいかな。

「んー……じゃあお言葉に甘えて今日はのんびり釣りでもさせてもらおうかな！」

「あ、私もやりたい！」

「い、雷ちゃん邪魔しちや駄目なのです！」

雷電姉妹のやり取りを笑って横目に見ながら、忘れかけていたことが脳裏を掠める。

ここは前線基地なのだ。

その事を思い出した瞬間、全身に戦慄の波動が駆け巡る。彼女達の存在によって完全に意識野の外へと追いやられていたが、ここは今、この瞬間にも、戦場へと変貌しうる危険地域だ。のんびりとした雰囲気には隠された、それでいてしっかりと深層心理に張り付く無意識の緊張。ここで働くからには、常にこの緊張と隣合わせで生活していかなくてはならない。

いや、軍人である限り、この種の緊張から逃れることは不可能なのだ。それでも時として、ほんの短い間とはいえ、その張り詰めた心が緩む時がある。

今がまさに、その時なのではないだろうか？

俺はまだ軍歴4年そこそこのヒョッコ軍人だ。このような感覚に慣れることは、未だに出来ていない。だけど、それなら。いや、それだからこそ。

「ほらほら、早く行きましようよ！」

「レディーもお手伝いして上げるわ！」

今与えられた、この時間を大切にすべきだろうな。

「さ、私達も行くこうか」

「なのです」

たまには何も考えずに遊ぶのも悪くない。

* * *

——数時間後、柱島泊地棧橋

「ふぁーあ……ねみ」

傾き出した陽射しに目を覚ます。気づかないうちに眠り込んでし

まったららしいちらりと横を見やる。そこでは、4人の艦娘達。否、少女達が遊んでいた。

何もすることがないということ、鎮守府の母港に出て各々時間を潰しているわけなのだが、釣りをしている俺はもう三時間ほど、全く当たりが来ない。いや、寝ている間に食いついていたのかもしれないが、とにかく1度も当たりがない。

一旦目を覚ましてしまおうともう寝る気にもなれず、ただ糸を垂らしてぼんやりしているのでは暇なので、やはり最初の目的通り、彼女達の観察の時間になってしまっていた。

……まあ、楽しいからそれもいいが。元々人間観察は好きなのだ。そのせいで上官には明らかに白眼視されていたが、まあ気にしたこともない。

「司令官、おはよう。釣れたかい？」

不意に響が駆け寄ってきて話しかけてくる。真顔なのでわかりにくい、どうも全く釣れない俺をからかっているようだ。

「……どうも今日は風向きが悪いな」

「釣りも冗談も上手くないんだね」

と、クスクス笑う。笑うと無邪気に見えるが、言ってる事はちよつと胸に刺さった。

「まあ、趣味って言っても最後にゆつくりやったのは10年以上前の事だからなあ」

完全に負け惜しみだ。すると、他の3人も気がついてやってきた。

「司令官、釣れてるー?」

「何よ、一匹も釣れてないじゃない!」

駆け寄りつつ叫ぶ。

「あーもう、こういうのはやる事に意味があるのであって、釣れる釣れないは問題じゃないんだよ」

適当にそれっぽい事を言ってみたが……流石にこれは苦しいか。

「苦しいね、司令官」

「流石に無理があるのです……」

ううう、電まで……

「まあもう少し経ったら釣れるかも知れないわよ？　そろそろ夕方だし、風も弱まってくるわ」

フオローを入れてくれたのは雷だ。皆結構ズバズバとものを言う子達だから心遣いがとても嬉しい。そんなことを考えつつふと、目をあげて俺の前に並ぶ彼女達を改めて見回す。

「へえ、暁が一番背が高いんだな。ちよつと意外」

「何よー。暁が一番お姉さんだからね！」

少し怒った様子で、ない胸を反らせる。

4人の中では暁が一番背が高い。

響が暁より僅かに低く、雷、電の2人はほぼ同じで響よりやや低いといった具合いだ。暁と響との間はあまり差を感じないが、暁と電が並ぶと結構目立つ。まあ、暁でもやつと俺の肩に届くくらいの高さなのだが。

4人が互いの身長についてやいやい言い始めたのを苦笑しながら見つめていたその時、握った竿から確かに反応が伝わってきた。浮きが沈むのを見ていた電が叫ぶ。

「司令官さん！　引いてるのです！」

と、言いつつ近くに置いていた網を持ち上げようとする。が、ここでドジが発動。持ち上げた時に、雷の足に思い切りぶつける。

「いったーい！」

「はわわ……ごめんなさい、なのです！」

網を取り落として謝る。

「ちよ……速く網を……」

その間も獲物は針を外そうとじたばたと暴れている。釣りにはそこまで詳しくないが、網もバケツも用意出来ていないのに水面にあげるのは流石に不味いだろうと思うから、下手に引き上げられないこんな時は冷静な次女が頼りになった。

仲裁に入りかけて巻き込まれた暁も交えてやいやい喧嘩し始めた3人を尻目に網を拾い上げる。

「はい、網」

「おう、サンキュー！」

網を受け取りつつ手首を返す。
ぱちやつ……

何とも可愛らしい水音と共に出てきたのは、やはり可愛らしいサイズの金魚のような魚。っていうか金魚じゃねえか!?

何故こんな所に金魚が……ここは海だろう!?

釣り上げた方がいいが、誇れるものでは無いな。後ろを振り返って四人に向かって肩をすくめる。

「ご覧の通りだ。どうも小物みたいで……」

「可愛いのです!」

「ハラショー」

「……」

まあ思いの外ウケているから良しとするか。どうやったのかはよくわからないが、喧嘩を収束させたらしい雷が唐突に言い出す。

「司令官! このお魚さん、鎮守府で飼ってもいい?」

「へっ? 飼うのか? まあ、食っても旨くはなさそうだけど」

「食う」という単語を聞いてびくりと身体を震わせたのは電。

「司令官さん……釣られたお魚さんも出来れば助けたいのです……」

「ちよ、電。それはちよつと違うんじゃない?」

「じゃあ飼ってもいいってことよね!」

「ハラショー。それなら後で家具コインで金魚鉢を発注しておくよ」

「さすが響! よろしく頼むわね!」

「……」

四人姉妹の華麗すぎるコンビネーションで飼うことに決まってしまった。勢いって恐ろしや。

「……色々不服だが日も傾いてきた。そろそろ鎮守府に帰ろう。夕飯の支度もしなくちゃな」

「はい」

「Постижение (了解)」

「なのです」

鎮守府への帰り道へ歩き出しかけて気付く。返事がひとつ足りない。後ろを振り返ると、暁が海を見つめたまま動こうとしない。

「暁？ もう帰るぞー」

「晩御飯食べたくないのー？」

「司令官！ 速く来て！」

珍しく緊張した面持ちの暁、水平線近くを指さして叫んでいる。何やらただ事ではないらしい。

じつと水平線に目を凝らす。俺だって、日本海軍の軍人だ。流石に艦娘には劣るが視力は高い……はず。

俺の視界に映ったのは、美しく輝く夕陽と、それを反射させる緋色の海。

……そして、夕陽に照らされて不気味に照り返す漆黒の身体。ちらちらと不吉に陽光を反射する緑の目。間違えるはずはない。あれは……

「深海棲艦……」

柱島泊地鎮守府は瀬戸内海に浮かぶ小さな孤島にある鎮守府だ。瀬戸内海の構造上、深海棲艦はかなりの距離を内海へと進まなければ辿り着くことが出来ない。それで、この海域は深海棲艦が少ないと聞いている。故に新米提督である俺が配属されたのだとも。

そんな地理上の利点があったこそそのんびり釣りができたわけでもあるのだが、この様子を見ると別に特別少ないわけでもないようだ。

「敵は重巡洋艦1隻に駆逐艦2隻か……」

深海棲艦という化物共は、かなりの数の種類があり、それらが最高六隻集まって艦隊の様なものを成り立たせている。だから、数え方も「隻」だ。

そこで、大本営は深海棲艦の体躯、武器、戦闘スタイルから、奴らを艦艇のクラスに分類した。

駆逐艦デストロイヤー、軽巡洋艦ライトクルーザー、重巡洋艦ヘビークルーザー、戦艦バトルシップ、航空母艦エアクラフト・キャリアー、潜水艦等サブマリン……

かつての太平洋戦争時に登場した艦艇のほぼ全てが、分類に用いられた。今回発見された敵は重巡洋艦、駆逐艦2隻。三隻編成であるところを見ても、外海的主力艦隊から離れてやってきたはぐれ艦隊と言ったところだろう。迎撃は勿論、艦娘に任せることになるのだが……

「司令官！ 私達は何時でも出撃できるわよ！」

「……」

雷が、やる気満々と言った様子で言う。

艦娘を指揮するのは初めてだ。しかし、何故か不安はない。艦艇指揮官時代の経験のお陰だろうか。振り返り、整列する四人と向かい合う。

「よし、第六駆逐隊に命ずる。30分後、鎮守府正面海域に出撃、敵艦隊を殲滅せよ。近海での戦闘につき、戦術指揮は俺が直接取る。いいな？」

本来なら戦術レベルでの指揮は旗艦に任せるべきだ。戦艦娘等なら、戦術指揮のセンスは熟練の軍人にも劣らないだろうし、何より戦場にいるので、伝達がずつとスムーズである。しかし、彼女達は駆逐艦で、しかも経験が浅い。俺が直接指揮する方が効果的だろう。

第六駆逐隊はそれぞれの表現で、戦意を示す。

「暁の出番ね！ 見てなさい！」

「不死鳥の名は伊達じゃない。出るよ。」

「雷、出撃しちやうね！」

「電の本気を見るのです！」

皆やる気満々だ。士気は問題ないな。

「よし、各自用意を急げ！」

4人がさつき釣った金魚の入ったバケツを抱えて寮へ向かうのを見届けて、俺も執務室へ走り出す。

「まったく……まだ着任初日だぜ？ここにいたら退屈とは無縁でいられそうだ！」

元々騒がしいのは好きだ。戦闘だというのに、どこか心が踊る。とにかく今は執務室へ向かおう。

* * *

——10分後、柱島泊地執務室

「んーと、鍵はどれだったかな……あった」

戦いは情報収集から始まる。この鎮守府の戦力は駆逐艦娘である彼女達四人しかないのだ。安易な判断で、彼女達を危険に晒す事だ

けは避けねばならない。

「こんな楽しいのはいつ以来だろう」

と、不謹慎にも呟く。相手が小編成の艦隊だとはいえ、自分自身も、艦娘達も、この出撃で生命を落とす可能性が無いわけではないのだというのに。どうやら俺にも、そういった「軍人の血」とやらが流れているらしい。戦闘に高揚感を感じてしまうのだ。それは、肉弾戦であっても、白兵戦であっても、艦隊戦であっても変わらない。

職業軍人の、救われざる精神だと思う。

俺は人々を守るために軍人になったというのに。こんな醜い矛盾があつてなるものだろうか。

では何故？

そう聞かれれば、「よくわからない」と答えるしかない。

ただ、命を賭して何かをやり遂げようとすることは、人の自己満足感をこの上なく満たす。きつとそういう事なのだろう。

……もうこの事を考えるのは辞めよう。実務的な課題も山ほどある。

「とりあえず崎矢先輩さんには連絡しておこう」

今回の敵は三隻。余程のことがない限り自力（と言っても俺自身が戦うわけでもないが）で殲滅し切る自信はあるが、もし俺の手に余るようなら、彼の力を借りることになるだろう。

彼は、俺の鎮守府のとなり、呉鎮守府で提督を勤めている。規模はこの何倍もあるし、何より彼の人柄は信用できる。

受話器を上げ、コールをかける。

「もしもし、こちら柱島泊地鎮守府。山村少佐です」

「あ、山村君？…どうかしたの？」

若い女性の声が聞こえる。

「お久しぶりです、飛龍さん。崎矢少将はいらつしやいますか？」

電話に応じたのは、崎矢先輩の下で秘書艦を務めている、正規空母の飛龍さんだ。俺が崎矢先輩の元部下であることもあり、結構頻繁に顔を合わせている。そんな飛龍さんは呆れ返ったような声で答える。

「いらつしやるも何も……今そこで昼寝してるんだけど……」

「……悪いですけど叩き起してくれませんか？」

「お易い御用」

少しの間

それを破ったのはドスンと何か重いものがぶつけられる音と、男の悲鳴だった。更に少しの間があった後、飛龍が再度電話に出た。

「叩き起したはいいけれど、今度は気を失っちゃったみたい。ごめんね、用は私が聞くわ」

「は、はあ……」

部下にぶん殴られてのびる提督が何処にいるんだよ……

「で、用は？」

「ああ、ええと、はい。こちらの鎮守府正面海域に深海棲艦が出現しました。そちらの索敵部隊からは連絡ありますか？」

「ちよつと待つてね……あつヤバ！ 加賀さんから一時間前に連絡入ってるじゃない！ 本当に役立たず提督なんだから！」

どうも仕事をサボって昼寝している間に索敵艦隊からの連絡があつたらしい。無線機は結構大きな音がるはずだが、起きなかつたのだろうか？

「えーと、編成はわかりますか？」

んー、と唸る声とページをめくる音がしばらく続く。

「編成は……重巡洋艦1隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦2隻の四隻編成の巡洋艦隊ね」

あれ？ 軽巡？ さっき見た時は重巡、駆逐2隻の三隻だと思ったのだが、俺と見たことが見逃していたらしい。まあ今更1隻増えたところで何も変わらない。

「わかりました。柱島の戦力で対応してみます」

ここで、にわかに飛龍さんの声が厳しくなる。

「気をつけてね。旗艦級も上位級もないけれど、相手は巡洋艦よ。駆逐艦しかいない貴方の鎮守府の戦力じゃ力不足。絶対に無理をさせては駄目よ」

「もちろんですとも」

「必要なればいいけれど、一応呉の第三艦隊を近海に待機させるわ。」

でも、出来れば使わなくてもいいようにね」

「ご協力、感謝します」

そこで、飛龍さんは思い出したように告げた。

「そうそう、その敬語。大して歳も変わらないんだし、いい加減やめてよね」

「慣れないんですよ。次からは努力してみます」

「もう……切るわね」

電話が切れる。これでよし。次は作戦司令室に向かおう。場所は確か、地下だったかな……

* * *

——ほぼ同時刻、駆逐艦寮

出撃命令が出されました。正直少し緊張しているのです。私達はまだ着任したばかり。実戦経験などありません。でも、皆は緊張どころか、楽しそうにしているのです。

さつき司令官さんが釣ったお魚さんを大きいバケツ（“高速修復”と書いてあるのです）に移していた響ちゃんは、

「まあ初陣とはいえ艦娘だからね。一度海に出れば身体は勝手に動くと思うよ。」

と、余裕なのです。

「初陣がこんなに早いとは思わなかったわよね！」

「腕がなるわ！ この雷さまに任せなさい！」

後の姉二人は（何となくわかっていたのですが）ずっとこんな調子なので、やはり不安など感じていないようなのです。はわわ、もしかして緊張しているのは電だけなのですか？

「さあ！ 作戦一時間前よ！」

「リドゥРид（よし）、なら作戦司令室に行こう。司令官も待っているはずさ」

「そうね」

「はわわ、待つて欲しいのです！」

さらに十分後、作戦司令室

「初めて入ったが凄く立派な設備だなあ」

思わず独り言を漏らす。

艦娘と連絡を取るための巨大な無線機とアンテナ、図上演習に用いられるであろう壁掛けの戦術ボード、編成した艦娘の練度や状態が表示されるタブレット端末のようなもの、その他にも戦術指揮に役立つことに相違ない機材が揃っている。ここまで用意してもらって負ける訳にはいかない。まずは、例の端末で四人の装備を確認する。

全員が練度1、初期装備だ。初陣だから仕方が無いのだが、確かにこれで重巡を相手するのは少し辛い。それに、重巡を倒してもまだ軽巡が控えているのだ。

「全員が12.7cm連装砲を装備、暁だけこれに加えて61cm三連装魚雷か……」

いつだったか、崎矢先輩からネームシップの初期装備は優遇されている、という話を聞いたことがある。特III型も、その例に漏れていないようだ。

……魚雷という兵装は、正式名称を“魚形水雷”という。これは艦船に対して凄まじい攻撃力を見せる。船の横腹に穴を開けられるのだ。被弾した船はたちまち浸水し、沈没を逃れられない。不沈戦艦とも呼ばれた大和や武蔵も、敵攻撃機による魚雷攻撃によって沈んだ。

つまり、魚雷は今使える最上級の攻撃力。

この魚雷が切り札になる。そう思った。

「それじゃあ、この三連装魚雷をどうやって重巡にぶつけるか……」

魚雷の射程は短い。正確に命中させるならば、至近距離まで接近しなくてはならない。だが、重巡、軽巡の射程は駆逐より長い。近づくことすら難しいだろう。また、魚雷を叩き込むにしても、練度1の暁の能力で大破、撃沈に持ち込むには全弾クリーンヒットさせることは必須だ。つまり、正面からまともに戦っても勝ち目は無い！

ならばどうする？ 夜まで待って夜闇に紛れて奇襲をかけるか？

いや、不可能だ。駆逐艦4人では夜襲で仕留めきれない。彼女達の負担も考えて、戦闘が明日に持ち越すことも避けたい。それに重巡は夜戦では戦艦以上の脅威となりうる。明るいうちに仕留めておくのが無難だろう。

「まとめると、今からの出撃で重巡を何が何でも沈めて一旦帰投、夜間で艦娘達を休息させて再出撃、夜戦で残った軽巡、駆逐艦を仕留める……こんなところか」

自分で確認するように、呟きながらメモをとる。さて、大梓は決まったが、具体的に重巡に魚雷をぶつける方法を考えなくてはならない。ここを疎かにすれば、昼戦で大破撤退、夜戦どころではなくなるだろう。

すると、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「……あの子達の意見も聞くか」

何かいい刺激を得られるかもしれない。席を立ち、扉を開けて小さな戦士達を迎え入れる。そこに立っていた4人は、既に身体に艦装を纏っていた。

「あれ？ もう艦装を装着しているのか？」

「何もせずに待つのが焦れったくて」

雷が舌を出す。

艦娘には専用の出撃港があり、出撃の際、艦装の装着脱を自動でやってくれるシステムがあるのだが、時間をかけて自分で装着する事もできるのだ。

「まあいい、作戦について大まかに説明する。このボードを見てくれ」
先程考えた作戦の大枠を四人に伝える。皆熱心に聞いてくれた。暁は少しそわそわしていたが。

「……という訳だ。だが、まだ具体的に重巡を仕留める策がない。そこで、お前達の意見も聞きたい。」

考え込む四人。

囷を使うだとか、挟撃するだとか、結構実用的な案が出た。それらも考えなかつた訳でもないが、どちらも少し決定打に欠けるような気

がしていた。確実に仕留める自信もないのに、無闇に兵力を分散させるのは用兵上最も避けるべき事だ。だが、一方では決定力に欠けても、両者の折衷案ならどうだろうか？ このあたりに活路があると思うが……

その時、不意に頭の中で何かが繋がった。

「そうだ！」

4人が一斉にこちらを見る。

「いい事を思いついた」

今の俺は、きつと悪い笑みを浮かべているのだろう。4人が心配そうにこちらを見ている。とにかく、具体的な作戦が定まった。後は彼女達に合わせて、微調整していこう。

出撃は15分後だ。

4話 抜錨！第六駆逐隊！

——鎮守府正面海域

私……駆逐艦響は、妹にあたる二人の駆逐艦娘を率いて、鎮守府正面海域に出現した深海棲艦を搜索している。

「全く……あの司令官山村さんは何を考えているのだろうか？」

思わずぼやく。本当なら、私は旗艦など任されるはずではなかったのだ。

「まあまあ、なにか考えあつての事じゃないの？」

妹の1人、雷が応じる。

「でも、暁は何で今回は待機なのかしらね」

そう、本来なら暁……私の姉が旗艦を勤めるはずだった。特Ⅲ型駆逐艦の一番艦ネームシップである彼女が旗艦になる、というのが自然な流れだったのだ。しかし、現に私は今旗艦として出撃し、暁は鎮守府待機を命じられている。

「敵は4隻……用兵の常道から言つて、こちらも4人以上で挑むのは当然なのですけど……」

用兵学に詳しい電が遠慮がちに呟く。

そう、そうなのだ。こちらは3人しかも駆逐艦しかいない、圧倒的に不利な状況。全員を戦闘に出して全力で当たるべきなのだ。おまけに、索敵が得意な暁（これは最初に、誰も気づけなかった敵艦隊を発見したことからわかる）がいない。もう三十分ほど経つが、未だに敵影を捉えられていないのだ。そろそろ見つかつてもよい頃なのに……

その時、電が声を上げた。

「敵艦隊、発見したのです！ 方角は南西。9時の方向！」

電の指指す先に、悠然と進む深海棲艦が見えた。陣形は……単縦陣！

敵が見つかった以上、余計な考え事は無用だ。任務に集中するとしてよう。連絡用の無線回路を開き、司令官に連絡を入れる。

「司令官、敵艦隊を発見した。敵は南西、9時の方向。単縦陣を組んで

いる」

「了解。敵はこちらに気づいているか？」

「いや、まだバレてないみたいだね。もう射程内だけど、砲撃するかい？」

「いや、まだだ。旋回して敵艦隊を追尾。出来る限り近づけ。無理はするな。照準を軽巡に合わせておけ。気づかれた時点で砲撃開始だ。

いいいなー！」

「Постижение (了解)。雷、電。聞いていたね？」

「わかったわ (なのです)。」

緩やかな弧カーブを描いて旋回。音を立てないように、静かに敵の後背を追いかける。丁度最後尾は軽巡だ。気づかれないように、誰も、一言も発さない。

静かに、静かに……

* * *

……悠に五分はたったであろうか。敵軽巡に触れんばかりにまで接近する。と、その時、ゆつくりと軽巡が振り返った。

慄然とした。その顔はまさに化け物。予期していたとはいえ、一瞬怯む。だが、それも一瞬の事。すぐに我を取り戻して叫んだ。

「Артострел! (砲撃!)」

私の合図で三つの主砲、六つの砲塔が火を吹いた。立ち上る飛沫、荒ぶる波。それが収まった時、私の前に沈みゆく軽巡が見えた。

「軽巡……撃沈」

通信機に向かって呟く。

「よし、よくやった！絶対！絶対に敵艦隊から離れるなよ！」

司令官から鋭い指示が飛ぶ。

私は、司令官や電ほど戦術に明るくない。だが、敵艦隊から離れてはいけない、それくらいのことならわかる。敵の重巡の射程は長い。下手に離れると一方的にあの強力な 8 inch 三連装砲で狙われることは疑いない。寧ろ至近距離まで潜り込む事で、機動力に劣る重巡に力を発揮させない事が出来るだろう。

「三人ともよく聞け。西に岩礁地帯があるのが見えるな？ そこまで

敵艦隊を誘導してくれ」

「誘導？　こんな混戦状態でかい？」

駆逐艦に砲撃しつつ叫ぶ。重巡の装甲は、この貧弱な小口径主砲では貫けない。それがわかっているのに、全員で駆逐艦を集中的に狙う。

司令官は柔らかい声で続けた。

「それほど難しい事では無いさ。敵艦隊を威嚇射撃しながら併走。ゆっくりでいい、西へ針路を変えるんだ。そこで少し速度を上げて引き離す。奴らは奇襲された怒りを抑えられずに猪突してくるはずだ」なるほど、先程の奇襲の心理的效果を用いるのか。短時間で目まぐるしく変わる戦術的条件まで作戦に組み込むなんて、司令官は臨機応変な対応能力に長けた人物らしい。

だが、他に有効な戦術が少ないとはいえ、もう少し楽な方法は取れないものだろうか？

「簡単に言うね、司令官」

「ああ、簡単だろ？」

皮肉たつぷりに言った言葉もさらりと返される。自分で作戦を立てておいてこの言い草なのだ。

だが、この無責任な物言いは私達を信頼しての事だろう。なら、その信頼に答えなくてはならない。

……かつて、Верный^{ヴェールヌイ}（信頼できる）と呼ばれた私なのだから。「さて、やりますか」

針路を西に変え、少し速度を上げる。それを見た深海棲艦達も速度を上げた。かかった！

「雷！　電！　絶対に当たっちゃ駄目だよ！」

「任せておいて！」

「電の本気を見るのです！」

目を凝らすと、僅かに黒い岩のような物が見える。距離はおよそ2kmと言ったところだろうか。三人で、右へ左へ弾をかわしながら西を目指す。付かず離れず、絶妙な距離感を維持し続ける。

駆逐艦の性能を、防空性能や対潜性能に注目して比較する人は多

い。駆逐艦は本来、それを目的として建造されるのだから、当然といえば当然だ。

だが、今回のように大型艦を用いない水雷戦隊、巡洋艦隊クラスの海戦において、駆逐艦の本源的な長所は群を抜いた速力に支えられた機動力にある。小型な上に小回りが効くので弾がなかなか当たらないのだ。

有名な例で言うと、駆逐艦雪風はその長い戦歴の中で殆ど大きな損傷を受けていない。その事から雪風の事を幸運艦と呼ぶ人は多いが、その幸運の要因として雪風が駆逐艦であり、回避に優れていたが大きく寄与していると思われる。

……つまるところ、私達駆逐艦は避け続けることに関してはトップクラスの性能を誇る艦種だ。高練度の駆逐艦娘の継戦能力は下手をすると戦艦娘をも上回ると言う。

まさに、「当たらなければどうということはない」、を地で行くということなのだ。まして、敵の深海棲艦は全て通常種。電探も偵察機も積んでいない。

電探無しに高速で移動する駆逐艦に攻撃を当てるのは至難の技だ。先程の様子から見ても、無駄に乱射してラッキーショットを狙っていることは疑いない。

つまり、こちらが気を抜かない限り当たることはない！

あえて隙を見せたり、時々急加速したりと、不規則な動きで敵を疲れさせながら航行し、大岩がハッキリと見える距離まで接近する。

「大岩まであと500メートル。司令官、どうするつもりだい？」

「……皆、ちよつと無理させるぞ。雷、電は最高速を維持したまま反転攻撃、駆逐艦2隻を何が何でも足止めしろ。倒せなくていいから絶対に響を追わせるな」

「任せておいて（なのです）！」

雷、電が反転する。駆逐艦に砲撃を浴びせながら、挑発するように逆進し、駆逐艦2隻の航行を止めた。だが、重巡洋艦は一人になった私を追い続ける。さらに司令官から指示が飛んだ。

「響、お前にはもつと危ないことをさせるぞ」

「問題ないよ、私は艦娘だ。それに、いざとなったら『お守り』がある」

そう言うと、彼は感心したように笑う。

「そりゃあ頼もしいね。お前は重巡の誘導を続けてくれ。大岩まで辿り着いたら岩を使って砲撃を防ぐんだ。誘導した後は任せろ」

「Постижение（了解）。でも、それで仕留めきれなかったら恨むからね」

「肝に銘じておくよ」

司令官は神妙に答えた後、声を厳しくしてこう付け加えた。

「誘導中に航行不能になったら万事打つ手がない。無茶なのは承知だが、絶対に被弾するなよ」

自分で無茶な作戦を押し付けておいて絶対に被弾するな、というのである。我儘なのか、素直なのか。なんだか急に親しみが湧き、笑いがでた。

「ふふふ、作戦が終わったらウオツカの1杯でも奢ってよね」

「3杯は奢ってやるさ……」

彼も笑ったが、何かに気づいたように声色を変える。

「ん？ まてよ。お前から未成年じゃねえのか!？」

「さ、そろそろ誘導に専念しなきゃね」

うるさい司令官おとなを無視して通信回路を閉じる。ここからは私の見せ場だ。

「さあ、不死鳥の名は伊達じゃない。やるよー！」

電探がないとはいえ、先程より精度が高まった砲撃が飛んでくる。的が二つも減ったのだ、集中的に狙うことが出来るのだから当然だ。しかし、当たるわけにはいかない。もし当たれば一発大破だ。

海の上を、まるでフィギュアスケートでもするかのように駆け回る。航行装置のスロットルは全開、立ち止まることは即ち死を意味する。右へ左へ、弾幕の雨をかわしながら大岩に接近する。

あと……50メートル!

その時右足を鈍い衝撃が襲った。やられたか？

いや、まだ小破だ、大丈夫。砲弾が掠ったらしい。だが、身体には

なんの損傷もない。

艦娘の艦装は、大破状態になるまでは被害の殆どを吸ってくれるのだ。中破以前は、出来ても擦り傷程度。だから、身体の一部を失うような大怪我を負って帰投することはほぼない。

もちろん、その「ほぼ」の字をとることは出来ないのだけれど……とにかく、身体への被害はない。それはよかったが、それとは別に深刻な被害が出ていた。右足の航行装置がやられたようなのである。もはやほんの僅かな推力さえ生み出さない。平衡感覚に優れる艦娘とは言え、流石に片足の航行装置のみでこの揺れる波の上を航行し続けるのは困難だ。バランスを崩し、波の上に投げ出される。

「あと……5m……」

逃げきれなかった……

重巡級深海棲艦の主砲が、ゆっくりと私に向けられる。その時だ。「よくも妹達を傷付けてくれたわね！ もう許さない、許さないんだから！」

耳に飛び込んできた姉の声。それは、これまでに聞いたどの声よりも頼もしく、力強く、私の耳に響いた。

最高速まで加速した暁の魚雷発射管から、61cm三連装魚雷が打ち出される。重巡洋艦も、かなり加速していたため回避行動が遅れた。

巨大な水柱が上がり、その中心に立つ姉の姿は、夕陽に美しく照らし出された。

暁が通信回路を開き、私も慌ててそれにならう。

「重巡洋艦、撃沈したわ！」

「よくやったぞ暁！」

「流石ね（なのです）！」

嬉しそうに報告する暁と、歓喜の声で埋め尽くされる通信回路。

……啞然として立ち上がれない。

完全に忘れていた。まだ暁が控えていたことを。まさか、こんな形で出撃させていたなんて……

耳元に添えた無線機から、何処か気の抜けたような、でも何処か私

を安心させる声の流れ出した。

「4人とも、良くやってくれたね。一旦母港へ帰投してくれ。補給とドック入りを行う」

……こうして、私達の初陣は幕を下ろした。

* * *

——柱島泊地鎮守府母港

作戦が成功した。

小破が2人出た上、駆逐艦2隻を取り逃したので、完全勝利とはいかないが、艀装に内蔵された戦術コンピュータの判定ではA勝利。正直言つてとても嬉しい。特にする事もないので、母港まで敢闘してくれた艦娘達を迎えにいった。

先頭の暁が大きく手を振りながら、響は少し怒ったように腕を組みながら、雷は、大声で俺を呼びながら飛び跳ねて、電は被弾した左手を抑えて、少し元気が無さそうに、それぞれ帰投した。

日本海軍では、出撃の度に艦娘達の中から、特に敵に被害を与えた者をMVPにする、という決まりがある。まるで幼稚園や小学校のような発想だが、思いの外これのために頑張る艦娘達も多く、戦闘のモチベーション向上効果が出ているようなのだ。また、何故かMVPを取った艦娘は成長……つまり練度の上昇が速い。案外馬鹿に出来ないシステムである。

……そして今回のMVP、重巡を仕留めた暁が、帰投するなり自慢する。

「どう考えても、暁が一番って事よね!」

無邪気に喜ぶ暁に思わず笑みを漏らす。

「皆、本当によくやってくれた。この後響と電は入渠、暁と雷は補給に入ってくれ。三時間後、再出撃し、掃討戦に移る。本当によくやってくれた!」

まず暁に向き直る。

「暁、お前が今回のMVPだ。響が引き付けていたとはいえ、魚雷を全

弾命中させたのは見事だったよ」

頭をなでる。

「えへへー……って！ 頭をなでなでしないでよ！ もう子供じやないって言ってるでしょ！」

おっと、お子様レディーの扱いは難しい。次に響と向き合う。

「響、MVPは暁だったが、あの危険な重巡を誘導した功績はMVPにも勝る。旗艦も立派に勤めてくれたし、文句ナシだ」

「司令官、それはいいんだけど……」

なんだか怒っているようだ、仁王立ちの様な格好で響が言う。

「何で作戦を教えてくれなかったんだい？ 大岩に暁が来ていたなんて……」

「そうよ！ 私もあそこに重巡が来るなんて聞いてなかったわ！」

やっぱりそれに怒ってたのか……なんとなく予想はしたただけどね。

佐官の制帽を脱いで、長めの黒髪をかき回す。この制帽は、かつて日本海軍が海上自衛隊と称していた頃のデザインとほとんど異ならない。

「それはあのー……ほら、敵を欺くにはまず味方から、と言うだろう？」

苦し紛れの言い訳に聞こえただろうかだが、実際そのつもりだったのだ。

もし、暁が大岩に待機している事を響に伝えていたら、響は最初から魚雷を当てる補助としての誘導を行っただろう。俺自身が元々強襲揚陸部隊所属の白兵戦闘員だったからわかるのだが、相手を誘うおうと頭で考えて動いていると案外その思惑はバレる。

だから、あえて響にただ逃げる事だけに集中させることによっては不規則な誘導進路をとらせ、魚雷で狙われているということを気づかせないようにした、という訳である。

こうして詰め寄られると威厳を保って答えることが出来なかったが、結局重巡は暁に気付かず、ほぼ最高速で響を追いかけた事で魚雷を回避出来なかったのだから、なかなか効果があったのではないかと

思う。

そう俺の考えを伝えたが、響は不服なようだ。

「だが、正直言つて響一人に重巡の誘導をさせたのは危険だった。引き受けてくれて本当に助かったよ、ありがとう」

響にも言った通り、MVPを取ったのは暁だが、働きでは響の方が勝るとも言えなくはない。それ程、危険な命令だったのだ。

「とにかく、今後はちゃんと相談してよね。これ、返しておくよ」
少し照れくさそうに響が言う。

「覚えておくよ」

手渡された装備を受け取る。

「司令官、何それ？」

それを見ていた雷が聞いてくる。

「ああ、これかい？　“お守り”だよ」

「お守り？　確か、戦闘中も通信でそんな事言っていたわよね」

手にした装備を雷に手渡す。雷は何か理解できない様子だったが、後ろから見えていた電が息を呑んだ。

「応急修理要員……」

「そ、練度1の響1人に誘導させるのは危険すぎるからね。まあもしこれを使う事になったとしても響の傍には誰もいなかったから、ほんの少し轟沈を遅らせる事しか出来なかったらうけど……」

笑いを収める。

「ほんの少しでもいい、生存率を高められるというのなら積まない理由はない。そうだろうか？」

「でも……いつの間？」

「出撃の直前だよ。駆逐隊の編成任務があったから受注したんだ。達成報酬がダメコンだったって訳」

ダメコンは艦隊で最も大破する可能性の高い者に持たせるのがセオリーだ。今回の作戦では意図的に響を囿役としていたので彼女の大破率が最も高かった事になる。現に足を砲弾が掠っている、足の速い駆逐艦に弾が当たるということから、激しい闘いぶりが思われる。

「つまり、最初から轟沈の可能性まで考慮に入れていた訳だ」
つくづく皮肉に思う。彼女達を沈めるかも知れない前提で動いたのだ。

本来、こんなものを積んで出撃しなくてはならないような作戦など辞退するべきだ。例えば大本営からの命令だろうと、評価が下がろうと、世間からの非難を浴びようとも、避けねばならない事。

何故出撃させた？

あの時、もう同じ過ちはしないと、心に誓ったというのに。出撃を命じた時、俺の心はこの上なく高ぶっていた。

ふざけるな

何故それで平然と、今笑っていられる

彼女達は死んだかもしれないというのに

殺したのは自分かもしれないなかったというのに

彼女達はそれに気づいていない。落日に煌めく綺麗な瞳が4対、こちらをのぞいている。

彼女達は知らないのだ。一步間違えれば、目の前にいる、今日会ったばかりの男に殺される結果となっていたことを。

「何故そんな顔をするんだい？」

この年齢の女の子にしては低めの声が入る。

「まるで嬉しくないような……何か深刻な問題でも見つかったかい？」

「いや……何でもないさ」

ぞくりとする。この子には、昼に何度も胸のうちを見透かさされ驚いたものだが、まさか今の思いまで読まれているのか。

そう思ったけど響は肩を竦めてこう言った

「今の司令官の表情からは、何も読み取れないよ。強いて言うなら、嫌悪……かな」

「……」

そう、当たっている。闘うことが好きでたまらない自身に対する、言うなれば自己嫌悪。そんな俺に、響がかけたのはこんな言葉

「私達は闘った。そして勝った。それだけでは駄目なのかい？ 私達

の鬪いは無駄だったのかい？」

違う。頭を振った。

「そんなことない。大戦果だ。巡洋艦隊の無力化など、駆逐隊だけで出来るものじゃない」

「それなら笑いなよ。私達の鬪いを否定しないで」

「そうよ、私達は勝って今ここにいます。それでいいじゃない！」

響と雷がそういった。暁と電は何も言わないが、同じ思いなのだろう。戦果を挙げたにも関わらず俺の表情が優れないのが気に食わないようだ。

気付かされた。そうだ、違う。自分の落ち度ばかりに目がいつていたがそうじゃない。

そもそも艦娘とは、かつての艦船の魂の海を、人々を、世界を守りたいという強い意志から産まれていると言う。その彼女達が自らの生命を投げ出して、自らが生まれた意味を肯定するべく、そして人々を守り、海を取り返すべく鬪って、そして勝ったのだ。

彼女達にとって「鬪い」は、皮肉な事ながらそのまま彼女達の生きる意味となっている。それに勝利して、言わば自らの負った責任を立派に果たして帰投したのだ。

俺の心情はともかく、彼女達は満足している。

自らの「鬪い」に、背負う責任に

「……そうだね。申し訳ない」

素直に恥じて、思い切り笑った。自分の事しか見えない己が酷く小さく思えた。

でも、寧ろ嬉しいな。きつとこの子達は。いやこの子達に限らずこの先出会う艦娘達は、俺の視野を広げてくれる。その時、控えめに電が声をあげた。

「あの……とりあえず艦装への補給と入渠をしませんか？ それとご飯も……」

「あつ、私もうお腹ぺこぺこー！」

「あつ、暁もー！」

雷と素早くアイコンタクトをとる。「こっちは任せろ」この事。

「よし、んじやあ被弾した響と電は一番ドックと二番ドックを使って入渠、暁と雷は補給、入渠組の2人も後で合流するように……雷、頼んだよ」

「安心して。私がいるじゃない！」

「ちよつと、何を雷にお願いしてるのよ！ レディーは補給も完璧なのよー！」

突っかかる暁を苦笑しながら受け流す。

「はいはい……俺は今から報告しに行くから、レディーは大人しく補給しててね」

そう言いつつ頭を撫でる。

「うう……また子供扱いして……」

埒が明かないので暁を雷に預けて、俺自身は執務室へと足を向ける。崎矢^先さん^輩に連絡を入れなくては。今回の戦術について評価も欲しい。

彼は俺の戦略、戦術の師匠でもあるのだ。実は今回の作戦も、彼がかつて指揮した殲滅戦を応用したのであって、俺のオリジナルではない。多少、スパイスを、それも苛烈な奴を加えたが。

執務室に入り、受話器を上げる。深海棲艦の通信攪乱が続いている現在、このような旧式の固定電話もまた、情報伝達の中枢を担うようになった。スマホや、最近開発された次世代型の通信機器もあることにはあるが、高価格な上に、電波が安定しない。

「もしもし、こちら柱島泊地鎮守府です」

「もしもし、山村君？ 飛龍よ」

電話に出たのは、またも飛龍さん。

「その様子だと、深海棲艦の撃退に成功したのね？」

「ええ、先程艦隊が帰投した所です」

「第三艦隊からの報告で聞いたわ、巡洋艦2隻撃沈で被害は小破2ですって？ 凄いいじゃない！」

ありがとうございます、と型通りに例を述べて、本題へ移る。

「戦果報告をしたいので崎矢さんとお話したいのですが……」

「わかった、かわるわね」

3秒ほど、受話器からゴソゴソと人の動く音が漏れ聞こえてくる。「あいよ、こちら呉鎮守……うおあちつ！ も、最上！ 幾ら何でも熱々コーヒーひっくり返すのは不味いぞ！ ……ああ、俺は大丈夫。それよりお前の制服にベツトリだ。落ちねえぞこれ……」

第一声から騒々しい、このどこか眠たげな声の主……

「……ご無沙汰してます。崎矢少将」

「ん、ああわりい取り込み中だった。久しぶりだな、山村」

そう、この人が崎矢^{サキヤ}成仁^{ナルヒト}少将。日本で最も若い将官であり、2番目の戦力規模を持つ実力者である。

「さて、報告はすでに聞いている。だが巡洋艦隊を小破以下で撃破するのは、用兵家として非常に興味深い。早速だが是非話してもらおう……あ、鈴谷拭いてくれてありがとう。もう大丈夫だよ……いや、もういいって！ 後ろの飛龍がスゲェ睨んでるからッ！」

「……」
なんだがよくわからないけど、幸せそうだからいいか。

* * *

崎矢さんは戦術に関する話になると、教師のような話し方になる。「それで、どのような戦術だったんだ？ 重巡洋艦を落とすのは並の努力じゃすまないはずだ」

何とか艦娘達をなだめた崎矢さんが問う。

「そう言って……先輩なら昼戦だけで全敵艦隊撃沈まで出来たと思いますよ」

「まあな、だが、俺は言わば別格だ」

さらりと自分を別格だ、と言う先輩。このような豪胆さは、俺が真似出来ない所である。勿論、それに伴う実力と実績が、それを可能にしているのだが。

「3年前のインド洋艦隊決戦。覚えていますよね？」

「ああ、勿論だ。西アジアの叛乱勢力が起こした大規模な艦隊戦だったな」

それは、その名の通り世界を束ねる連合国軍とそれに服従する事をよしとしない叛乱勢力が、インド洋で戦った海戦だ。

この頃、俺は仕官学校を卒業して一年ほどの新米中尉で、当時に中佐だった崎矢さんの元で副官を務めていた。当時、深海棲艦は出現初期の勢力を落ち着かせ、活発には活動しておらず、同様に艦娘もほとんど戦っていないかったのだ。

それまでの深海棲艦による圧力が収まったことにより、それに対する不満、怒り、悲しみが、はけ口を失って連合国軍に向けられたのだと、俺は解釈している。俺は副官という立場上、その作戦案に触れる機会があったのだ。

つまり、この時崎矢先輩が指揮したのは艦娘ではなく実際の艦隊。しかし、艦娘を擬人化した艦と捉えれば、深海棲艦にも有効な作戦だと思っただのだ。

「あの時先輩が実行した作戦を少し、艦娘向けに改変したんですよ」
「へえ、どんな風に？」

崎矢先輩は楽しそうだ。

「あの時、崎矢先輩はわざと敗走したように見せかけ……勿論被害を最小限に抑えてですが、敵の慢心と、油断を誘い、敵艦隊を岩礁まで誘き寄せました。そして、岩礁の影に隠していた艦隊で勢い余って猪突してきた敵艦隊を包囲殲滅……回避の出来ない敵艦隊は壊滅しました」

「懐かしいねえ。そんな作戦立てたっけなあ？」

「今回は、艦隊を艦娘に置き換えて考えた訳ですが、そうになると4人では戦力が少なすぎました。先輩があの時敗走のフリを出来たのも、岩礁で迎撃出来たのも、多数の艦艇あつての事です」

「確かに、艦娘達に敗走のフリをしろつたって無傷では済まないからな。その後の戦闘を考慮すると被弾は避けたいところだ」

先輩の察しの良さに、受話器を持ちながらつい頬が綻ぶ。この人はやはり天才だ。

「ええ、だから今度は敵の慢心を誘うのではなく、その逆の思考回路を利用しました。深海棲艦だって感情の様なものは持っている。そこを利用したんです」

「具体的には？」

間髪入れない質問に少し冷や汗がでる。容赦ないなあ。呼吸を整え、再度説明する。

「敵艦隊の針路を予測して響、雷、電の三人を背後に回らせたんです。彼女達には伝えませんでしたけどね。それで背後を取った後は至近距離まで近づいて軽巡級を攻撃、不意打ちを食らって、激昂した^{深海棲艦}化け物達は、彼女達を全速力で追い回した……でもまあ正直、この一回目の砲撃で軽巡を一発撃沈に持っていったのは、単なる幸運^{ラッキー}でしたけど」

「なるほど、怒り狂った奴らを誘導して、その先で『切り札』が待ち構えている訳か」

やはり、暁を切り札として控えさせていた事までお見通しだ。

「流石、お察しがいい。その通りです。駆逐艦二隻を雷、電の二人に足止めさせて、ダメコンを詰んだ響はそのまま重巡を岩礁まで誘導。飛び出した暁が四連装魚雷を叩き込んで重巡撃破^{チエックメイト}、です」

受話器の向こうで、提督がうーん、と唸り声をあげているのが聞こえる。小さく笑い声が聞こえてくるのは、さっきの鈴谷とかいう艦娘だろうか、飛龍さんの声も聞こえるので、まだ言い争いをしているようである。

「なかなか良く出来ている。ただ、響が一人で誘導したという所が気になるかな。ダメコンを積んでいるとはいえ、危険極まりない」

わかっている。それは自分でも気づいていた。

「どのように改善すれば良いでしょうか」

「そうだねえ……お前の策は凝りすぎだ。俺だったら単純に軽巡轟沈の後敵艦隊を真っ直ぐ横切って、全速力で逃げるね。横切る時に駆逐艦を落とせたら尚良い。駆逐艦の速力があれば、重巡が反応する前に射程外へ逃げ切れるだろう」

成程……それならこちらの被害は0だ。しかし……

「重巡を生かしておいては後々厄介では？」

「いや、そうでもないさ。例え巨大な戦艦だろうと、強力無比な空母であつても、随伴艦がいなくなってしまう程大きな脅威では無くなる」

「…… 将を射んとせば先ず馬を射よ」ということでしょうか」

「そういうこと」

確かに、強力な艦になるほど、いざ随伴艦を失った時の弱体化は激しい。軽量艦の支援あってこそその主力だ。

「それに、長期戦を見越すとしたらこの戦法は更に有効性が増す。これもわかるな？」

「……敵の燃料ですか？」

「正解」

そう答えると満足そうな肯定の声が返ってきた。

つまり、随伴艦を落とす事で、主力である重巡への補給ラインを断ち切り、孤立させるのだ。そして、航行を続けて燃料が無くなれば、深海棲艦は撤退しなくてはならない。また、ノーマル級の重巡り級は水偵を積んでいない。援軍を呼ぶことさえ叶わなくなるだろう。

流星は崎矢さん。その作戦は、雑に立てられたように見えて恐ろしく緻密で、正確でそれでいて合理的だ。彼はあえて、最も強い敵である重巡と対峙しないと言うのだ。

大抵の提督は、〃どうやって相手を倒すか〃を考える。それは俺も例外ではない。しかし彼は、〃どうすれば敵を無力化出来るか〃を考える。

発想が根本から違うのだ。

彼は完全な勝利にこだわらない。敵は、徐々に徐々に削り取られ、気づかないうちに闘えなくなり、敗北する。その手腕はまさに魔術師。

「ありがとうございます。とても勉強になります」

改めて自分の師の知略を目の当たりにし、感嘆を禁じ得ない。それでいて普段はあんなに飄々としているのだから、そのギャップにもまた驚く。

「おうよ、今度時間が出来たら柱島そっちに顔出すよ」

「極上の酒を用意しておきますよ」

「有難いねえ……あ、そうだ山村」

「何でしょう」

ちよつと間を置いて、崎矢さんが言う。

「何だかとても腹が痛いんだが、何かを心当たりないかな？ それと、何故か昼の記憶が飛んでてな」

「気のせいですよ、飛龍さんにでも聞いてみてください。切りますよ」
笑いをこらえながら受話器を置く。そりゃ飛龍さんの渾身の一撃を喰らえば痛いだろうね。その時、胃が盛大に抗議の声を挙げた。

「そっぴや昼から飯食つてなかつたなあ……」

そう呟いてみると、様々な、現実的な課題が見えてくる。だが、さしあたって今は、この空腹を満足させることにしよう……

執務室の鍵をかけ、食堂へと足を向けた。

5話 着任。パーティー

食堂へやってきた。

腹が減ってはなんとやら、これからの掃討戦に備えて力を蓄えておく必要がある。それは、艦娘も人間も変わらない。

階段を降りるた先にある食堂は、だだっ広い広間に楕円状の机がいくつか並んでいるだけだ。少し寂しいような気もするが、現状食事をするのに景観は関係ない。それに、これから艦娘が増えていくにつれてここも賑やかになっていくことだろう。

「司令官！ 司令官もご飯？」

左の方から呼びかけられる。隅の円卓に、暁と雷が座っていた。

「よお、お前ら。補給に行ったんじゃないのか？」

「補給は妖精さんに任せればいいわ。私達はそのままこっちへ来たの」

「そうなんだ（妖精さん？）せっかくだし、一緒に頂いてもいいかな？」

「もちろんよ」

円卓を囲うように置かれた六つの椅子の一つを引き出す

「ところで、妖精さんって言うのはなんだい？」

「補給は妖精さんに任せればいい」とはどういう事か聞いてみると、二人の顔が「信じられない」という表情で固まる。

「え!! 司令官、艦娘達の提督になるって言うのにそんな事も知らないでいたの?」

「司令官、士官学校出てるんでしょ? 習わなかったの?」

一気にまくし立てられる。どうやら海軍の軍人である以上、知っていて当然のことらしい。あまりの剣幕に、思わず目を逸らし、頭をか

く。

「いやあ、戦術論と白兵戦技の授業以外はずっと寝てたからなあ……」

「いやいや、そうでなくても一般常識よ」

二人に呆れられる。

説明してもらったところ、「妖精さん」とは、鎮守府に住み着いている不思議な小人の事を言うらしい。

艦娘の建造、艦装の開発、整備、艦載機の搭乗員及び艦装の操作要員や、応急修理要員、食事の世話やドックの整備など、その他艦娘に関わる雑務をこなしてくれる、まさに妖精のような存在だ。今、厨房で食事を作ってくれているのも妖精さんなのだという。……ちなみに二人曰く、ちゃんと「さん」付けで呼ばないと気分を害するらしい。

ありとあらゆる仕事をさせ、酷使しているが、政府からちゃんと給料（一体何に使うというのだろうか）が降りているし、また、妖精さん達も結構やりがいを感じて働いているようなので、決してブラック鎮守府という訳では無い。

艦娘と同時期に発見された時、かなり世間に騒がれたらしいが、その後艦娘と同様に人々の生活に溶け込んで言ったのだという。今では妖精さんをモデルとした子供向けの人形まで販売されているというのだから驚きだ。

だが、世間が大騒ぎした、と言っても当時俺はまだ年端も行かない子供だった。知らなくても仕方が無いのではないだろうか。

「いやいや、それでもこの歳まで知らないってありえないわ。司令官、ニュースとか新聞とか見ないの?」

「士官学校に入ってからには全く見なくなっただな。結構忙しかつたし」「全く……司令官はこの鎮守府を預かっているんだからね。それくらい知っておいてよね」

「ぶんすか」という擬音付きでふくれる暁と腰に手を当て、「そんなんじやダメよ」と全身で言う雷。思わず苦笑してふと振り返ると、地面を料理が走ってきた。ひとりでに、である。

「どうやらオムレツのようだ。しかも2人前。ぴよん、と飛び跳ねてテーブルに乗る。皿を持ち上げているのは二頭身の、本当に手乗りサイズの小人だった。

「へえー、君が妖精さんかい?」

妖精さんは少し首をかしげて見つめ返したが、すぐに納得したように頷き、こう答えた。

「はじめまして、ですね! しれいかん! そう、わたしはしよく

どうようせい。このちんじゅふであなたたちのしよくのおせわをたんとうさせていただいています！」

一息に言い切る。

駆逐艦娘たちよりさらに幼い口調。まさに言葉の覚えたてのような話し方だ。聞いているこちらとすれば、文字を全て平仮名に変換したい気分である。しかし、単語や文法は完璧なので、すぐ違和感を感じる。食堂妖精、と名乗ったという事は、妖精にも役割分担があるのだろう。

「よろしく頼むよ。君達に支えてもらう事は多いだろうからね」

“こちらこそよろしくおねがいます！”

ぺこっとお辞儀する。可愛いな、今度人形買おう。

“しれいかんもなにかたべていきますか？”

「そうだね。料理はおまかせするから、美味しいのを作っておくれ」

“わかりました！”

ぴよんと円卓から飛び降りるとまた厨房の方へとかけていった。

「小さくて可愛いね」

「でしよう？人気者なのよ」

「これから何かとお世話になるな。あ、気にせず温かいうちに食べろよ。2時間後には再出撃だからな」

「はい」

——十分ほど遡って入渠ドック

鎮守府には、入渠ドックという施設がある。艦娘が艤装を外せば人間とほぼ違いがない、という事は周知の事実だ。だが、“ほぼ”とあるように、僅かな違いはある。艦娘がもつ不思議な特性を利用したのがこの入渠ドックなる施設だ。

艦娘は、39℃に保たれた濃い塩水に浸かることで、自然治癒力が爆発的に高まるのだ。この特殊な湯に浸かると、例え体の一部：例えば腕が無くなっていたとしても、数時間で完全に回復する。

これだけならただの急速回復装置なのだが、入渠ドックの機能はそれだけに留まらない。なんと、艦娘の身体だけでなく、艦装まで完璧に修復してしまうのだ。

これには有力な仮説がある。艦娘の艦装は、常に艦娘の身体と艦装の状態をデータ化して保存し続けており、艦娘本体が入渠ドックの特異な湯に浸かることでそれらの情報が引き出され、艦娘の肉体及び艦装は、艦装に保存されたそれぞれが「健在だった状態」のデータを元にして再構築される……というもの。

明確な根拠がある訳では無いが、解体処分……つまり、艦装との同期を断ち切った艦娘は同じ入渠ドックの湯に浸かっても肉体の治癒がなされなかったこと、艦娘本体の回復速度は艦装の回復速度と一致していることから、艦装に鍵が隠されている事は確実視されている。

一部では人間に応用することが出来ないかと躍起になって研究する者もいるらしいが、そもそも艦娘の特性を用いた回復方法なので、汎用性はないと考える医者、学者が多い。

ちなみに、何故塩水なのかは未だ説明できていない。『艦娘達の前世である艦艇の魂、記憶が、海と同じ成分と反応し、作用している』という説が、オカルトじみている上に証拠もないが一番論理整合するという事で一般に認知されている。というより、これの他に仮説の立てようがなかったという方が正しいだろう。

施設内には、大浴槽が一つ、中浴槽が一つ、小浴槽が二つ設置されており。この内の小浴槽二つに、例の濃塩水が満たされている。この浴槽は維持するのも大変なので、今は二つが限界なようだ。

もつと大規模な鎮守府ともなると、増設工事を繰り返して、沢山の浴槽があったりする。例えば現在日本一の規模を誇る横須賀鎮守府では、ドックを維持限界まで拡張し、最大で6人同時入渠が可能だという。これは、建造直後、初期艦研修として少しの間崎矢少将の元にした電から聞いたことだが、横須賀に次ぐ規模の呉鎮守府にも同じ6つの浴槽があったらしい。

……さて、この2つの小浴槽は艦娘達の回復施設である。では、残

りの二つの浴槽は何なのか、というと、ずばりお風呂である。被弾しなかった艦娘、遠征帰りや、演習、トレーニング帰りの艦娘達など、怪我をしていない者はこちらに入って疲れを取る。もちろん、洗い場も付いているので、汗を流すだけの者もいるが。

そして現在、治療能力向上効果のある浴槽は、私こと響と、妹の電で埋まっている。私の背後にある電子パネルには00:11:52の数字が表示されている。電の背後のパネルにも、同じように00:12:34の数字。これは修復完了時間を算出して、リアルタイムで表示しているのだ。執務室や作戦司令室にも壁掛けの電光掲示板のようなものがあり、修復完了は鎮守府のどこにいても察知できるようになっているんだとか。

「初めて入ったけど、なかなか心地いいものだね」
「なのです」

さっきまで元気のなかった電も、傷が癒えてきたのか、二言三言交わすうちに笑顔を見せるようになった。でも、やっぱり姉として彼女の不安は取り払ってあげたい。

「電、出撃中に何があったんだい？」

そう問うと、電は怪訝そうにこちらを見返した。

「何が……？」

「皆心配していたんだよ。出撃以降電の元気がないって」

「……」

「雷なんて特に、私が被弾させちゃったから」、なんて言ってたよ」

「……」

電は何も答えない。

答えが用意出来ていないという訳ではないようだ。だが、言い出せないことを無理に聞き出すメリットも見いだせないなので、この話はやめることとした。

「艦装のメンテも妖精さんに任せてあるし、修復が終わったらご飯だね。昼から何も食べてないから、流石にお腹が空いたよ」

「そうですね。暁ちゃんと雷ちゃんは、もう食べ始めているのでしよ
うか」

「多分ね。あの二人はせっかちだから」

「本当、見ていると心配になるのです」

我先にとかきこむように食べる姉妹艦達が容易に想像出来て、二人で声を上げて笑った。

「ところで響ちゃん。ご飯の後の掃討戦の事なのですが……」

「電は気が早いね。私たちに休む暇も与えないのかい？」

「まさか。戦術について話したいことがあるのですよ」

くすくすと可愛らしく笑う。彼女の頭上のタイマーは00:05:00を過ぎた所だ。私達もこれを終えたら食堂に行こう。電の悩みの種は分からずじまいだが、いずれ自分から話してくれる事だろう。それまでは……

* * *

最初の出撃から約3時間後。時刻はおよそフタマルマルマル…午後8時。正確に言うとな午後8時4分に、私達は再出撃を命じられた。

旗艦は引き続き響が務める。暁が一瞬不服そうな顔をしたが、妹の顔を立てるのも姉の勤めだと納得したようだ。

今度の出撃はあっさり終わった。敵は二隻で、こちらの半分。おまけに手負いだ。能力で劣っていた上に、人数不利だった無茶な昼戦とは大違い。視界は悪かったが、今回は索敵が得意な暁がいる。出撃後10分ほどで敵艦隊を発見することが出来た。

敵艦隊は航行能力を奪われた中破駆逐艦を砲塔をやられた小破駆逐艦が引きずってなんとか戦線を離脱しようとしていたものらしかった。これでは実質一隻のようなものね。

司令官は今回の指揮を響に任せている。通信回路を開いてはいるが、何も言わない。響の指示が飛ぶ。

「敵はこっちに向かってきている。雷と電は敵の右舷を最大戦速で前進、背後に回って！ 私と暁は敵の進行に合わせて後退しながら迎撃。いいね？」

なるほど。と、思わず1人で頷いた。

前から砲撃されれば敵はそれに応戦せざるを得なくなる。私達が背後に回ろうとしても、それを阻む事は出来ない。それを無理に阻止しようと右に旋回すれば、今度は正面の響達からの砲撃に無防備な側面を晒す事になる。

暁と響が、威嚇射撃をしながらゆっくり後退していく。敵駆逐艦は、それに釣られて少し前進する。まんまと響の罠にかかったようだ。ここで響の意図が読めていたならば、最大速力で後退し、逃げるべきだった。しかし、そうしなかった。ならば、私達の見せ場よね。

「電！ 私達の戦闘。思い知らせてあげましょう！」
「了解なのです！」

速力を上げる。電もそれにならう。敵は旋回しなかった。姉二人が砲撃を強め、振り返る暇を与えない。あつという間に敵は前後から挟撃される形となった。

「てーっ！」
ドンツ、と重い音を立てて放たれる弾。一発外したが、もう一発は中破艦に当たり、轟沈させる。その間に、響が小破艦を中破させ、電がそれにトドメをさした。

* * *

——数十分後、柱島泊地母港

艦隊帰投。戦果は駆逐艦二隻撃沈。被弾なし。判定：完全勝利S。書類に書き留めながら司令官が言う。

「皆お疲れ様。文句無し of 戦果だ、それにしても……」
そしてため息をつくところ続けた。

「敵の航行速度に合わせて2人が後退、後のふたりが逆進して前後挟撃……響、あの戦術は見事だった」

「ふふふ。実は電の受け売りなんだけれどね」

響がクスクス笑う。そう、この作戦の立案者は電だったのだ。司令官が大きく目を見開く。

「へえ、電が……すごいなあ、あの動きには思い至らなかったよ。後で

じっくり話を聞かせてくれ」

「もちろんなのです」

そういつて電を撫でる。次に私に向き直った。

「今回のMVPは雷だ。作戦も見事だったが、それを完璧に実践するのは容易じゃない。よくやったぞ」

やはり彼は私の頭を撫でた。

「そうよ！ もっともーっと私に頼っていいんだから！」

司令官に限らず、人に頼りにされるのが頼りにされるのが、私はたまらなく嬉しい。自分の存在意義をはつきりと感じるからできるから。

「暁、響もお疲れ様。柔軟な動きで敵を誘えたのは非常によろしい。あえてケチをつけるなら暁、お前は誘い出す時点で魚雷を撃つておくべきだったな」

「たっ、倒せたからいいじゃない！」

「ああ、もちろんだよ。でも、今回は倒しきれたけど、もし主砲で仕留めきれなきや被弾してたかもしれないだろ？ 使える武器は出し惜しみしちやダメだ」

司令官は一人一人にコメントをつける。私や電のようにいい評価もあるし、暁のように、少し手厳しい事を言うこともある。だが、それは彼の指揮官としての誇りと、私達を出来る限り成長させるための配慮がそうさせているのだと思う。

「……よし、もう暗くなったことだし、早く風呂と補給済ませてこい」
「二はーい」

元氣よく答えた3人が駆け出す。今回は被弾していないから、補給と言っても艤装を補給担当の妖精さんに渡しに行くだけだ。駆け出す3人の後を追おうと思つて、ふと立ち止まる。昼戦の時点から気になつていたことを思い出したのだ。

「ねえ、司令官」

「うん？ 何だ」

司令官が、執務室に向けた足を止める

「そんな大事な事でもないんだけどね。司令官は私達が被弾する事を

凄く嫌がってるみたいでちよつと気になったの」

「んー……」

彼は面白そうな表情をたたえてこちらを眺める。少し考えた後、こういう返答が返ってきた。

「そりゃあ嫌だよ。可愛い女の子たちを自分の不甲斐ない指揮のせいで怪我をさせちゃうなんてね」

ケタケタ笑いながら言う。私は結構真剣に言っただつもりなのに。

「あ、待つて待つて。拗ねるなよ……言葉はふざけたけど、内容は俺の本心なんだぞ」

彼の顔からは、さつきまでの笑いが消えていた。この人は私達の事をしっかりと考えてくれる。部下としても、人間としても、女の子としても……

「被弾はないに越したことはないさ。あーあ……俺も艦装が装備出来ればなあ……用件はそれだけかい？」

「ええ。つまらない質問に答えてくれてありがとう」

「いやいや。ちゃんと伝えられてよかったよ。さあ、皆待つてるぞ、行つてやれ」

振り返り、3人を追いかける。司令官は、私達のことを守ってくれる。それを確認できたのは充分過ぎる戦果よね。

* * *

——柱島泊地鎮守府中央棟3階執務室

補給を済ませた彼女達を迎えた俺は、昼に約束した通り、着任祝い兼初戦果祝いの小パーティーを開くことにした。食べ物、飲み物は俺が近くのスーパーで買ってきただけのものだが、勝利の喜びが実際より味を良くさせているらしい。皆嬉しそうに食べてくれた。そんな駆逐艦娘達を少し離れて眺めながら、一本目の缶を開けると、それを見た響がこちらへやってきた。

「司令官、昼戦の時の約束、覚えてるかいい？」

覚えている。昼戦の通信でした約束、一応ウオツカのボトルは買っ

てきたが……

「本気か？ お前、まだ未成年だろ？」

クスクス響が笑う。

「やっぱり知らなかったんだね。私達艦娘は人権を獲得してるっていうのは知ってるかい？」

「ああ、聞いたことがある。戸籍も請求すれば作れるんだっけ」

「そう。でもね、艦娘は建造時点での年齢は正確にわからないよね。だから法の下では皆成人扱いなんだ……約束通り、お一つ頂くよ」

ひよいとボトル掴んで持っていく。

「ああー、俺の楽しみがあ……」

「頑張つて戦ったんだしいいじゃないか。それに、司令官はこれよりそっちの方が好みなんじゃないかい？」

響は隅に置いてあるブランデーボトルを指さした。そう、響の言う通り、他にも酒は沢山あるし、俺はどちらかと言うとブランデーやワインと言った果実酒や、気軽に飲めるビールの方が好きだ。確かにウオツカも悪くないけど、どうもさっぱりし過ぎている。酒はやつぱり香りと味を楽しむべきだと思うのだ。

……ちなみに、俺は日本人の中ではかなり酒に強い方だ。だから、今晩は飲みまくるつもりだし、来週の分もと思って響から注文のあったウオツカと、個人的に飲みたかったブランデーの他に缶ビール2ダース分のストックを買ってきたのだ。

……そのせいで1回では持ち帰ることが出来ず、鎮守府とスーパーを二往復するハメになったが。

「やつぱり出撃後は冷えたコレに限るね」

「ジジイみたいな事言ってるじゃねえよ。それかなり度数高いぞ」

そう言った時、雷が興味を持ったようで、こちらへやってきた。

「司令官！ 雷も飲んでみたい！」

俺達に気付いた三人も寄ってくる。

「あ、暁も一口頂くわ。だって大人のレディーですもの！」

「えー……これかなりキツイよ？ レディーは飲まない方がいいと思うな」

「とつ、とにかく！ 暁にも飲ませなさいよ！」

好奇心が抑えられない模様。もうなんというか……子供っぽいな、やっぱり。

「んじやどうぞ。後悔しても知らねえぞ」

暁が持っていた（さつきまでオレンジジュースが入ってたやつだな）コップに半分程注いでやる。響が「やめといた方が……」と止めた時には暁は豪快にそれを飲み干していた。

「……暁ちゃん？」

電がおずおずと暁を呼ぶ。暁が上げた顔は既に真っ赤。いやいや、幾ら何でも酔いが回るの速すぎやしないか？

「どうかんがえても、あかつきがあ……」

言いかけて倒れ、慌てて駆け寄る。酔うのは一向に構わないが、ア
ル中で倒れたら一大事だ。

「……司令官。暁は大丈夫？」

「うん。眠っただけみたいだ」

「良かった。それにしても弱いね暁は」

「ああ……っつておい！ お前それ2本目かよ！」

「ああごめん。つい開けちゃった」

姉妹なのに耐性が全然違うようだ。

「司令官、これなかなか美味しいわね」

暁をソファーに寝かせている間に雷、電も少し飲んでみたらしい。
この二人は至って標準か、少し弱い位なのか。雷は少し酔い気味だ。

「程々にしとけよ。暁みたいになっても困るから」

「はーい」

* * *

——数時間後

時計はマルヒトマルマル……午前1時を指していた

「お前、強いよ」

「いやいや、司令官もなかなかだよ……お水いるかい？」

「ありがとう」

俺は響との飲み比べを引き分けで終わっていた所だった。響もすぐ酔いつぶれると思っていたのだが、かなり強いようだ。俺に張り合って飲み続けて、まだそれ程酔っていない。せいぜい少し頬が赤くなっただ位だ。

2人ともそれぞれウオツカとブランデー1本に加え、ビール9缶ずつ飲み干した。流石に俺も酔いが回ってくる。

「全部飲みきっちゃったな。また買ってくるから今度一緒に飲もう」

「^{ダイ}Da（うん）。絶対誘ってよね」

最初は雷も張り合って一緒に飲んでいたが、三本目でダウンしたので暁と一緒に寝かせてある。電は普通に眠くなったのだろう、2人の姉の上に突っ伏して眠っている。響と2人で眠ってしまった3人を運ぶ、というのは少し大変だし、起こすのも悪い。

「今日はここで寝かせるか」

「それがいいね」

「響、隣の部屋からから布団二枚出してきたくれ。暁と雷はソファで寝かせるから、響と電は申し訳ないけど床に布団敷いて寝てくれ」

「私は構わないけど……司令官は何処で寝るんだい？」

「流石に女の子達と同じ部屋はマズいからな。隣に応接室があるからそこで寝るよ」

本当は提督には寝室が用意されているのだが、荷物を散らかしたままなので眠る場所がない。明日の夜には片付けよう。

「まあ、今日は皆遅くまで頑張ってくれたんだ。明日の執務は午前10時からにするから、朝はゆっくり起きてこい」

「^{スバ}спасибо（ありがとう）。伝えておくよ」

「んじやおやすみ」

「うん、おやすみ」

響と別れ、執務室を後にした。

アルコールが入ったせいとか、心地よい眠気が脳を覆う。俺も明日は少し寝坊して、8時くらいまでは寝ることにしよう……

6話 鎮守府の朝

優しい蟬の声で目が覚める。まだ7月上旬だ。蟬の鳴き声もまだそこまで煩くない。ソファアールから起き上がり、大きく伸びをする。

時計はマルハチマルマル……午前8時を少し回ったところだ。執務は午前10時からなので、まだ少し時間がある。着任2日目とはいえ、新任少佐にそこまで仕事がある訳でもないの、早めに執務を始めようとは思わない。さしあたって今は空腹を満たすことにしよう。「さて、またスーパーで弁当か、それとも食堂に行くか……」

そう独りで呟いた時、控えめな音を立ててドアが開いた。

「失礼します……あ、司令官さん。もう起きていらしたのですか」

現在、この鎮守府でただ一人、俺の事をさん付けで呼ぶ少女。つまり電が、ドアから顔をのぞかせた。

「おう、おはよう。まだ早いし寝ていてもいいんだぞ？」

「ありがとうございます。でも、もう目が覚めてしまいましたから」

「そうか。まあ入りなよ」

電を招き入れる。何やらお盆を持っているようだ。

「どうしてこの部屋に来たんだい？」

「電、朝ご飯を作ってみたのです。司令官さんの朝食がまだならいかがかと……」

なるほど。電が置いたお盆にはサンドイッチが乗っている。見栄えも良く、とても美味しそうだ。

「おお、助かるよ。ちょうど朝飯どうするか迷ってたところだ」

「それは良かったです」

「せっかくだし、電もしばらくここにいればどう？」

電は少し困ったような表情をする。

「あの……ご迷惑ではありませんか？」

「全然。せっかくだし差し入れの感想も言いたいしね。電は何か飲み物いるかい？」

立ち上がりながら問う。

「コーヒーを頂けますか？」

砂糖多めで

「了解」

俺は食にはそこまで興味が無いが、飲み物に関してはかなりのこだわりを持っていてと自覚している。一通りの飲み物は一般人より美味しく作る自信がある。今あるのは市販のインスタントコーヒーだけではあるが、お湯の注ぎ方、混ぜ方等、少しの工夫次第でなかなか変わるものだ。

淹れたてのコーヒー二つをテーブルまで運ぶ。

「お待ちどうさま。砂糖多めでよかったですね？」

「ありがとうございます」

「んじや俺もこれ、頂こうかな」

綺麗に並んだサンドイッチの一つをつまみ上げ、頬張る。

「ん、美味しい！」

電のサンドイッチはとても美味しかった。士官学校で寮生活をしていた頃は俺も自炊していたのだが、その時作ったものよりずっと美味しい。作り方を尋ねてみたが

「隠し味があるのです」

と、微笑して言うだけで、教えてくれなかった。

「んん……噛んだ時の風味はオリーブオイルか？ いやいや、バターのような気もしてきたし……ピリツと辛いのは山椒だろうけど、隠し味はわからないなあ」

「隠し味は秘密だからこそ美味しくなるのです」

電は、彼女には珍しくいたずらっぽい表情を浮かべている。なるほど、こうして見てみると響にそっくりだ。よく雷と間違われると言っていたけど、上の姉2人ともそっくりだ。特に雷と間違われるのは髪色が近いからだろうか。光の当たり加減によっては、全く同じ色にも見える。

「あ、そうだ電。昨日の戦闘の戦術、詳しく教えてくれないか？」

「昨日は話し損ねてしまいましたからね。もちろんなのです」

ふと思いついた。彼女が昨日驚く程洗練された戦術を披露したところ。これではしばらくは朝の暇な時間を潰すことができそうだ。

* * *

……電はとても緻密で、正確な戦術眼を持っている。まだ経験不足から来る粗があるが、これはこれから徐々に磨かれていくことだろう。

ここで誤解を予想して先に解いておきたいのが、戦術と戦略とは似た響きの言葉だが全く異なるものであるということ。そして、電は戦術家であって、戦略家ではないこと。

「戦略とは戦争全体の勝敗を決めるための基本的な構想とそれを実現するための技術。戦術とは局地的な戦場で勝敗を決するための、いわば応用の技術。状況をつくるのが戦略で、状況を利用するのが戦術だよ」

いつだったか読んだ小説にこんな言葉があった。戦略と戦術の違いとはまさにここにあり、戦略の下に戦術があると言える。

わかりやすく言えば、戦場を作るのが戦略で、その戦場で戦うことが戦術ということだ。こんな面白い例えもある。

「戦争を登山にたとえるなら……登るべき山をさだめるのが政治だ。どのようなルートを使って登るかをさだめ、準備をするのが戦略だ。そして、あたえられたルートを効率よく登るのが戦術の仕事だ」

つまり艦隊司令官が戦略を立て、できる限り戦場の状況を整え、艦娘達はその整えられた戦場で最大限力を発揮する。これが目指すべき理想形なのだ。

俺のような艦隊司令官は実戦指揮より、戦局全体を見渡して、艦娘達が実際に戦場に立った時にその能力を生かせるように戦況を運ぶ能力が必要だ。戦略の時点で劣勢ならば、それを戦術レベルの戦闘で巻き返すのは容易でない。責任重大だ。

さらに、戦略で戦う司令官と、電のような戦術で戦う兵士では求められる能力が異なる。俺は艦艇の艦長になった経験もあり、戦術に関しては一通りの心得がある。自慢すると、士官学校時代の授業であった戦術シミュレーションでは一度も敗北したことがなかった。

まあこの戦術シミュレーションは、戦略、つまり戦闘に入る前を完全に無視し、五分五分の状態で開始されるので、実際の戦闘ではほとんど役に立たないのだが。実践ともなれば、戦術で動かせる勝敗など

たかが知れている。

極端に言うところ……例えば戦略戦で大敗し、主力艦隊が誘い出された所を敵本隊に急襲されたら、旗艦フラグシップ級戦艦を基幹とする12隻連合艦隊相手に艦娘6人の水雷戦隊で挑まざるを得ないような絶望的な状況に追い込まれるかもしれないのだ。この状況にまで陥れば、敵と同等もしくはそれ以上の兵力をぶつける”という戦術の基本さえも封じられる。

このような戦略的に大敗北の状況なら、戦場に着き、実際に砲火を交える前から負けてしまっていることは誰の目にも明らかだ。万に一つも勝利はありえない。

だから、戦略はとても大切だ。用い方によっては、戦う前から勝つことも出来るし、その逆にもなりうる。俺が崎矢少将を尊敬する理由もそこにある。

彼はただの人格者であるだけではなく、戦略構想にずば抜けて長けているのだ。彼が艦隊を指揮すれば、細かな戦術は必要ない。戦場へついた時点で既に圧倒的な優勢に立っているから、戦場に着いた彼の麾下の艦娘達は、ただ劣勢の深海棲艦を叩くだけでいい。

……叩くだけでいいはずなのだが、彼の艦隊はそれで終わらない。麾下の艦娘達の戦術指揮能力もビックリする程高いのだ。艦隊指揮官である崎矢少将が劣勢に追い込んだ敵艦隊を艦娘達が合理的な戦術指揮で正確無比な攻撃を浴びせる……

呉はまさに鎮守府の鏡と言える。それでいて、艦娘と提督の信頼関係も厚いというのだから、本当に非の打ち所がない。横須賀鎮守府は彼の鎮守府を上回る規模を持つと言うが、艦隊内での結束力という面では適わないだろう。

戦闘において、兵と指揮官の信頼関係ほど大切なものは無い。だから、俺も彼女達艦娘から信頼を得るために出来る限りの事はしようと思うのだ。

……とりあえず、さしあたって今は電の戦術論の教師になる事にしよう。彼女との信頼関係の第1歩。それに、この子はきつと強くなる。駆逐艦は火力が低く、格上の艦種を相手にするには力不足だと言

う声は多い。しかし、俺はそう思わない。駆逐艦だからこそ出来ることだつてあるし、相手が自分より上手でも頭を使って戦えばいいのだから……

* * *

——数時間後、柱島泊地鎮守府執務室

時刻はマルキユウサンマル……午前9時半になろうとしている。私……駆逐艦電は、二日酔いの姉達に手を焼いていた。

「皆！ 早く起きるのです！ もう執務30分前なのですよ！」

ふらふらと暁が立ち上がる。

「うう……頭が痛いわ……」

「もう、暁、そんなんじや駄目よお……」

そう言う雷は立ち上がれずに崩れ落ちる。

「とりあえず寮で着替えて食堂に行くのです。食堂の1番手前の机に朝ごはんとお水を置いていますから」

「わかったわ……」

部屋を出ていく二人。この二人はまだいい。問題は……

「響ちゃん！ いい加減布団から出るのです！」

「む……」

布団を引っぺがす。しばらくもそもそしていたが、観念したようなのです。

「全く……電はどんどん雷に似てきてるね」

「響ちゃんがちゃんと早起きしてくれたらこんな事は言わないのです」

雷ちゃんの気持ちがよくわかります。本来響ちゃんを叩き起すのは雷ちゃんの役割なのです。今日は昨日飲んだお酒のせいで暁ちゃんと似たりよったりでしたけど。響ちゃんを見送って部屋の片付けをしていると、司令官さんが執務室に入ってきました。苦笑いを浮かべてこちらを眺めています。

「電の声、外まで響いてたぞ。朝は大変なんだな」

苦笑しながら応じる。

「いつもはこうじゃないのですよ。響ちゃんは今日と変わりませんけど、暁ちゃんも雷ちゃんも本当は電より早起きなのです」

「へえ。雷が早起きなのはなんとなくわかるけど、暁もなのか」

「『早寝早起きはレディーの基本よ』なんて言ってたのです」

二人で執務室を片付けながら、声を上げて笑う。一通り片付け終わったところで、暁ちゃんが帰ってきました。

「サンドイッチ美味しかったわ。ありがとう、電」

「どういたしまして、なのです」

「雷は艤装のことで工廠の妖精さんに呼ばれてたわ。5分もすれば来ると思うけど」

「了解なのです……響ちゃんは何？」

「私が食堂を出た時にはもう食べ終わってたわ。もうすぐ来ると思う」

時刻はマルキュウゴースン……午前9時53分。よかった。ぎりぎり間に合いそうなのです。

——ヒトマルマルマル…午前10時

さて、執務の始まりだ。まず最初の仕事だが、この子達の役割を決めなくてはならない。当然と言えば当然だ。一番重要な役割は言わずもがな「秘書艦」な訳だが、これは負担を減らすためにも四人で一週間交代にして回させることにした。秘書艦の仕事量は他の役割とは比べ物にならない。

そして今週の秘書艦は、本人の強い希望で暁に決まった。なら、もう建造順でいいのはって事でまつまり暁、響、雷、電の順で回すことになった。

それとは別に、さらに細かい仕事を分担していくのだが、正直現在のところ俺一人で鎮守府を運営できているので、また今度にする事にした。これから艦娘が増えていくにつれて、艦娘達にも仕事をしても

らう機会も増えてくるだろう。

ここまで決めると、秘書艦の暁を残して、ほかの三人を遠征任務に送り出す。

「どこへ向かえばいいの？」

「そうだな……この付近の安全な海域を警備を兼ねて航海してくれ。ルートはこんな感じだ。俺の予想だと15分位で1周できる」

「わかったわ」

遠征部隊の旗艦には雷を据えた。特に意味がある訳ではないが、旗艦というのは艦娘達にとつて大きな意味があるらしいし、練度の上昇も早いので、重要でない任務の時は交代でさせる事にした。

* * *

——ヒトマルサンマル：午前10時30分、執務室

「……静かだな」

「ええ。静かね……」

黙々と執務をこなす。私は人と話すのは得意な方だが、年上の男性と二人つきりになる機会なんてそうそうない。正直とても気まずい。

……ちなみに、昨日見た通りこの執務室にはひじやげたダンボール以外何も無い。昨日支給されていた家具コインで「提督の机」、「ブルーカーペット」、「青カーテンの窓」の3点と、それに付属する内装を注文したのだが流石にまだ届いていない。仕方が無いので、隣の会議室からパイプ椅子とテーブルを持ってきて応急の執務机としている。

何か起こらないかな、と単発^{ワンオフ}任務の申告書をまとめていると、書類を見つめる司令官が突然口笛を吹いた。

「おい暁、今日の午後1時に新しい職員が来るらしいぞ。もう少しかかると思っていたが、意外に早かったみたいだ」

「えっ?」

「人数は5人。うち2人が艦娘なんだそうだ。で、人間の3人は軍医と憲兵と事務官で……ん?」

不審そうな声をあげた司令官。まるで自分の目を信じられないと言ったような。

「暁、ここなんて書いてある?」

彼の指さす文面を読み上げる。

「えつと……美代ミシロアキラ 亮、17歳男性、少尉、7/12をもって柱島泊地に配属」

何かおかしい所があったであろうか。答えを求めて司令官を見返す。

「そつか……お前らは年齢の概念がよく分かってないんだな」

そう。私達は本当の年齢も、誕生日も分からない。別にそれを知らないからといって不便はないのだが、人間の子供たちが誕生日を迎えるのを見たりすると少し寂しかったり、羨ましかったりする。司令官が続ける。

「人間は……もちろん艦娘もだけれど、普通成人っていうと18歳からなんだ。つまりこいつはまだ未成年だ」

「あら、暁より年下って事?」

「嬉しそうに言うな。艦娘は年齢が分からないから仕方なく成人扱いなんだろ? 暁はまだまお子様だよ」

「なっ!? お子様言うな!」

「はいはい、暁はレディだったな。ごめんごめん」

そうやって彼は頭を撫でる。また暁のことを子供扱いして……

「で、そんなに驚く事なの? 司令官もまだ10代に見える位若いし、前の司令官だつて34歳だつて言つてたわ。今の海軍つて若い人が多いんじゃないの?」

すると司令官顔を思いつきり曇らせて応じた。

「俺はもう22だ。でも確かに俺が少尉として働き出したのも18の時だったからそれ程おかしい事でもないのかもな」

初めてあった時から年齢より幼い顔立ちをしていると思つていたが、どうも気にしているらしい、ちよつと拗ねているようだ。私を子供扱いする割には、彼も結構子供っぽい所がある。

そこでふと、司令官がどうやって提督になったのか気になった。私

は海軍の事情をよく知らないが、士官学校卒業の18歳から22歳のたった4年の間で3階級も昇進するのは並大抵の努力では敵わないはずだ。確か、平和な時代の軍人の昇進の一つの指標として、〃任官後10年以内に少佐になれるか〃というものがあつた。そこから判断すると、いくら戦時中とは言え、彼の昇進速度がいかにも速いかわかるだろう。その事を問うと、

「なに、ただ運が良かっただけさ」

と誤魔化された。でも、ただ運が良かっただけで昇進出来るはずはない。しつこく聞くと、嫌々ながら答えてくれた。

「まず知ってもらわないといけないのが、ここ数十年で軍人の任官方法がかなり変わっているってこと」

司令官曰く、かつて日本軍が「自衛隊」の名を冠していた頃は、防衛大学校というものがあり、高等教育終了者がそこで学んで士官になつていたのである。そして、深海棲艦が出現し、全面的な戦争へ突入したことをきっかけに、自衛隊は正式に日本軍へと名を改め、慢性的に不足する軍人を供給するために、防衛大学校に代わつて中等教育終了者を対象とした士官学校を設置したのだという。

「まあ、古き酒を新しき皮袋に〃ってところだよ。士官学校と防衛大学校の前身は何も変わっちゃいない。ただ、入学資格者が中等教育終了まで引き下げられたんだけどね」

「つまり、より若い人が軍に増えたってこと？」

「そういうこと。ま、そうでもしないと今は軍人の供給が追いつかないって事だよ」

司令官の話は続く。

「俺は中学出てすぐに士官学校に入ったな。3年勉強して18歳で士官学校を卒業すると、後方勤務本部に配属されたんだ。ここはまあ軍全体での資材や味方艦隊、敵艦隊の情報を扱う部署だな。士官学校卒業生は、1年勤務すれば勝手に中尉に昇進できるから、最初の1年はデスクワークだけして過ごしたよ」

「司令官がデスクワーク……想像出来ないわね」

「まあ実際勤務成績は良くなかつたね。……それで中尉になつて数日

したら崎矢先輩の副官に任命されたんだ。当時先輩は中佐で、艦娘じゃない、実際の艦隊を率いていた」

「へえー。あの提督さんと司令官にそんな関係があつたのね」
前司令官の事なら知っている。

私を今の司令官、つまり山村司令官の初期艦の一人として建造してくれた人。背がすごく高く、眼鏡をかけていて。軍人というより、ベンチャー企業のエリートサラリーマンを思わせる容姿だった。何でも、彼が大本営に柱島泊地から呉鎮守府への移転を命じられると同時に、山村司令官の後任としての着任が決まったらしい。

「で、だ。副官になって2年ほどたって21歳……まあ去年だな。マレー半島付近の海域で大規模な戦闘が起きてね。崎矢先輩の艦隊が攻撃したんだけど、敵の強襲揚陸部隊の攻撃で崎矢先輩が負傷したんだ」

「！」

「彼は意識を失う寸前に、無責任にも俺に指揮権を託したらしくてね。俺が艦隊を率いた訳だよ。ホントは副司令官が居たのにね」

司令官は指揮権を引き継いだ後、柔軟な艦隊運動で撤退。被害はほぼゼロで、艦艇は一隻も失わず、死人も数える程しか出さなかったらしい。その功績を称えられて大尉を飛ばして2階級特進。少佐に昇進したらしい。

「普通は士官学校で成績が良かった者から昇進させていくものだけど、艦隊を無傷で撤退させた功労者に何も恩賞を与えないっていうのは軍の威信に関わる。だから、こんな若造だけど仕方なく昇進させたって訳」

との事。

「ありがとう。お話を聞けて楽しかったわ」

「どういたしまして。今度はお前らの話も聞かせろよ」

「ええ、もちろんよ司令官」

彼が最初話すのを渋ってたのを見ると、あまり話したくないものだったのかもしれない。だから、聞けて少し得をした気分だ。

「あ、それとその司令官っていう呼び方」

彼はニヤニヤしながら言う。

「それは将官以上の階級の人に使うんだぞ。今更改めろとは言わないけど、佐官の指揮官には司令でいい」

「も、もちろん知ってたわよ！ え、えっと……」

思わず知ったかぶりしてしまった。それを見た司令官は身を屈めてクククツと独特な笑い方で笑った。

「まあ、これからもそう呼んでくれよ。司令官って呼ばれ続けたら、本当に将官になれそうな気がしてきた」

「し、司令官ならきつとなれるわよ！」

「はは、お世辞でも嬉しいね」

これはお世辞じゃなくて本心。彼の階級が運だけではなく、実績に支えられていることは今しつかりと聞いた。

「さて……随分と長く話してしまったな」

「うん、もうそろそろ……あつ戻ってきた！」

遠征が終わったらしい。響、雷、電が母港に向かって海上を滑ってくる。きつと補給の後、三人はまた別の遠征に行くことになるであろうが、もう気まづくはない。寧ろ、彼の話を聞くのが待ち遠しいようだ。

* * *

「艦隊が帰投したわ！ お疲れ様！」

「お疲れ様。特に異常はなかったな？」

「問題無しよ！ 道中で弾薬を少しだけ回収したわ！」

「よし、面倒だからもうこのまま海上で補給、再出撃してもらおう。疲れてないか？」

「問題ないよ。私たちなら大丈夫だ」

「よし、今度の旗艦は電だ。最初はさっきの航路でいい。だが今回はこの海域ポイントまで来たら西へ進路を変えて近くの補給基地に寄ってくれ。時々軍から高速修復剤が支給、保管されているらしいから、もしあれば拾ってきてくれ」

地図を指しながら指示を出す。高速修復剤……一部の提督からは「バケツ」の名で呼ばれている。その名の通り、緑色の「修復」と書かれたバケツの中に緑がかった半透明の液体が入っている。艦娘は修復ドックに入渠する事で飛躍的に治癒力を高められる事が一般人にも知られているが、実はさらに入渠時間を短縮させることが出来るのだ。それがこの高速修復剤である。

この液体を、怪我をした艦娘が入渠中の浴槽に薄めて入れることで、元々高まつていた治癒力がさらに高まり、ほとんど一瞬ですべての傷が回復するのだ。しかし万能という訳でもなく、傷は塞がるが疲労は取れないらしいので、大破艦等は高速修復剤を使った後もしばらく休養する事が多いそうだ。

入渠時間が短い駆逐艦ばかりの今の艦隊では有効度はそこまで高くない。しかし、崎矢先輩に聞いたところ、練度の高い戦艦や正規空母が大破すると入渠に丸一日近くかかってしまう事もあるとの事で、主力をどうしても出撃させなくてはならない時には非常に頼りになるらしい。今後の事も考えて備蓄しておくのが吉であろう。

「電の本気を見るのです！」

「頼もしいな。よし、行ってこい！」

艦隊を送り出す。

「さて。業務再開といくか」

「ええ」

再び執務室に戻る。他の提督に比べれば少ないとはいえ、流石に書類は積める位にはある。

「んーと……遠征任務を今日中に3回成功……これはまあ達成できるか。演習3回は着任2日目のごたついた時に相手してくれる提督なんていねえしな……」

上からめくっていくが、こんな調子で実際にできる任務は少ない。建造による艦隊拡張に至っては建造が許可されていないのだからやりようがない。

「結局目を通すだけになっちゃいそうね」

暁が苦笑しながら言う。本当にそうなってしまいそうなくらいに

新米少佐の行動は制限されている。中佐になれば改善されるのであろうが、それまではこの生活が続くのかと思うと少し気が重い。

「出撃任務もあるな。午前は遠征を回すから午後に着任する人たちを迎えて、休憩少し入れてから出撃してもらおうかな」

「わかったわ」

ささっとペンを走らせて手元のメモに修正を加える暁。

……正直ここまで立派に秘書艦業務をこなしてくれるとは思っていなかった。駆逐艦娘というのは外見、内面共に幼い部分がある。だから、執務の補佐を期待して暁を残したのではなく、遠征途中に鎮守府が襲われる危険を考慮して戦闘員として置いておいたつもりだったのだ。

この鎮守府から艦娘が全員出払ってしまったら誰が近海の住民を守る？ 俺自身も人間用の対深海棲艦兵器で戦えなくはないが、せいぜい駆逐イ級を1体倒すくらいが精一杯だろう。

それを暁に伝えると、少し怒った様子で、

「暁は一人前のレディーよ。秘書艦のお仕事だって完璧なんだから！」

言動は幼いが、仕事ぶりは大人顔負け。そのギャップにもまた頬が綻ぶ。しかし、確かに（艦娘の年齢はわからないので恐らく）年下とはいえ完全に子供扱いは少し失礼だったかもしれない。

「ああ、そうだな。じゃあ一人前のレディーには開発の立ち会いをしてもらおうかな」

半分ほど書類をめくったところで見つけた開発任務。装備を1度開発すればそれで達成だが、1回でやめるつもりはない。

「何を開発するの？」

「今はまだ使う機会がないと思うんだけど、水中探信儀ソナーと爆雷投射機を開発しておきたいんだ。いざ潜水艦が敵に現れると厄介だからな」

工廠は柱島泊地東第1棟にある。鎮守府執務室から歩いて5分程の所だ。

「資材投入は10/30/10/31と伝えてくれ」

「わかったわ」

開発、建造に必要な資材は4つ。それぞれ燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトの順でレシピは並んでいて、四大資材なんて呼ぶ者もいる。さらに、これとは別に開発資材という資源も必要なのだが、こちらは遠征先で拾ったり、任務報酬として貰えたりと、自然に溜まっていくのであまり触れられない。

各資材は数字で表されるが、単位はkgでもtでもない。海軍が独自に決めた量を1として資材を数えている。確か、kgにも直せただが……計算式は忘れた。

「何回ほど回すつもりなの？」

「そうだな……資材も有り余っていることだし、4人分の対潜セットが揃うまでやってもらおうか」

着任した時に鎮守府に支給された資材はなかなか多く、低燃費の駆逐艦の出撃程度ではなかなか減らない。資材は毎朝タンカーで支給されるのだが、ある一定資材量を超えて備蓄していると支給が止められるのだ。

この一定量というのは司令部レベルというもので決まっている。鎮守府別に海域の制圧度や、過去の戦績からその司令部の成績を数値化し、レベル分けがされているのだ。

そして着任直後のこの鎮守府の司令部レベルは現在3。資材を貯めると備蓄限界がすぐにやってくる。貰えるものは貰っておかねば損なので、とりあえず開発で使いまくることにしたという次第だ。さて、俺の運は如何程か……

* * *

——1時間程後、ヒトヒトヨンニ……午前11時42分

「いやー……なかなか出来ないものだな、装備って」

「そうね……司令部レベルが低いと開発率が下がるとか聞いたことがあるわよ？」

「げっ、それが原因か……まあ対潜装備は揃ったからいいけど」

結構資材を使ってしまった。まあすぐ貯まるからそこまで気にしているわけでもないが、一気に備蓄量の半分が消し飛ぶと流石に平静

ではられない。成果は、

九十三式水中聴音機×4、三式水中探信儀×1、九十三式爆雷投射

機×4

アクティブソナー

三式水中探信儀を開発できたのは幸運だったと思う。

「さて……そろそろ遠征部隊も帰ってくるな」

「そうね。司令官、三人が帰ってきたら一緒にお昼ご飯食べない？」

「そうだな。ご一緒させて貰うことにするよ」

開発した対潜装備を整備妖精に預け、母港に向かう。俺達が到着した時には三人は既に艦装の解除を始めていた。

「艦隊帰投したのです」

「お疲れ様。雷と電はドックに向かってくれ。よくやってくれた！」

「はい」

二人を見送って電に向き直る。

「よし、成果を報告してくれ」

「燃料30、弾薬100、鋼材、ボーキサイトは0……さらに高速修復剤を一つ手に入れたのです」

電が代表で報告する。

「よくやったぞ。ドックで汗流してこい。高速修復剤はドック横の倉庫に置いておいてくれ」

「了解なのです」

「出たら皆で昼飯だ。先に食堂で待っているからね」

「わかりました」

電はにっこり笑って、入渠ドックに歩き出した。

「よし、俺達も食堂へ向かうぞ」

「はい」

俺は暁を伴って食堂へ向かう。食事の後は新任の職員たちを迎えなくてはならない。せっかくだし華やかに迎えてやりたいものだ。

7話 美代憲兵

——瀬戸内海上空

「柱島泊地……」

自身が輸送機で向かうその場所の名を口に出してみる。それは、日本が造設した対深海棲艦前線基地の名であり、自身が今日から勤務する職場の名でもある。その響きは斬新で、今後への期待と不安を掻き立てる。

* * *

僕は姓を美代^{ミンロ}、名を亮^{アキラ}という。この夏、士官学校を卒業したばかりで、年齢は17歳。9月の誕生日で18歳になる。

士官学校というのは、本来あと1年学習し、18、9歳で卒業するのが普通なのだが、単位を取得すれば1年早く卒業することができるといふ制度がある。一刻も早く軍人になりたかった僕はその制度を利用した訳だ。

「よオ若造」

自身の右隣から、からかうような声がかかる。

「どうした、さっきから。カチコチに固まっちゃまってよ。緊張のしすぎは体に良くないぞ」

「いつ、いえ！　大丈夫です！　問題ありません！」

彼は僕と一緒に柱島泊地へ転属となった坂下^{サカシタ} 陸軍医^{リク}だ。階級章を見ると大尉である。40代半ばと思われる容姿で、身長は僕よりずっと低いのにどこか威圧感を感じる。年長者の貫禄というやつかな。でも、見た目とは裏腹に、僕のような青二才にも気軽に会話してくれるフレンドリーな人だ。

「全然大丈夫じゃなさそうだが……まあいいか。真面目に働けるうちは幸せだと言うしな」

笑いながら言い放つ。一瞬どのような反応をすれば良いのかわからなかったが、どうもからかいながら僕の事を心配してくれているようだ。

「大尉にも真面目に働いていた頃があったのですか？」

僕も下手な冗談で返したが、すぐに後悔した。大尉がこちらをギョリと睨んだからだ。思わず謝ろうか、とも思ったが、それよりも前に大尉が表情を崩した。

「俺はないね。ま、俺みたいになりたくなければ真面目に働く事だな」
そう自嘲した大尉に声をかけたのは、さらに隣に座る女性。

「もう……陸くんだったら若い子イジメは辞めなさいよ。ごめんなさいね美代くん。この人、人付き合いが苦手で……悪い人ではないのよ？」

「そう面と向かって言われると照れるな、悠ちゃん」

「あなたを褒めたんじゃないの！」

「悠ちゃん」、と呼ばれたこの女性は佐々木 悠美軍属。年齢は、坂下大尉と同じ40代くらいであろうか。軍属なので正式な軍人ではないが、曹長待遇なのだそう。坂下大尉とニックネームで呼びあっているあたり、かなり長い付き合いなようだ。

……正直に言うと、自分の親くらいの年齢の人達が楽しそうにおしゃべりしているのを見て面食らっている。

士官学校では規律を叩き込まれて来たので、こんなにフリーダムな会話を展開する軍人がいることにとても驚いている訳だ。でも、よく考えてみたら、40代で大尉という事は士官学校出ではなく、一般兵からの叩き上げなのではなからうか。それなら、彼らの纏うこの自由な雰囲気とフレンドリーな空気も説明がつく。

「皆さん、とても仲が宜しいですね」

苦笑いしながら、2人の夫婦漫才を眺めていると、輸送機の後部座席から声がかかった。振り返ってみると、青いヘアバンドをした眼鏡の女性と、ピンク色の髪をおさげ風にした女性がこちらを覗いている。僕達は輸送機搭乗前の顔合わせで互いに名乗りあった。確かこの2人は艦娘で、眼鏡の方が「軽巡洋艦大淀」、ピンクの髪の方が「工作艦明石」と名乗っていたはずだ。

……一昔前は、「艦娘」と言うだけでかなり周囲から冷たい目で見られたというが、今ではそのような考え方は珍しい方だ。そもそも、僕達人間のために戦っている彼女達を差別するだなんてナンセンス

ではないか。今では艦娘達も街で買い物を楽しんだり、食事したりと、戦闘外では普通の女性として、自然に社会へと溶け込んでいる。

「あはは、僕はこの2人に混ぜてもらえなさそうです」

「あら、私達は歓迎してるのに。ね」

「こそ、遠慮なく話してくれ」

「いやいや、階級とか年齢とか、壁が多すぎてちよつと……」

思わずちよつと失礼な対応をしてしまった気がするが、坂下大尉も、佐々木軍属も気づいた様子はない。陸軍の上官は少しでも礼を失すると、しつこく説教してきたものだが。

「それでも、御三方が並ぶと家族みたいですね」

「本当、美代くんが息子みたいですよ」

大淀さんと明石さん（艦娘の年齢は分からないと言うが、2人とも同い年以上と思われるので敬語にしておく）が、からかうように言う。客観視すれば確かに、ちよつと年頃の息子とその両親に見える。

「あら、それなら私達は夫婦かしら」

「冗談じゃねエよ。悠ちゃんの夫だなんて、命がいくつあつても足んねエからな」

「あら、失礼な人」

皆の笑い声で、輸送機が和やかな雰囲気にも包まれる。本当にいい人達だな、と心の底から思うな。

「あら、もうそろそろ到着らしいわね」

……そんな事を話している間に、柱島泊地への着陸態勢が整ったようだ。座席上の赤いランプが、注意を促す。

「さて、お若い憲兵さんよ。美代とか言ったな」

「はい……」

悪い笑みでこちらを見る大尉。

「柱島の新任提督が極悪非道な悪漢だったらどうするつもりだ？」

何故こんな質問をするのだろうか。野暮としか言いようがない。そんなの決まってる。答えは一つだ。

「僕がねじ伏せます。憲兵の目の前で、軍律を破らせるつもりはありません」

「簡潔でよろしい」

大尉は満足したように頷くと、またニヤリと笑った。

……僕を認めてくれたということだろうか？ この人から信頼を得ることが出来たというのたらありがたい話だ。この人はきつと強い味方になってくれる。何故かそう思った。

「だが、あまり肩肘貼りすぎるなよ。提督さんとやらも、四六時中お前さんに見張られてると思えばおちおち寝てもいられないだろうからね」

「まあ、今時ブラック鎮守府なんて無いとは思いますがけどね」

「そうそう。そもそも駆逐艦娘4人の鎮守府がブラックな訳ありませんよ」

明石さん達の冗談で、また笑いが起こる。提督もこの人たちみたいな素敵な人ならいいな……

* * *

——柱島泊地鎮守府執務室前

輸送機の着陸は何の問題もなくスムーズに進み、僕達は柱島泊地の地を踏んだ。時刻はヒトサンマルマル……午後1時になる少し前だ。これも完全に予定通り。心の中で、海軍の事務管理がしっかりしている事に唸った。これが陸軍の管轄ならこうはいかないだろう。深海棲艦の出現以来、軍隊は質も量も大きく海軍に偏ってしまった。

「さて、この扉の向こうに俺達の上官がいる訳だ」

「男前だといいわね」

「私は執務がしっかりできる人がいいです」

「私は……一緒に機械いじりしてくれるような人かなあ」

皆言いたい放題だなあ、と思わず苦笑を漏らす。

「さて、お若いの。ここで俺からの任務だ」

坂下大尉が、先ほど輸送機で見せたのと同じ種類の笑みを浮かべた。「最初はお前さんが1人で入れ。お前さんに対する提督さんの応対を

見て、俺は態度を決めるよ」

「そんな……皆で入ればいいじゃないですか」

すると大尉は指を鳴らし、こう言った。

「よく考えろよ、この狭い扉から1人ずつ入って整列してから自己紹介つてとんでもなく不格好だぞ。それに、一般企業だって最初の面接は1人ずつだろう?」

何だか筋が通っているような通っていないような。

「……まあ、一理あるかもしれませんがね」

「そうだろう? それなら、1番手は若いお前さんが行くべきだ」

「……そうなりますね」

うーん、上手く丸め込まれた気がするなあ……

「でも、美代くんが先に行ってくれたら安心よね」

「確かに、どんな人かわかりますし、後続の私達がやりやすくなります」

まあ女性陣もこう言っていることだし、ここは僕が行くべきなんだろう。扉の前へ立ち、深呼吸する。

「失礼します! 本日付けで柱島泊地鎮守府に着任しました美代少尉です!」

「うん。入っていいよ」

中から入室を促す声が聞こえる。思っていたよりもずっと若い声だった。ドアノブに手をかけ、勢いよく開ける。士官学校で叩き込まれたので、この種の機敏な動作は身に染み付いているのだ。

正面に提督用の机が見える。が、そこにあるべき上官の姿はない。驚き、戸惑っていると、突然自分が立つ床が明るく照らされ、耳元で大きな破裂音が鳴る。

「「ようこそ! 柱島泊地鎮守府へ!」」

「……!」

* * *

「いやあー、ごめんね? 驚かせちゃったかい?」

「美代さん大丈夫ですか? 腰が抜けちゃったのかしら……」

「あ、ありがとうございます、大淀さん。大丈夫です……」

「まだまだ、胆力が足りんなア。ははは」

執務室に通された僕達は、部屋の隅に置かれた応対用のソファ（どうも取ってつけたような感じがする。別の部屋から持ってきているようだ）で並んで座っていた。そこへ、さっきの少女達と青年が戻ってきた。

「えーと……改めて、驚かせてすみません。出迎えは盛大な方がいいかなーと」

「は、はあ……」

盛大に迎えるにせよ、もう少しやり方があるのではないかと思う。しかし、隣に座る坂下さんは上機嫌だ。

「いやあ、はっはっは。お前さん、なかなかいいセンスを持つてるよ」

「お褒めに預かりまして。結構セットに時間かかったんですよ?」

「ほオ……後で見させてもらってもいいかな? 後生のためによ」

「構いませんけど……使う機会なんてないとおもいますが?」

「いやいや、俺は祭り好きでな。何かとこういう小細工することが多いのさ」

「そりやいいですね。ですが、今は少しお時間を下さい」

早速提督と意気投合して仲良くなってしまっている……

提督は僕達に向き直ってこう言った。

「俺は旧めかしい上下関係とやらが嫌いです。確かに年齢や階級は時に尊重すべきものですが、それだけを見てその人本人を見ないというのは良くないと思っています」

“もつともだ”と大尉が相槌を打つ。

「士官は皆そのような輩ばかり。しかし、貴方方は違うようだ」

提督はにっこり笑ってこっちを見た。

顔には先程までの鋭い感じはどこにも無く、人懐こそうな笑顔が浮かんでいる。

「階級にこだわる人なら、今大尉をたしなめたはずですからね」

提督が続ける。

「俺は敬語こそ使えど、あなた方とは対等な立場にありたいのです。ですから、皆さんも気兼ねなく話してくださいね」

……今僕はとても驚いている。

軍歴や年齢を飾りのように扱う大尉と軍属、艦娘達と共に着任した鎮守府。その鎮守府の主も、彼らと同じ思想の人だったのだ。軍では異色とも言える彼らが、この小さな孤島の鎮守府に集まった。『奇跡』や『運命』といった身勝手な言葉は大嫌いだけれど、この出会いは大切にすべきだと思った。

「ところで提督。私達まだ提督の名前を教えて頂いてませんよ？」

明石さんが思い出したように言う。

「そうだったね。では改めて……」

提督は背筋を伸ばし、敬礼した。彼に付き従う少女達もそれに倣う。

「この鎮守府を預かっている山村少佐です。上官としてだけではなく、1人の同僚、1人の友人として仲良くして頂きたい。そしてこの子達が……」

「暁よ。一人前のレディーとして扱ってよね！」

「響だよ。その活躍ぶりから、不死鳥の通り名もあるよ」

「雷よ。かみなりじゃないわ！ そのところもよろしく頼むわね！」

彼らの自己紹介を受けた僕達も立ち上がり皆思い思いに、名乗りを上げる。

「美代少尉、着任いたしました！ 本日よりご厄介になります！」

「軽巡洋艦大淀、着任いたしました。よろしくお願い致します」

「工作艦明石着任！ 参ります！」

「坂下大尉。まアよろしく頼むぜ」

「佐々木軍属です。よろしくね！」

……この部屋に入る前に、全員で整列しての自己紹介は不格好だと坂下大尉は言っていたけれど

「どうしたの？ 美代くん。嬉しそうな顔して」

「いいえ、何でもありませんよ」

凄く気持ちがいいのは何故だろう。

たった今、新任職員たち迎えた。滅多にない機会という事で、盛大に迎えてやりたいと4人に伝えると、結構色々な案が出た。

その中で、用意に時間もお金もかからない、入室すると光が当たるように探照灯サーチライトをセットするという暁の提案と、ドアの裏に隠れてクラッカーを鳴らすという雷の提案を採用する事にしたのだ。で、電に出迎え用にお茶の用意をさせ、四人でスタンバイしていた訳だが……「いやあー……くどいようだけど、悪かったね、さつきは。呆れたかい？」

「いつ、いえー！ 決してそんな事は！」

「あはは、無理はしないでくれ。そんな緊張しなくていいよ」

美代は、緊張をほぐすつもりが逆にガツチガチに固めてしまったらしい。まあ、他の4人は気を許してくれたみたいだから良しとするか。特にあの坂下大尉。彼は面白い。ああいう上官にも遠慮なく意見できる人は組織に必要だと思う。俺が誤った道に進んだら、彼が引き戻してくれると思うのだ。さらに、彼らについて色々話していると、お茶を煎れに行っていた電が帰ってきた。

「司令官さん、お茶の用意が……はわあ！」

美代の姿を認めて大きく仰け反る。なんだか様子がおかしい。電には新しい職員達が来ることを伝えてある。それに大人しい彼女がここまで取り乱すなんて。ちらりと横を見ると、暁と雷が吹き出しそうになっていて、響は呆れたように肩をすくめていた。

これは……

(おい、これってもしかして……)

(一目惚れってやつだね)

(電つたら可愛い……)

(まだまだお子様ね……)

確かに、美代は男の目から見てもびっくりするくらい男前だ。高い身長に引き締まった体、優しそうな表情に温和な性格。多分、出会う女の子の9割が振り向くであろう彼に年頃の少女が心奪われるのは

わからないでもないが、よりによって電が……

新任職員達の方を見やれば、皆それに気づいたようであった。

……美代を除いて

(ほオ……これまた可愛いねエ)

(確かに、美代くん凄く男前ですもんね)

(あら、明石さんのお眼鏡にかなう方なんて珍しいですね)

(あなたも罪な子ねえ……)

(……?)

小声で何やらささやきあっているが、美代は何の事だか分かっていないらしい。周りがニヤニヤとイジリにかかっているが、戸惑った表情のまま動かない。その視線が、電に移った。

顔を真っ赤にして固まる電と、それを見て戸惑う美代。どうにもならないので、とりあえず彼女の紹介をした。

「えーつと……この子は電って言って、彼女達暁型姉妹の末っ子なんだ」

「は、はあ」

その間に素早く、暁と雷が美代の隣の椅子に座らせる。満面の笑みだ。電は小刻みに震えていて、顔を上げない。書類を持った響がため息を一つついて、気を取り直した風に口を開く。

「明石さんと大淀さんはそれぞれ酒保の運営と大本営からの任務通達の仲立ち役としての着任でいいね?」

ん? 酒保の運営? 任務通達の仲立ち?

「おい、彼女達は艦娘だろう。着任したからには前線へ出るんじゃないのか?」

「その事なんです……」

明石が面目無さそうに頭を垂れる。

「私達は少し他の艦娘とは違って、建造時点での艦装がないんです」
「艦装が? つまり、海に出れないのか」

「はい。それだけでなく、艦装を用いた私の工作艦としての機能も使えません」

つまり、人間の職員と同じということか。

「ですが、私達の艦装も、一部海域で発見されている艦装ベースを用いれば作る事が出来るんです。ですからそれまでは……」

「分かった。彼らと一緒に、鎮守府を内から支えて欲しい。そして、何時か必ず艦装は用意する。その時は共に戦ってくれるな？」

「もちろんです！」

「あ、あの私、戦いは……」

あ、そうか、工作艦明石は元々戦闘向けの艦ではない。その艦装を受け継ぐ彼女も、戦闘は苦手なはずだ。

「ごめんごめん。明石には装備の開発、修理で貢献してもらおうさ。何も海で砲を交えるだけが戦いじゃない」

「あ、ありがとうございます！」

彼女達は問題無さそうだ。今は戦えないというのは残念だが、艦装も後から得られるのだ。焦る必要はどこにもない。明石と大淀については大体知れた。響に次へ進めるよう促す。資料のページをめくった響が、やや顔をしかめて読み上げた。

「美代少尉は成績優秀なんだね。卒業次席は4356位中124位。白兵戦技に至っては一度も満点を落としていない」

「次席124位だって!? 旗艦級フラグシップかよ……」

「ええ!? 美代くんそんな凄い人だったんですか？」

「私も……着任して以来内地で何人も軍人を見ましたが、旗艦級の方は見た事ありません」

士官学校の生徒は、成績上位者を深海棲艦の階級に例え、成績上位20%以内を上位級エリート、5%以内を旗艦級フラグシップと呼んでいた。

つまり、美代は士官学校トップクラスの成績という訳だ。

「僕……いえ、小官は白兵戦技だけが得意でして……」

「いやいや、お前はどれを見ても好成績だよ」

それを受けて、雷から問いかけられる。

「ちなみに司令官は卒業次席いくつだったの？」

「おい雷。さらっと危険な事聞くな」

「司令官の履歴書には3957位中1693位だって書いてあったわよ」

「あつ暁！ どこからそれを！」

「執務机を漁ったら出てきたわ！」

「……」

なかなか恥ずかしい成績である。白兵戦技と戦術シミュレーションはほぼ満点だったが、他の科目は赤点すれすれだったので、平均すると中の上位だった訳だ。

「でも司令官も白兵戦技はずっと満点ね」

雷がフォローに入ってくれた。

「おうよ！ 在学中は戦術シミュレーションと白兵戦技だけが自慢だったんだ」

「司令官と美代少尉で模擬戦闘してみたら面白いかもね」

「え？」

* * *

——十分程経過

鎮守府西第三棟1階体育館

「……で、つまりどういう事だ？」

俺は、艦娘達の訓練用に建てられた体育館で模擬戦闘用のナイフを持って立っていた。正面には美代が、同じように状況を理解できない体で突っ立っている。

「だから、白兵戦技満点の二人で、どちらがより強いかはつきりさせようって事じゃないか」

響がすました顔で言う。

「なかなか面白いじゃないの。俺達も見物させてもらうぜ」

「着任初日に提督と白兵模擬戦ってなかなかない事ですよ。美代さんも頑張ってくださいね」

大淀、明石、大尉、軍属の4人と暁、雷、電の3人がそれぞれ左右のギャラリーに立つ。

「そもそも実際の戦闘で、ナイフしかない状態で、しかも一騎打ちする事なんてないぞ？ まあ俺は別にいいけど、美代はそれでいいのかい

「？」

「ごっ、ご命令とあらば！」

「命令じゃないから拒否してもいいんだよ？ それと、どもりすぎ」

「いっ、いえ！ 小官も、少佐の伎倆を知りたいと思っておりますので！」

うん、やっぱりどもってるよ。

「山村でいいよ。それに一人称もそんなかしこまらなくていいって、さっきも言ったじゃないか」

「上官に対してそんな事は……」

「これは命令だ。従いなさい」

「そんな……」

強い語調で言ってみると目に見えてたじろぐ。素直な、良い子なんだな。

「あはは、冗談だよ。でも少しずつ慣れてくれよ？ 部下に気を使われちゃ、こつちもやりにくいんだ」

「わ、わかりました」

「司令官。早く早く！」

俺と美代のやり取りに痺れを切らした暁がせかす。

「悪い悪い。ルールは？」

「火器、刃物、及び殺傷能力のある武器は使用不可。その模擬戦闘用のナイフか、あるいは体術で実戦なら致命傷に至る攻撃を喰らわせたなら勝ち。審判は私……響が務めるよ」

「OK。そっちは？」

「了解です。本気で参りますよ」

「もちろん。旗艦級相手に手加減なんていらねえよな」

ヒトサンヨンサン……午後1時43分。

二人の傑出した白兵戦闘員の一騎打ちが始まる。

8話 作戦決行前

白兵模擬戦が始まった。

相手は士官学校在学中、白兵戦技がずっと満点だったという山村少佐。体格は僕の方が優っているが、彼も小さい訳では無いし、身軽な分機動性で劣っていると思われる。

だらりと腕を投げ出し、余裕で隙だらけに見える構えだが、良く見るとその構えに様々なトラップが仕掛けられている事がわかる。迂闊に近づこうものなら一瞬で勝負をつけられるだろう。着ている服はそれぞれ海軍佐官の制服と一般憲兵制服と異なるが、どちらも機能性に優れ、性能差は出る事はない。

二人で円を描くように、ゆっくりと反時計回りに回る。それと同時に、少しずつ、少しずつ距離が縮まる。二人の距離が5m程となった時、山村提督が動いた。

右手に持った長大な模擬戦闘用ナイフで袈裟がけに切り込んでくる。これはまず予想通りだったので難なく防げた。刃物を用いた白兵戦において、第一撃は袈裟がけの事が多い。その後の攻撃に繋がりやすいからだ。だから、防御側は連撃させる暇も、隙も与えてはならない。

ナイフを払い除け、返す一撃で突出した頭を狙う。すると、提督は予想していたのだろう。大きく身体を仰げ反らせ、バク転しつつ僕の顎を狙って蹴りを放つ。

蹴りを跳びささってかわすと、着地した提督が再度飛びかかってきた。横っ飛びにかわし、続く回し蹴りを足で受け、反撃に出る。

今度は武器を狙ってナイフを繰り出す。武器を奪えれば、白兵戦においてほぼ勝ちと言ってもいい。だが、僕の意図を悟った彼はニイと笑うとなんと自らナイフを空中に放り出した。僕のナイフは先程まで彼のナイフがあった場所を虚しく薙ぐ。次の瞬間、提督は僕の懐に素手で飛び込んでいた。

「もらったー！」

「いいえ、まだですー！」

提督の拳はもう目の前だ。だが、まだやられはしない。さつき少佐がやって見せたように、バク転で拳をかわしざまに蹴りを入れる。

「っ！」

「チッ！」

双方跳びずさる。互いにまだ無傷だ。距離を取り、呼吸を整える。

「流石旗艦級。一筋縄では行かないか」

「どうも。でも、提督はまだ本気ではないのでしょうか？」

「まあな。だが、本気出してもダウン取れるか怪しいね」

「恐縮ですっ！」

今度はこちらから攻撃する。自らナイフを放り出した提督は丸腰だ。満身の力を込めて胴のあたりを横に切り払う。

「武器を失った相手には、逆転の機会を与えぬように、突くのではなく切り払う。教科書通りの極めて合理性の高い発想だ」

素早く身を屈めてかわされる。

「その発想は正しい。だが、切り払うと重心がブレるから突くより体重のバランスを崩しやすい」

「！」

「だからこうする」

足を払われ、転倒する。はね起きる間もなく提督が飛びかかってくる。

「今度こそもらった！」

今度は声を出す余裕はない。夢中で蹴りを繰り返す。少佐の足が顔に当たったが、こちらも腹に蹴りを入れることに成功した。

再度距離を取り、睨み合う。提督はすぐそばに落ちていたナイフを拾い上げた。これで互いの優劣なくなった。

「カポエイラまで習得してるのか……武闘家もびつくりだ」

「お褒めに預かりまして。武術は一通り学びましたからね」

呼吸を整えたところで再度攻撃を仕掛ける。だが、結果は最初と似たりよったりで、双方致命傷を与えられないまま、時間だけが過ぎていく……

* * *

——悠に十分はたったであろうか。

自分の動きが鈍くなってきたのかわかった。それに対して、提督は動きのキレを落としていない。技だけならまだまだ対抗出来る自信はあったが、体力の面では彼に一步届かなかったらしい。このままだと遅かれ早かれギリ貧になつて負ける。だから最後の賭けに出ることにした。

先程彼がやったように、ナイフを上空に投げ出し、身軽になつて素手で飛び込む。当然、彼は自分でそれをやる位なのだから対処法も持っていた。軽く身を引いた彼は僕の体術を受けることはなく、全て受け流して逆に僕の右腕を掴んだ。

……だが、それでは終わらない。それだけならただ彼の技を真似ただけだ。突いて空になつた左手を引き、先程投げ上げたナイフが落ちてきた所を掴み、下から切り上げる。彼は俺の右腕を掴んでいる。先方からすれば利き腕を封じたつもりだろうが、僕は両利きだ。掴まれた右腕をあえて引き、逆に攻撃へと利用した。これは避けられない！だが、提督は不敵に笑い、無造作に飛び跳ねたかと思うと足で僕の腕を絡めとつた。避けられないと察して、逆に前へ出たのだ！

まるでプロレスのように、絡めた足に腕が巻き込まれ、ナイフがそのまま弾かれてかなた遠くに転がる。はつと気づいて抵抗を試みた時には、既に僕の首にはナイフを突きつけられていた。

審判をしていた響ちゃんコスイエイの落ち着いた声が体育館に静かに響く。

「Конец (終わりだよ)。司令官の勝ちだ」

模擬戦が終わつた。

二人とも尋常でない技と体力で、戦鬪は20分に及んでいた。二人とも肩で息をしている。司令官が肩を回しながら美代少尉に話しかけていた。

「いやあーやっぱ旗艦級は強いわ。次やったらもう勝てねえ」

「そんな事はありません。小官では歯が立ちませんでした」

「いやいや、体力と忍耐の差だけだよ。これからの成長率を考えたらお前の方が圧倒的に強いね」

司令官の言う通り、私が見る限りでは、技術面での二人の能力は拮抗していて、司令官が終始冷静だったのに対して、体力での劣勢を挽回しようとして焦ってしまった事が美代さんの敗因なのだと思う。

「でも、二人とも凄かったわ。目で追いかけるのが精一杯だったもの」「ははは、ありがとよ」

まあ、隣の電はどちらかという和美代さんに見とれていたただけだったような気がするけどね。

「結構時間かかっちゃったな。お前ら4人は30分後に出撃してもらうから、まあ急がなくてもいいけど用意だけしといてくれ」

「「はーい」」」

「シャワールームはこつちだ。美代も来るな？」

「ええ、ご一緒させていただきます」

「んじやア俺達は どうする？」

「ご自由にしていて下さい。坂下大尉は医務室、佐々木軍属は事務所まで行ってみてはいかがでしょう？」

「よし、それじやアそうするわ」

「あ、私達は工廠の見学へ行きます！」

「了解。それじや解散って事で」

司令官と美代さんがシャワールームに、その他の皆も思い思いの方へ向かったので、私たちは一度寮に帰ることにした。道すがら、響が
眩く。

「しかし……あの二人は化け物じみて強いね」

それに暁が応じる。

「司令官は実戦ならこんなもの役に立たないぞって苦笑いしてたけどね」

そう、実際あまり役立たないのだ。海からの敵。つまり深海棲艦は人間では歯が立たないし、何より私たち艦娘がいる。もし司令官が自ら戦うことがあるとすれば、それは陸からやってくるゴロツキだとか、現在の海軍に不満を持った過激派組織くらいのものであろう。そ

れでも、もしそんなことになれば司令官は艦娘達と海へ退避し、処理を陸軍に任せれば良いのだから、やはり戦う必要は無い。

そのうえ、実戦ともなれば相手が近接武器しか持つていないなんて事はないだろう。基本は小火器による撃ち合いになるので、やはり白兵戦技は重要度が低い。

「それでも、私たちにしたら、役立つものかもしれないわよ?」
「?」

その場にいた全員が頭にハテナマークを浮かべた。

「ほら、駆逐艦って燃料も弾薬もあまり積めないじゃない。だから近接攻撃が出来れば弾薬を温存して、継戦能力が高まるんじゃないかしら」

「XMMMMハイムミーム(なるほど)。敵の至近距離で戦う私たちだからこそ有用なのか」

物わかりのいい響が理解してくれたが、依然長女と末っ子は固まっている。もう、そんなんじや駄目よ!

「でもそれなら武器がいるわ。深海棲艦の装甲を貫ける物は限られるし……」

やっと理解した体の暁が言う。

「それなら……艦装の錨とかいいんじゃないかしら?」

普段は機関の後ろから下がっている錨。正直使い道がなく、持て余していた。

これも他の艦装と同じように、妖精さんたちの力によって人型サイズまで圧縮されたもの。人間たちはその密度故に持ち上げることが叶わないが、艦装と同期した私達には不思議な力が働き、プラスチックで出来ているかのようによく振り回す事が出来る。まあ同期を切れば私たちでも持ち上げることが出来なくなるのでいつ、何処でも使えるという訳では無いのだが。

「それはいい案なのです」

やっとわかったぞと言わんばかりに電が顔をぱつと輝かせる。

「ここには丁度、白兵戦技の達人が二人もいるものね。あとで司令官に伝えてみましょう」

寮に到着した。それぞれ自分の荷物を漁り、出撃の支度を始める。今度はどんな敵と出会うのだろうか。

* * *

シャワーを浴びて、執務室に戻ってきた俺は、出撃の支度を終えた四人に出撃命令を出した。作戦について詳しく説明する。

「目標は1―2海域……鎮守府海域南西諸島沖だ。ここの敵主力艦隊を叩き、制圧する。また、前提督が残した索敵データより、敵の編成はわかっている。軽巡へ級を旗艦に、重雷装巡洋艦……通称雷巡千級一体。駆逐八級が二体。駆逐口級が一体だ」

言いながら思う。ここは以前まで崎矢先輩が担当していた海域だ。彼は呉に転属される前は、4―3…西方海域リランカ島付近まで制圧していたらしい。

しかし、せっかく押し上げた戦線も、大本営が制圧区に鎮守府を新設しなかったためにどんどん下げられてしまった。現に深海棲艦は、崎矢先輩がここを離れ、新提督の俺が着任する迄の間に鎮守府正面海域にまで縄張りを広げたようだ。

大本営の無能さは罵られるべきではあるが、現実問題作りたいたいけど作れなかったというのが正確で、日本の衰退具合を考えれば仕方の無いことなのかもしれない。

現在の日本が所有する鎮守府のほとんどは、かつて太平洋戦争時に帝国海軍が基地や泊地を設置した場所を国内各地や外国から借り受けて、鎮守府を設営、改築したものだ。だから、帝国海軍の基地がなかった西方に対抗する鎮守府は少ない。

リランカ島も、もつとも近い鎮守府がインドネシアのリング泊地だ。そのリング泊地や、その先の南西諸島海域にあるブルネイ泊地、タウイタウイ泊地も、管轄する提督が俺と同じ今年着任したばかりの新米少佐で、深海棲艦が進行してくるのを防げなかったようだ。

崎矢提督が柱島から援護に入れた頃はなんとか戦線を保っていたらしいが、現在では鎮守府正面海域にまで進行してきてしまった。南

方にあるラバウルやブインなどの基地では、それなりに練度を積んだ提督が協力して戦線を支えているらしいが、後背の鎮守府正面海域が取られているので補給もままならず、厳しい戦いとなっているらしい。

……何故、わざわざかつての基地に鎮守府を置くのか。その理由は簡単。その付近に艦娘達の前世である艦艇たちが沈んでいるから。艦娘の建造は何故かその付近の海域でなくては出来ないのだ。艦娘は、沈んだ艦艇の魂が現代で肉体を持ったものである”という証拠もない説が一般に受け入れられていることにも頷ける。

しかし、たとえ建造が出来なくとも既存の鎮守府に艦娘を連れていくことは出来るのだから、制圧区にはどんどん鎮守府を新設していくべきだと崎矢さんは言っていた。

* * *

——数年前

「制圧した区域を守るなら楽だ。どれだけ敵が強かろうと俺が守ってみせる。だが、敵が無尽蔵に待ち構えている敵地を奪い返すのはその何倍も難しい。わかるだろう?」

「そうですね。敵は万全の状態で待ち構えています。こちらの艦娘達は長距離の航海で疲労していますからね。……でもそれなら、崎矢中佐は侵攻戦はしないのですか?」

「そうだな、俺は必要がなければしないね。俺の作戦は万全の補給環境の上でしか成り立たないから、侵攻戦みたいに限られた資材だけでやりくりするのが苦手なのさ。もししたとしても、敵を突き崩す戦術は苦手だから圧倒的多数で押し潰す数量戦法しか取らないと思うね」

正直意外だった。彼にも苦手はあるのかと。でも言われてみれば、彼がこれまで勝ち続けてきた戦いは全て退却戦か防衛戦だった。

「だから、新たな鎮守府の設営は大切なんだ。補給線が短くなって継戦能力が上がるというのは、そのまま艦隊の防衛力強化に繋がる。国土を守らなくてはならない軍隊としては、必ず必要な事なんだが

……」

「何か不味いことでも?」

「とにかく人手が足りない。今の日本の国力では自足自給が精一杯だ。軍を強化するために民間の人材を引き抜いた国家は……滅びる」

彼は心底悔しそうに言った。何とかしたいけれど、国の情勢がそれを許さない。『本土の人間は何をやっているのだ』とは口が裂けても言えない。彼らの苦しい生活は痛いほどわかっている。

「ですが……守り続けるだけでは奴らに対抗することは出来ません。今は深海棲艦も大人しいですが……」

「誰が攻めないとやった。侵攻はするさ」

「えっ?」

先程必要がなければ攻めないと言ったところではないか。懷疑の視線を彼に送ると、彼は苦笑いして答えた。

「この国にいる軍人は俺1人か? 制圧区を広げるのは、あの横須賀のおやつさんにでも任せておけばいいだろう」

それを聞いて思い出した。日本最大規模を誇る横須賀鎮守府の主の凄みのある顔。名は知らないが、姓はたしか須藤ストウと言ったはずだ。

『鈍の須藤と盾の崎矢』

いつだったか彼ら日本二大提督を中国の逸話になぞらえてこのように言っていた同僚がいた。冗談かと思っていたが、その役割分担は本当に存在していたらしい。

「あの人は凄いや。敵をつき崩して倒すことにかけては天下の才だと言えるね。保証するよ」

この名提督をもって言わせるのだ。確かに、今の日本軍には実力の無いものは淘汰される登用システムが出来上がっている。その中で最大規模の鎮守府を任せられるということは只者ではないのだろう。

「いつの日か先輩と須藤提督の演習を見てみたいものです」

「須藤さんはどう言うかわからないが、俺は何時でも見に来てくれて構わないよ。まあもし俺と須藤提督が戦術で競ったら……」

少し思案して、彼はこう答えた。

「まず間違いなく俺が負けるな」

「そんなことはありませんよ。きつと互角以上にはなる筈ですよ」

須藤提督との面識はないが、この魔術師ウィザードの異名を持つ若い提督が、誰かに敗北する姿など考えられなかった。

「いや、あのおやつさんには勝てないし、争いたいとも思わないね」

そう彼は謙遜するが、俺の見立てでは2人の実力は五分五分だ。互いに長所があり、弱点もある。

「まあ、今の日本はお二人がいる限りは安泰ですね」

とりあえず現在の日本には、最上級の矛と盾が揃っているのだ。彼らがいる限り、全面的な敗北を喫することはないだろう。

「言ってくれるね。お前もいつかは日本を支えてくれなきゃ困るんだぞ」

彼は苦笑いして話を収めた。

* * *

「道中の索敵艦隊は？」

雷が問いかける声で我に返る。

「駆逐口級二体だ。まあ、これはこちらが倍の戦力があるから、数の暴力すれば勝てるだろう。問題は敵主力だ」

「重雷装巡洋艦って艦種は初めて聞いわね。どんな敵なの？」

「基本的な性能は軽巡洋艦をベースとしている。だが、火力と装甲を少し落とす代わりに大量の魚雷を積んでいるらしいんだ。その威力は戦艦の砲撃にも勝るとか」

そう伝えると、暁は嘘寒そうに肩をすくめた。

「確かに強そうだけれど、艦隊が劣勢で、魚雷が撃てなくなったらただの力カシになりそうね」

「お、いいところを突くな。今回の作戦はそれが肝になる」

ここからの説明は電に任せることにした。今朝サンドイッチを頂いた時に今日の作戦案を相談していたのだ。電が話し出す。

「ええと、確かに重雷装巡洋艦の雷撃は危険なのです。中途半端に損害を与えて、雷撃戦に移行してしまったら強力な魚雷による轟沈の危険もあるのです。ですが、重雷装巡洋艦といえども基本は私達と変わらなくて、中破状態になれば雷撃はできなくなります」

一息に言い切って、握っていた緑茶を一口飲み、説明を続ける。

「つまり、雷撃戦に移行するまでの中距離砲撃戦の時点で重雷装艦を中破以上にまで持っていければいいのです。重雷装艦は夜戦にも強いので、理想は昼戦で大破以上、最善は撃沈までいければいいのですが、とりあえずノルマは中破以上なのです。残りの敵は私達の得意な夜戦で殲滅すればいいので、とにかくいかに砲撃戦で重雷装艦の戦力を削ぐかが今回の作戦のキーとなるのです」

今度は緑茶を全部飲み干して、俺の方を不安げに見つめる。俺は頷き、話を引き取る。

「大方は電の言ったとおりだ。今回は重雷装艦が脅威となる。だが、前回の重巡のように装甲が硬いわけではないから、集中砲撃すれば突破は可能だ。重雷装艦が旗艦ではないのもポイントだな。旗艦をかばってこちらの攻撃を吸ってくれるかもしれない」

「集中的に狙う事で、雷撃をさせない事が最重要なのです」
力を込めて電が言う。

「相手主力は五体。数の上でも、艦のクラスでも劣勢だ。だが、突き崩すポイントはいくらかでもある。何としてでも勝って帰って来い！」

こうして、1―2……南西諸島沖警備作戦が開始されたのである

9話 抜錨！ 第一水雷戦隊！

第一艦隊 第一水雷戦隊

旗艦 暁Lv. 5

2番艦 響Lv. 5

3番艦 雷Lv. 4

4番艦 電Lv. 4

5番艦 B l a n k

6番艦 B l a n k

以上が今回の編成、というか全兵力。大淀と明石は彼女達の特殊な境遇上まだ前線に立てない。駆逐艦のみの貧弱な艦隊だが、水雷戦隊の強み、“回避と夜戦火力”を活かせば活路は十分すぎるほどにある。前回の出撃でMVPをとった暁と旗艦だった響は練度5。雷と電は練度4だ。

電に艦隊名を決めるように言われたので、便宜上第一水雷戦隊と名付けたが、実際軽巡洋艦が一人もいないので、水雷戦隊というより駆逐隊の方が名としては妥当だろう。だが、今後軽巡が着任した時にまた名前を変えるのも面倒なのでこれで妥協する事にした。

「あーあー。マイク大丈夫か？」

作戦司令室に備え付けられた巨大な無線機で艦隊と通信する。その機材の管理は明石と大淀に任せた。それぞれの本領である“工作艦”、“艦隊旗艦”としての経験を十二分に活かしてくれており、前回自分で無線機を弄った時よりずっとノイズが減り、通信が安定している。

背後にはさらに美代がいる。何でも、艦隊指揮に興味があるんだとか。坂下大尉と佐々木軍属はそれぞれが思い思いに鎮守府を見て回っているらしい。

無線機から旗艦である暁から返答が返ってくる。

「無線は問題ないわ。そろそろ第一交戦ポイントに近づいてるけど、陣形はどうするの？」

「そうだな、基本は単縦陣でいい。だが、敵を発見したら即座に伝え

ろ。相手に合わせた方が動きやすい」

「わかったわ……って、もう発見しちゃったけど」

無線機を通じて、敵艦の威嚇射撃の音が聞こえてきた。

「敵艦見ゆー！ 索敵データ通り駆逐艦2体。左弦前方、10時の方向。敵はこちらの前方を横切るような進路をとっているのです！」

敵は左弦前方10時の方向、左から右へ自然なカーブを描いてこちらの艦隊の前方を横断、こちらは単縦陣で奴らの航路をほぼ垂直に割る進路……

壁掛けの作戦ボードのマグネットを報告をもとに動かし、再現する。この布陣は俗に言う「T字不利」だ。このままでは砲雷撃がやりにくい事だろう。この状況を打破するには……

「よし、最大戦速で急進し、敵艦隊側面に砲撃。その後進路を敵に沿わせ、同航戦に移行しろ！」

「二三了解（なのです）！」「」

* * *

——勝負は一瞬で着いた。

砲撃一巡で敵艦一体を撃沈。一体を中破。こちらも雷撃戦で仕留めた。電と雷が過擦り傷を負ったが、誤差の範囲だろう。声も明瞭で、まだまだ戦意に溢れている。その後もしばらく索敵をさせていると、暁から無線が入った。

「敵主力艦隊、発見したわ！ こっちも索敵データ通りね！ 敵は……旗艦の軽巡洋艦を中心に輪形陣をとっているわね」

「よかったですー！」

思わず指を鳴らす。あまりいい音は鳴らなかったが。

「輪形陣は雷撃が最もやりにくい陣形なんだ。これだけでも重雷装艦の脅威はかなり薄れたぞー！」

輪形陣とは、旗艦を囲うように味方艦艇を布陣する陣形だ。だから各艦艇は雷撃する時、射線に旗艦が被ってしまい、正確に発射できないのだ。

「……で、陣形はどうするんだい？」

冷静な響から、現実的な問いが出される。

「そうだな……相手が輪形で旗艦を守っていることだし。こちらは縦陣で随伴艦の撃破を狙おうか。雷撃の脅威が薄れたとはいえ、重雷装艦が強力なのは変わりない。最優先で仕留めろ！」

「了解。いくよ、皆」

* * *

砲撃戦が始まる。敵艦隊は前方からやってくる。反抗戦だ。

「攻撃するからね！」

暁が開幕砲撃をする。雷巡を狙ったが、少しそれで隣の駆逐艦に命中し、中破させる。その報復がきた。五つの砲塔が私達を狙う。

「さて、やりますか」

私たちは駆逐艦だ。機動力を生かして回避し続け、雷撃戦と夜戦でフィニッシュを決めるのを基本スタンスとしている夜戦での逆転を狙うためにも、中破以上の傷を負うのは避けねばならない。

私の砲撃で中破していた駆逐艦が沈む。その間に雷と電も、二人で一体を沈めた。

しかし、肝心の雷巡に傷を与えていない！ 私たちは焦った。気が付けば既に雷撃戦の距離になっていた。いくら敵艦隊が雷撃が当たりにくい輪形陣だったとしても、この至近距離で大量の魚雷をばらまかれては避けきれない。

「それ以上接近するな！ 魚雷がクリーンヒットしたらただじゃ済まないぞ！」

司令官がヒステリックな声を上げて、警告を促した。でも大丈夫、私達は駆逐艦。ちゃんと距離さえ保てば魚雷なんて……

そう思った時だ、息が一瞬詰まった。電が雷巡に接近している!? あの距離では避けられない！

「こ、航行装置に不調！ 舵が効かないのです！」

そうだ、電は先立っての前哨戦で被弾していた。小破にも満たない被害だったので無視して進行したが、どうやら被弾したのは航行装置の歯車部分だったらしい。司令官から指示が飛ぶ。その声は明らか

に焦っていた。

「電！ 舵が効かないんだな!? それなら最大戦速で直進、とにかく足を止めるな！ 他の3人は雷巡の妨害だ、いいな！」

「でも……」

「いいから速く！」

「駄目だ、間に合わない！」

その時雷巡子級は既にその無慈悲な目で標的を捉えていた。

「電！ 避けて！」

魚雷発射に気づいた私と雷が異口同音に叫ぶ。だが、電はとても回避に移れる体勢ではない。大量に発射された魚雷は殆ど逸れていったが、一本は真っ直ぐに電目掛けて伸びてきていた。

また私は、姉妹を守れないのか……

だが、その魚雷は電には命中しなかった。彼女の、私達の姉が、旗艦であるにも関わらず庇ったのである。暁は微笑を浮かべて言った。

「司令官、ちよつと無茶するわね」

「おい、暁！」

「暁ちゃん！」

「暁は大丈夫、沈まないわ。だって……」

高く高く上がる水柱。ニヤリと笑みを浮かべる雷巡。私の目には、全てが無彩色に映った。

* * *

暁ちゃんが被雷しました。魚雷を回避できない私を庇って……

でも、私は見たのです。魚雷に眼前に迫る中、主砲を切り離して左前方に投げ出す暁ちゃんの姿を。そして、僅かに左弦方向に魚雷が逸れていくのを……

「大丈夫、暁は沈まないわ。だって……」

力強い声が、通信回路に響きます。

「だって……暁は1番お姉さんだから！」

水柱が収まったところに、暁ちゃんは立っていました。安堵と心配

の溜息を同時についた響ちゃんの声がします。

「暁、どうやってあの魚雷を……」

「そんな事今はどうでもいいわ。ボケっとしてないで魚雷を撃ちなさい！」

その声でハツとして、皆雷撃戦の用意をします。

私達は暁ちゃんと違って魚雷を積んでいません。装備した艦装は“12.7cm連装砲”1基だけ。しかし、これは追加艦装の話。

私たちの艦装は、航行装置や機関、最低限度の砲雷装備を積んだ“基本艦装”と、基本艦装に同期させて運用する“追加艦装”の2つに大別できます。私達が装備する連装砲や、暁ちゃんが装備する三連装魚雷が、この追加艦装にあたります。

砲や魚雷などの攻撃に関する能力は基本的に追加艦装を用いて強化するのですが、基本艦装にも一応最低限度の攻撃力は備え付けられています。だから追加艦装に魚雷を装備していない私達も、威力は低いです。魚雷で攻撃することは出来るといっわけなのです。

「攻撃するからね！」

「遅いよ！」

「てーっ！」

「魚雷装填です！」

私と雷ちゃんが敵の雷巡を、暁ちゃんと響ちゃんが敵旗艦の軽巡を狙い、魚雷をばら撒いた。獲物を仕留めきれなかった雷巡は、呆気に取られている間に魚雷に接近され、回避不能。魚雷全弾命中で撃沈。軽巡は素早い反応を見せたが回避しきれず、二人の魚雷が一本ずつ命中して中破。

ここで雷ちゃんが叫びます。

「これ以上接近したら乱戦になるわ！ こっちの被害も大きくなる！」

「どうするのです？ 司令官さん！」

落ち着きを取り戻した司令官さんが指示を下します。

「そうだな、一旦退避して態勢を整えるのがいいだろう」

私達の意見とも一致したので、一時退避することになりました。

「よし、被害状況を確認するぞ。響、報告を頼む」

「旗艦暁が主砲一つを完全破壊されて小破。でも身体に傷はないよ。以下三名は無傷だ」

「了解……それにしても暁。どうやって魚雷を回避したんだ？俺は見
ていないが、雷によればかなり危なっかしかつたらしいが……」

「そうさ。私たちにも説明してもらわないと」

響ちゃんは余裕のない表情なのです。暁ちゃんはかつて帝国海軍の艦だった頃に、第六駆逐隊の中で一番最初に沈みました。きつと響ちゃんは、また同じ事が起こるのではないかと、心配しているのでしょう。表情からみて、雷ちゃんも同じ事を感じていたようです。勿論、庇われた私自身も。

「簡単なことよ」

そんな私たちの心配をよそに、すまして暁ちゃんが説明しだします。

「私たち艦娘の魚雷はある程度敵の反応を感知して誘導するのは知ってるわよね？ 勿論大幅に軌道は変わらないけど」

「うん」

「そして深海棲艦の魚雷も同じように、私たちに反応して誘導する」

ハツと気づいた。だからあの魚雷は……

「で、私たち自身だけじゃなくて、もしかしたら『艦装』にも反応するかもしれないって思ったの」

納得がいった。確認の意で言葉を返す。

「だから主砲を投げつけたのです？」

「その通り。電は見ていたのよね」

誇らしげに無い胸を張る。

「突然現れたより強い反応に引き付けられて魚雷が逸れたって訳」

「艦装にそんな使い方があるとは……」

響ちゃんが溜息をつく。暁ちゃんは、左手に持った主砲をぶらぶらと振りながら、無線越しの司令官さんに話し続けます。

「主砲は妖精さんに回収してもらったけど、完全破壊されちゃっても

う使い物にならないわね。どうする？司令官」

うーん……とうなる司令官さん。

しかしそれ程間を開けず指示が出ます。

「後で修理してもらおうから今は艦装にジョイントしておくんだ。しかし砲撃戦がほぼ出来なくなったわけだから、単縦陣の最後尾に着いてくれ」

暁ちゃんは、追加艦装の12.7cm連装砲を破壊されてしまいましたが、基本艦装に搭載された砲はまだ生きていますので、一応砲撃戦にも参加できます。ですが、この基本艦装付属の砲は本当に最低限の火力しかありませんし、扱いにくいので、武器としての働きはほとんど期待できないのです。

「わかったわ」

「旗艦の務めは後ろからだとな難しいだろうから、旗艦代理として雷に戦闘指揮を取ってもらおう」

「了解！ まっかせて、司令官！」

こうして、陣形が再編成されました。

旗艦 雷

二番艦 響

三番艦 電

四番艦 暁

「……敵は射程内に収めているけど、威嚇射撃しかしてこないね。この様子だと、敵軽巡は主砲が使えないみたいだ」

「よし、それなら当初の予定通り、夜戦で一気に片をつける。それまで待機だ。二人交代で警戒してくれ」

夜になった。

私達の本領発揮ね！ 鼠輸送任務なんかよりやっぱり戦闘よ！

無線で司令官から声がかかる。

「皆、準備はいいな？ 敵旗艦は昼戦の攻撃が効いて砲が使えない。」

しかしまだ魚雷を撃ってくる危険があるから優先的に仕留めろ」

「了解（なのです）！」」

急襲。まさにその言葉が相応しい再突入。日が沈むまでは時折威嚇射撃を交わす程度で、ゆらりゆらりと射程限界をうろろうろしていたのと打って変わって、4人全員がほぼ最高速で接近する。

「敵、砲戦距離に入りました！」

電が報告を入れる。

だが、司令官は何も言わない。今回は私に指揮を委ねてくれているのだ。

「このまま最高速を維持！ 蛇行して弾を避けて！」

「了解！」

「Постижение（了解）」

時々、このようにロシア語が交じる。これも以前の出撃と同じ、何故か落ち着く。敵は3体。しかも1体は砲が使えない。こちらも暁の砲戦火力が期待できない状態ではあるが、兵力の絶対数では優位だ。戦術的な優位が確立されているなら、特別な戦術は必要ない。駆逐艦の本領である速度と機動力を活かして急接近し、一撃必殺の魚雷を叩き込む。

この様な数にものを言わせる戦法の時。先頭で戦う者……つまり今で言うとは私は、敵の照準を自分に振り、後続の味方の安全を確保する事が仕事だ。特に今回は暁が砲戦に参加出来ない。彼女を安全に雷撃戦の距離にまで連れていくことが、敵への被害を高めるために必要だ。

……と、以上が長々と電に述べられた私の役割。まあ噛み砕いて言えば、私が姉妹のために囷になるって事よね。

「そんな攻撃当たんないわよ！」

だからこそ単縦陣での蛇行だ。この陣形は有利な点が二つある。

一つ

敵からすれば、暗闇の中高速で、しかも不規則に動き回る的に狙いを定めることになる。

そんな的に精密射撃をしながら高速航行は出来ない。必然的に、深

海棲艦は速力か砲撃精度のどちらかを犠牲にせねばならない。敵は水雷戦隊、速力と夜戦火力が武器なのだから、このどちらか一方を捨てざるを得ないとなるとかなりの戦力ダウンが見込める。

そして二つ

視界の悪い夜間に単縦陣で突っ込むことで、真っ先に発見される先頭にいる艦……つまり私、雷が集中砲火の的になるということ。これのどこが利点なのかというと、砲撃を一艦に集中させる事で、随伴艦の安全がより確実なものになること。つまり、私の囷としての効果が高まる訳だ。

しかし、司令官はこの作戦について電から提案された時、苦そうな口調で注意を喚起した。

「戦術的には非の打ち所がない。だがそれはお前の被弾を無視すればの話だ。それで雷が大破してしまつては元も子もない」

「いいじゃない、被弾したつて。私たちなら大丈夫よ、任せて！」

私は、以前司令官に尋ねたことがある。

「私たちが被弾することがそんなに嫌か」

それに彼は冗談めかして答えた。だが、その下手な冗談の底には、何かあるのではないのか。いや、別に何か根拠があつてそう思う訳では無い。ただ、何となくそう感じるのだ。

しかし、だからと言つて、一人も被弾させずに勝利を得る、等と言うのは言うのは簡単だが実行するのはほぼ不可能に近い。提督として、彼がその事を知らないはずはないのだが……

「大丈夫よ！ 司令官。私なら必ず無事に帰るから！」

さしあたって今はこの作戦以外有効な作戦が思いつかない。最悪私が大破したつてドックに入ればすぐに治る。大丈夫。

そう何度も説得して、渋々ながらも許可を得たのだ。

せっかく得た先鋒の名誉。しっかりと先陣を切つて、私の仕事をしなくてはならない。

「さあ、砲戦よー！」

暁以外の三人で、砲撃を初める。

風を切る音をたてて私の髪を砲弾が掠めた。敵の反撃は精度が高

い！ 砲弾の精度が高いということは……

「敵は速力を捨てることを選んだみたい！ このまま高速接近して雷撃、その後は西に離脱！ ここで艦列の再編成をするわ！」

「了解！」

高速艦を集めた水雷戦隊による一撃離脱戦法。かつて大日本帝国が重視した作戦が、ほぼ一世紀後の今、再現される。

速力は全開。機関を酷使して、駆逐艦の武器である機動力を最大限に引き出しつつ、やり過ぎと思われるほど砲を乱射する。これは、マズルフラッシュ 発火炎で私に注意を向けさせるためだ。本当は探照灯や照明弾サーチライトがある尚良いのだが、今回はそれがないので、効果はどれほどあるかわからないが、その代替策というわけだ。

「До свидания! (さようなら!)」

響が落ち着いたロシア語と共に、駆逐艦を一体沈める。夜戦は至近距離で展開されるので、駆逐艦の貧弱な12.7cm砲でも一撃必殺の凶器となる。

「命中させちゃいます！」

右舷後方で上がる水柱。声からすると電だろう。こちらも駆逐艦を仕留めたいらしい。あとは中破した軽巡だけ！

軽巡はちようと私と暁の間にいた。

どちらを迎撃するか右往左往していると言った様子だ。笑って魚雷管を向ける。

「逃げるなら今のうちだよ？」

「もつとも、逃げれるのならの話だけだね」

暁の三連装魚雷、私の12.7cm連装砲が一斉発射される。海上と海中をまっすぐ伸びた二つの白い線は逸れることなく軽巡に突き刺さり、今日一番の大きさの水柱を立てた。

* * *

——柱島泊地鎮守府中央棟1階廊下。

午後9時20分……あつこここではフタヒトフタマルと言うのだっ

け。僕……美代少尉は提督に伴って母港に向かって歩いていった。

「憲兵は陸軍の管轄だろ？ 別にわざわざ来てくれなくてもいいんだぞ？ 業務さえ怠らなければ自由にしてくれていいさ」

「あついえ、僕は好きでお供させて頂いているので、お気を遣わないで下さい」

「そうか？ ならいいんだけど」

こんな夜中に何をしているのかと言うと、彼の部下である艦娘達を迎えに来ているのだ。艦隊司令官などという地位になれば、普通このようなことはしない。執務室で彼女達が報告に来るのを待つていればいいのだから。しかし、彼は驚くほどフットワークが軽い。

規律ある士官学校卒業生として言わせてもらえば、自分の身分を傘に来て偉そうにする人は嫌いだけど、自分の身分をわきまえない人もどうかと思うのだ。それを彼に言うと、

「遠征とか安全な任務に出た時はともかく、死ぬかもしれないような危険な海域に送り出しておいて出迎えの一つもしないって言うのは失礼なんじゃないかな」

と、笑って答えるのだ。

「失礼なんじゃないかな？」 部下に対して？

先程から何度も感じていた事だが、この人は僕の知っている軍人とは違う。部下を顎で使うような真似は絶対にしないのだ。現に僕自身、行動を全く制約されない。

憲兵は本来は陸軍の管轄とはいえ、海軍の治安維持を命じられた僕のような者はいわば海軍へ出張しているようなものなので、仮にはあるが山村提督の管轄に入っているのだ。生殺与奪とまではいかないが、殆どの行動を制限する権利を、彼は持っている。にもかかわらず、完全に野放しといった体である。

……まあとにかく、普通の軍人ではない。だけど悪い人ではない。とりあえずそれは喜んでいいのではないかな。

「そろそろ母港に着くな」

提督の声で現実を引き戻される。

「ええ……あの、提督」

「うん？」

「僕を放っておいて良いのですか？ 何か仕事があるのならさせて頂きたいのですが……」

そう言うのと提督は首を傾げて

「進んで仕事をやりたがるなんて変わってるな」

等と言うのだ。冗談じゃない。部下にほとんど仕事をさせないこの人こそ普通でないのだ。

「憲兵の業務は鎮守府及び近隣の街や島の治安維持。〃あの鎮守府には憲兵がいる〃と近隣の住民達に見せつけてくれるだけでいいんだよ。それだけで、犯罪の抑止になる」

「ああ、いえ、それではタダ飯喰らいじゃないですか。それは嫌です」
現在の日本では、陸軍の憲兵隊が、警察と協力して治安維持を行っている。深海棲艦の出現後、日本は慢性的な人的資源不足に陥っているため、どこかの部署が他の仕事も兼任しなければやっていけないのだ。

兼ねてより高齢化社会と言われ続けていた日本だったが、深海棲艦の侵攻によってその高齢者達の殆どが亡くなってしまったためだ。現在、海軍で比較的若い人たちが提督の任務に当たっているのもそれが原因。

しかし、鎮守府の治安維持と言っても、この鎮守府には僕を含めてわずか9人しか居ないし、昼に顔合わせした付近の住民達も呑気なもので深海棲艦がすぐ側の海域にいるというのにお茶まで出してもてなしてくれた。こんな優しい人たちがばかりの地域で治安が悪くなるはずがない。

「だって俺1人でやり切れる量しか仕事がないんだもん。部下がそこまで気を使う必要は無いよ。毎日定時上がりつても悪くないさ」
「そういうものでしょうか……」

平和なのはいい事だが、それならそれで仕事をしたいと思うのだ。こんなに優遇してもらって置いて、無為徒食を続けるのは気分が悪い。しかし、何かやる事をくれと何度もせがんでも、彼は困って頭をかくばかり。

「仕事つつたつてなあ……憲兵を指定業務外で働かせたら違法じゃないのか?」

「その指定業務がほぼ無いから困ってるんですよ!」

うーん、とうなる提督。

「そうだなあ……それじゃあ副官としての業務も付加させてもらおうかな」

「ええ、喜んで!」

副官! 丁度僕は尉官だし、いい役職だろう。それに苦笑いして応じた彼はこう言った。

「本来は艦娘を率いる提督には秘書艦がいるって理由で、一般艦隊の司令官と違って副官は置かれななんだ。でもね、知ってるだろうけど副官ないし秘書艦の負担は結構大きい。だから美代には秘書艦の子の仕事を手伝ってあげて欲しいんだ」

「了解です。事務処理には自信があります」

「お、頼もしいね」

提督に仕事を取り付けた所で、母港へと到着する。そこには既に第六駆逐隊の面々が帰投していた。しかし、1人知らない子が混じっている。駆逐艦娘達より頭一つ分位高い身長。セーラー服をあしらった真っ白な制服に同じ色の帽子。彼女は……?

艦装を装備している所を見ると、艦娘であることは間違いなさそうだが……

その少女が提督を見て1歩進み出る。

「木曾だ。お前に最高の勝利を与えてやる」

* * *

艦隊が帰投。俺は敢闘してくれた第六駆逐隊の面々を迎えるために母港へとやって来た。道すがら美代の「仕事がしたい、仕事がしたい」という切実(?)な頼みを受け、仕方なく副官として任命する事にした。もちろん、仮にだが。

で、やって来た母港なのだが、そこにいたのは第六駆逐隊だけでは

なかった。

「木曾だ。お前に最高の勝利を与えてやる」

そう名乗った真つ白な制服の少女。背中に暁型よりやや大きい基本艦装、右手には14cm単装砲。そして、「木曾」という名。学生時代に習った記憶がある。彼女は……

「球磨型軽巡洋艦5番艦、木曾で間違いないかい？」

頷く少女。

「ああ、これからここで厄介になる。よろしくな」

気さくな印象。表現は悪いが、ずばり「おっぱいのついたイケメン」と言った感じか。ん？ 左の美代からたしなめるような視線が送られている。待て待て、俺はまだ口には出してないぞ。何が聞こえたんだお前は。しかし……

木曾の後ろに立つ響に尋ねる。

「彼女は一体？ 俺は建造なんてした覚えがないし、そもそも建造施設はロックされているから建造は出来ないはずだ」

「それが……」

響が首をすくめる。

「それが、突然現れたんだ……海から」

「……!？」

後ろで首を傾げていた美代が控えめに発言を求めぬ。

「もしかして、『ドロップ艦』では無いでしょうか？」

「ドロップ艦……」

聞いたことがある。多分崎矢さんに聞いたのだろう。

深海棲艦の装甲を形作る素材と、艦娘が装備する艦装の素材は酷似している。だから、深海棲艦を倒し、深海棲艦の本体である怨念などの負の感情が浄化された時、深海棲艦の呪縛から解放された艦装核に新たに艦娘の意志が宿ることがあると。こうして生まれた艦娘が「ドロップ艦」と呼ばれることも。

……ちなみに、「深海棲艦の残骸に意志が宿った」ということなら艦装だけが現れる方が自然だ。艦娘たちの肉体はどのようにして現れるのかと言うと、実はよく分かっていない。

「現れた基本艦装に宿る妖精さんが、近くのタンパク質や鉄分、カルシウムなどをかき集めて肉体を作り上げている」などと言う恐ろしい仮説が立っているが、証拠がないとはいえ妖精さんたちなら本当にやっつてそうで怖い。

暁が木曾が現れた時のことを話そうとするが、間近で見たはずの彼女にもよく分からないらしい。

「敵を倒して、帰投しようとしたら突然海が光り出したの、そして……」

「俺がいた、って訳だ」

木曾が暁の言葉を引き取る。

「正直俺も何が何だかわからん。気がついたらこの身体で、海上に立ってた。だが……」

帽子を目深に被り直して言う。

「俺が何者なのか、今何が求められているのかはわかる。俺も艦娘だ。深海棲艦と戦いたい」

強い決意の目。当然だ。艦娘とはそもそも深海棲艦から人々を守りたいという気持ちがある人の形を取ったもの。ならば、彼女には守らせてあげなくてはならない。それは俺の義務。

「もちろんだ。君にはここで戦ってもらおう。丁度水雷戦隊の旗艦となる軽巡洋艦を探していたところだ」

木曾の後ろに控える第六駆逐隊に視線を送る。

「お前達も、軽巡の指揮下の方がより経験を詰めるだろう？」

「もちろんさ。木曾さんには色々縁があったことだしね」

響がそう応じる。

そういえば、響が第一水雷戦隊の一員として参加したキス島撤退作戦に木曾は同行していた。他の3人もよく懐いていることだし、艦隊の旗艦は彼女に任せて構わないだろう。

「ありがたい。水雷戦隊の指揮なら任せろ」

まさか着任後わずか2日目で新たに戦力を得ることが出来るとは思っていなかった。駆逐艦には出来ない水上機の運用。弾着観測。索敵。彼女がいれば、今後の艦隊運用は今までよりずっと楽になるだ

ろう。

「それでは改めて……」

第六駆逐隊の皆にそうしたように、海軍式の敬礼をする。

「俺は山村少佐。この鎮守府の提督だ。水雷戦隊旗艦としての君の手腕に期待する。よろしく頼むよ」

そう言うと、木曾もやや大げさに敬礼の姿勢を取ってみせる。

「球磨型軽巡洋艦5番艦木曾、ただ今を持って提督の麾下に入る。カタパルトなんか要らねえ、水雷戦隊で暴れ回ってやるよ」

10話 “家族”

俺が柱島泊地鎮守府に着任してから、丁度2週間がたった。

我が艦隊の戦力は軽巡洋艦1人、駆逐艦4人。それで全て。しかし、新海域へ攻め込むことを命じられた訳では無いので、この2週間は時折沖合にふらりとやって来るはぐれ深海棲艦を迎撃したり、近くの鎮守府の艦隊と演習したり、注文していた家具が届いたので執務室を模様替えしたりと、最前線の鎮守府としては比較的平和な日々だった。

……ちなみに、着任初日に釣り上げ、飼うことに決まった金魚は、響が追加注文した家具 “涼しげな金魚鉢” の中で気持ちよさそうに泳いでいる。

「はい、今日のデイリー開発任務の書類よ。開発レシピと結果を書いてサインしてね」

「了解。ありがとね雷」

今週の秘書艦は雷だ。先週は響、先々週は暁と順にやらせている訳なのだが、皆大人顔負けの仕事っぷりを見せてくれている。響はともかく、暁や雷まで立派に秘書の仕事をごこなしているのだから驚きだ。それに……

「それでは、開発には僕が行ってきます」

「おお、助かるよ」

仮にはあるが副官として任命した美代も立派に働いてくれている。ぶつちやけ秘書艦と俺の2人だけでも十分仕事は回せるが、彼の協力で2人でやるよりもずっと効率よく仕事が回る。流石、士官学校の次席旗艦級^{フラグシップ}、処理能力は折り紙付きだ。

しかし、開発には艦娘の立会いが必要。隣に立つ雷が悪い顔（でもかわいいなあ）で美代に書類を手渡す。

「はい、お願いね。立会い艦は電にしといたわ。多分今は響と部屋にいると思うから連れて行ってね」

「……うん、ありがとう」

やや無然として頷く美代。ここ1週間彼と電の様子を見ていたが、

どうも美代は電がほとんど自身と会話してくれないことを気にしているようだ。これだから学業エリートは鈍感でいけない。人として凄くよく出来た男だが、所々大事なところが抜けている。電からの好意について気づかないというのももちろんだが、自分のルックスが水準を遥かに超えている事を自覚すべきだと思うのだ。

まあ、そんな事は自分で気づくべきことなので口に出して言ったのは開発について。

「レシピは任せるよ。出来れば駆逐、軽巡用の装備がいいけど、今後を見越した重装備狙いでも構わない」

「わかりました」

こいつは本当によく仕事が出来る。『適当にやっておけ』と言えば、その場の最適解で動いてみせるのだ。開発に関しても、詳しく説明する必要は無い。美代が執務室を出ようとしたその時、執務室の戸が空いた。

「提督……ああ、憲兵と雷もいたか。今いいか？」

「おう木曾か。敵艦かな？」

木曾には1日3回、水上機による偵察をさせている。駆逐艦娘には出来ない芸当なのでとても頼りにしている。肉眼では視認できない距離にいる敵を発見できるのは本土防衛を課された鎮守府としては大きなメリットだ。本当は航空母艦がいればもつと効率的に索敵が出来るが、今の柱島泊地鎮守府には1人も居ない。

その索敵中に執務室へやってきた木曾。きつと何か異変があるのだろう。

「1隻の船がこちらに向かって来ている」

「船か。この当たりの漁師さんじゃないのか？」

以前第六駆逐隊を出撃させ、鎮守府正面海域よりさらに南の南西諸島沖……通称1―2海域まで制圧したので、近海にやって来る深海棲艦はかなり減った。それで近隣の住民達から『漁に出たい』という要請があったので、大本営に取り次いだところ、完全に制圧下に置かれた1―1海域でのみ、漁に出る許可が降りたのだ。

「いや、あの装甲は民間の船じゃない。だが、大きさは駆逐艦より小さ

かった、多分駆潜艇位だろうな。それと……」

「どうした？」

「艦娘の護衛が付いていた」

艦娘の護衛付き。それが意味するのはすなわち別の鎮守府の提督、あるいは国家要人^{VIP}レベルの人物の来訪。しかし、柱島のような孤島の鎮守府に用がある要人などいないと思われるので前者の可能性が高い。

「雷。今日柱島での演習の予定はあるかい？」

あわてて雷が書類をめくる。

「ないわ。一昨日のブルネイの提督さんを最後に演習要請はゼロ。それじゃあその人って……」

1人心当たりがある。というか、その人に違いない。自身の仕事を放り出して、孤島の鎮守府に着任した青二才に、連絡もせずは何食わぬ顔で会いに来る提督。そんな提督、あの人しかない。

「なあ木曾。その艦娘達について詳しくわかるか？」

「先頭に立っていた者は大弓を持っていた。あの艦装はおそらく正規空母のものだろう。後の者はわからないが、艦載機に混じって瑞雲が飛んでいるのも見たから、航空戦艦か、あるいは航空巡洋艦がいると思う。6人の護衛艦娘で例の船を困うように輪形陣をとっていたな」
「うん。報告ご苦労様」

大弓を持った正規空母。

その言葉を聞いた時点で、もう確信が持てた。

「崎矢さんだね。まず間違いなく。旗艦の空母は多分飛龍さんだろう」

「崎矢さん……って前の司令官よね？ 何の用かしら」

「そういえばこの前戦果報告した時に『時間が出来たら顔出す』って言ってたな。まあただの気まぐれだと思うけど、迎えないのは道理に合わない。美代、開発は後でいいから、一緒にきてくれるかい？」
「もちろんです。あの崎矢提督と会えるだなんて光栄です」

ぱっと美代が顔を輝かす。崎矢さんは日本海軍の実質N.O. 2ということで、陸軍の間でも結構有名人だ。まあ多分、こいつは立派な

威厳ある人だと思っっているだろうな。確かに立派な人だが、初めて彼の人となりを知れば面食らうかもしれない。

さて、彼は一体何を目的にしてやって来たのか。彼には振り回されてばかりだが、助けてもらった回数ももう数え切れない。今回も、ふらつと来たと見せかけて、結構大事な情報でも持つてきてくれるのかもしれない。

* * *

——10分後、柱島泊地鎮守府母港

木曾が発見した小型船と、その護衛の艦娘たちが到着した。出迎えに出たのは俺と美代、木曾、第六駆逐隊、佐々木さんの8人。佐々木さんは美代と同様、まだ仕事が少なく呼んだら喜んで付いてきてくれた。彼女曰く、「若いお兄さんに会えるなら大歓迎よ」だそう。

本当は坂下さんも呼ぶつもりだったのだが、彼は佐々木さんや美代とは違い、医者としての仕事がある。本来はこの鎮守府専属の軍医だが、美代が近辺の警察業務を受け持つのと同様、この当たりの医療関係の仕事は全て彼の管轄に入る。警察沙汰が起きなければ仕事のない美代とは違い、医者はいついかなる時にも必要とされているのだ。

いち早く母港へ入港し、艦装を下ろした飛龍さんと、俺と同じ白色の軍服に身を包んだ長身の男が姿を現す。右足をややぎこちなく引きずるように歩く独特な歩き方。そう、彼が崎矢少将だ。

「久しぶりだな。改めて、着任おめでとう。山村中佐殿」

彼が人をからかう時にするニヤニヤとした顔。

「お久しぶりです。わざわざ来てくださってありがとうございます
……」

ここまで言っつて、ふとさっきの彼の言葉のとんでもない単語に気づいた。

中佐だっつて!?

あわてて顔を上げると、飛龍さんがさっきの崎矢さんと同じ表情で答えた。

「気づいた？ あなたは今日をもって中佐に昇進よ。おめでとう」

「は!?!」

「やったじゃない、司令官!」

「X O P P O M O (それはいいな)」

「おめでとう、司令官(さん)!」

一斉に六駆の皆に言われるが、いやいや、ちよつと待て。おかしい
おかしい。

それを面白そうに眺めていた崎矢さんが口を開く。

「言つたらう?」 “少佐は提督候補生であり、ノルマをクリアすれば
直ちに中佐へ昇進する” って」

「いやいや、聞いてましたけど俺はまだ着任2週間ですよ!」 ほとん
ど何もしていませんし……」

あわてる俺に崎矢さんは1束の書面を突きつけた。 図表計算ソフ
トで作られた名簿のようだ。

「ほらよ、過去に新設鎮守府に提督候補生として着任した奴らの名簿
だ」

「提督候補生の!?! しかし……」

ずらつと並んだ名簿にはざつと見400人以上の名前が載ってい
た。崎谷さんが俺が驚く様子を楽しそうに眺めて付け加えた。

「最後の項目を見てみる」

「最後……」

氏名、部隊名、年齢など沢山並ぶ項目の最後。そこに書かれていた
のは……

「何ですか……これ……!?!」

「見たまま、 “在任期間” だ」

一番上に “在任期間(日)” と書かれ、赤丸がされている欄。しか
し、そこに並ぶ数字は “4” や “8” など、1桁ばかり。それにカツ
コ書きで書かれた “日” の文字。これは……

「要するに、10日以上耐えられた奴はほとんどいないって事だ。だ
から、既に2週間以上深海棲艦の圧力に耐え切ったお前はノルマをク
リアしている。……お前、 “提督適正度” って知ってるか?」

「……いいえ」

「し、知ってますー!」

じっと聞き入っていた美代が声を上げる。

「確か、着任した提督の緊張への強さや危機対処能力を測定する装置があり、最高点を100として評価した数値があると……」

「よく知ってるな。確か君は美代君だね、話は聞いているよ。その通り、測定装置がある。それがこれだ」

恐縮した美代の肩を叩いて笑ったあと、崎矢さんが持っていた鞆から引つ張り出したのは一昔に流行ったバーチャルゲーム機のような、ゴーグル型の測定器。

「適正值が高いと、つまりどういう事なんでしょう?」

「適正值が高いほどより継戦能力、つまり、深海棲艦と戦い続ける能力が高い。ちなみに、適正值10以下が一般人並みで、深海棲艦への恐怖で遭遇前から逃げ出すレベル。30以下が、恐怖に震えながらではあるが、一応深海棲艦と戦闘行為が行えるレベル。60以上でやると、無理なく深海棲艦と渡り合えるレベル。今日本で戦っている提督は皆適正值65以上だったな。まあ付けてみるよ、測定は5秒で終わるから」

「はあ……」

ゴーグルをはめる。視界は真っ暗だ。

「それじゃ、測定始めるわね」

飛龍さんの合図とウィーンというファンを回したような音で、視界が一気に開けた。かと思うと、すごい勢いで様々な映像が頭の中に流れ込んでくる。

それは、見たことのあるもの、ないもの様々で、いつの時代なのかもわからない。ただ呆気にとられてそれらの映像を眺めていると、ぱつと目の前が暗くなった。本当に5秒で済んだようだ。

「お疲れさん。測定終了だ」

「……本当に今ので適正なんてわかるんですか?」

「呉の工兵うちが作ったやつだ。信頼している。お前……つまり今回から提督採用試験に取り入れられる事が決まった」

「そりやすごい……で、結果はどうなんでしよう」

飛龍さんに問いかける。

「結果は呉鎮守府にある親機に送られて、数値化されてから本土とここに送られるの。明日には届くから楽しみにしておいてね！」

「ああ、そうだ。美代君、君や他の職員の方にもあとでやってもらおうよ。データの母数を増やしたいんだ」

「わかりました。後で事務と軍医の2人には伝えさせていただきます」

すると、ゴソゴソと鞆を漁っていた飛龍さんが二つのものを取り出した。

「はい、これ。階級章と建造ドックの解放キーよ。今日から建造も許可されるから、じゃんじゃん建造して、戦力を蓄えてね！」

「ありがとうございます！」

建造が許可された！これでさらなる戦力増強が出来る。これは嬉しい！

「あの……」

その時、電が控えめに言った。

「護衛の艦娘さん達は何処へ行ったのでしょうか？ 飛龍さんしか姿が見えないのですか……」

「ああ、彼女達ならこの工廠で艤装のメンテをしてもらっているわ。そろそろこつちに来ると思うけど……」

「丁度良かった。今回はお前に中佐の辞令を渡しに来るのが本来の目的じゃない」

「へっ？ まだ何か？」

その時、工廠の方から何処かで聞いたことのある声が聞こえてきた。

「提督〜！ メンテ終わったよ！」

「おう、お疲れ様、鈴谷。さ、紹介しようか」

鈴谷と呼ばれた少女……いや、もう同じ年くらいの若い女性が、幼い少女を4人連れてこちらへやって来た。

それを見て、崎矢さんと飛龍さん以外の全員が息を呑む。鈴谷が連

れてきた四人の少女は……

「紹介しようか。呉鎮守府所属。『航空巡洋艦鈴谷』及び……」

そして彼は、重苦しい声で確かにこう言った。

「『第六駆逐隊』の皆だ」

1列に並んだ、自身の背後に控える4人とそっくりな少女達。4人よりさらに幼いが、着ている制服もほとんど同じ、まさに瓜二つだ。

「暁よ！ 1人前のレディーとして扱ってよね！」

「響だよ。その活躍振りから、不死鳥の通り名もあるよ」

「雷よ。『かみなり』じゃないわ！ そのこの所もよろしく頼むわね！」

「電です。どうか、よろしくお願いします」

* * *

——柱島泊地鎮守府中央棟3階応接室

「さて、何から話せばいいかな」

崎矢さんが応接室の奥で遊ぶ『呉所属』第六駆逐隊を見やって、珍しく神妙に呟く。

「俺はこういう話は苦手だ。お前から頼むよ」

「また……嫌なことはすぐ人に押し付ける」

ため息をつく飛龍さん。しかし、澁々と話し始めた。

「山村君。中佐になって建造許可が降りたあなたには、知ってもらわなくてはならない事があるの。もちろん、艦娘であるあなた達にとっても重要なことよ」

「……何となく、覚悟は出来てますよ」

「その様子だと、もう大体わかっているみたいね」

出された緑茶を一息に飲み干した飛龍さんは語り出した。

「単刀直入に言うわ。あなた達……いや、私達艦娘は、妖精さんと人間によって作り上げられた存在なの。……これは私達艦娘は感覚で理解している。だからあなた達は驚かないでしょうね」

俺の背後に控える艦娘達が頷く。その顔は……淋しそうだった。

彼女達は知っていた。己が造られた存在であることを。人類の希望を背負って、戦う使命を負って生み出されたことを。

だが、だから何だと言うのだ。彼女達は艦娘だから、戦う使命を帯びているのは確かな事実。だが、それは彼女達に普通の女性として生きることさえも縛る力はないはずだ。だから、そんな顔をしないでくれよ……

そんな俺の思いをよそに、飛龍さんの話は続く。

「艦娘が建造ドックで生まれることは知っているわよね？ それには四大資材……燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトとさらに『開発資材』という資材が必要なことも」

「ええ」

「じゃあこれは知ってる？ 実は四大資材は艦装を作ることにはしか使われていないってこと」

それに俺が応じるより先に、木曾が返答を返した。

「……つまり、俺達のこの身体はそのような物では出来ていないんだな？」

「ええ、そうよ。それはドロップ艦も変わらない」

ふうーつと木曾が息を吐き出す。普段弱みを見せない彼女だが、彼女なりに、自分の生い立ちに不安を抱えていたのだろう。特に彼女はドロップ艦だ。正規の、資材を用いた建造によって生まれた艦娘ではない。己の存在について悩むこともあっただろう。

飛龍さんが続ける。

「艦装は四大資材から作られる。それはいいわね。じゃあ、私達の身体は、一体何で出来てるのかしら」

……彼女達の身体は人と全く同じだ。体の作りはもちろんのこと、体温も全く同じ。結構スキンシップの激しい子達故に何度もその肌に触れたが、彼女達の肌は間違いなく人間のそれだった。

着任祝いパーティーで皆酔いつぶれたことや、数日前、暑いからとアイスを食べすぎた暁がお腹を壊したりしたこと、身体の中身も人と同じだとわかる。

艦装を下ろした彼女達は、普通の人間なのだ。それは実感による裏

付けもなされた絶対的な認識……

つまり、彼女達の身体は人間と同じ成分…タンパクと水分、脂肪、その他カルシウム、ナトリウムなどの金属類やイオン等で出来ているはず……

そこまで考えを勧めたところで、一瞬背筋に冷たいものが走った。響の建造を見届け、仲間として迎え入れた時に見た建造ドックは、艦娘1人がギリギリ入れる大ききさしかなかった。そして、そこへ投入されるのは、四大資材と開発資材しかない。だが、四大資材は艦娘達の身体の生成には関わっていない。ということとは……

「まさか、開発資材の中身が……？」

「正解」

飛龍さんが悲しそうに俯く。

「建造用の開発資材の中身はあなたの予想通り。人間一人分の身体の構成物質なの」

建造用の開発資材……大きな立方体型の、妖精さんにしか開けられないようにロックされた箱。働かなくなってきた頭をぶんぶんとする。

「でもね、それさえも私たちにとっては大きな問題じゃないの」

「……と言いますと？」

ここで、ずっと黙っていた崎矢さんが突然口を開いた。

「……ここで質問だが、現在世界で発見された艦娘は何人だ？」

「……200人強ではありませんでしたか？」

崎矢さんは頷く。これは世間でもそれなりに知られている事実。

「じゃあ、今日日本で戦っている艦娘は何人だ？」

「……」

分かりきったことを彼が聞くはずはない。そういえば彼の鎮守府には艦娘が100人以上いると聞いた。だが、そうなると彼の鎮守府だけに全艦娘の半数が所属しているだなんておかしい。

「ずばり言うと、789人だ」

崎矢さんが吐き捨てるように言う。

ここまできて、ほとんど確信が持てた。

発見された艦娘の数よりも、戦っている艦娘の数の方がはるかに多い。これが意味すること。それは……

「今ここにいる2組の第六駆逐隊。彼女達は、いえ、あなた達はね……互いに全く同じ遺伝子を持つているの」

思わず振り返った。彼女達は泣いていなかった。今伝えられたことのどれも何となく理解していたことなのだろう。その表情は、どれも悲しくて、淋しくて、切ない。

だが、彼女が言うことが正しいのなら……

「でも、それじゃあ艦娘は……」

言葉にしたくない。それは彼女達のアイデンティティを否定すること。でも、口に出して言ってみるでもしなくては、俺自身受け入れることが出来そうにない。

「彼女達は……いえ、艦娘達は……合法化した遺伝子複製体だと言うのですか……？」

目をそらす飛龍さん。それは明らかに、無言の肯定。確かにそれなら、発見された艦娘の数以上の人数が、日本で戦っていることも説明できる。

目の前が真っ暗になったようだ。今、彼女達はどんな気持ちでこれを聞いているのだろうか？

己の存在は、いくらでも替えのきく複製体で。今ある自分の意思さえ、誰かに持たされたもので。その意思で動かしているはずの自身の身体も、人工的に合成された木偶人形。どれ一つ、自分のモノだと胸を張って言えるモノがない。

突然無慈悲に告げられたそれら。聞いてるこちらでさえ気がおかしくなりそうだと言うのに、当の本人達はどれほど辛い気持ちなのだろう？

だが、彼女達は笑っていた。

……さつきよりもずっと、ずっと淋しそうな笑顔。不思議と安らかなが、見ていられないくらいに痛々しい笑顔。

「何となくわかっていたよ」

響がぽつりと呟く。

「実はね、見てたんだよ。建造された時、私の身体が形作られていくのを」

「私達も」

「なのです」

「お前達……」

……皆、知っていたのか？ それで、あんなに明るく振る舞えるのか？ それは、どれほど辛いことなんだ？ それに耐えて戦う艦娘が、今どれくらいいるんだ？

「夢だと思っていたけど、今こうして言われると、確かに覚えている」
「……そうね。私も、それを見ている」

飛龍さんが答える。

「艦娘に意識が生まれるのは、妖精さんによって身体が造られている時。でも、その時はまだ知識の刷り込みがなされていないから、何が起こっているのか見えていても理解できない。だから、響ちゃんと言ったみたいに夢のような形で艦娘の記憶に残る」

そこで、彼女は苦しそうな表情をふっと崩した。

「でもね、これだけは信じて。艦娘は艦の意思が肉体を持ったものである」
「という認識はあくまで正しいということ」

「……!?!」

それだと論理矛盾が起こるのではないか？

艦娘が合法化したクローンである事、それは今彼女から聞いた。だが、それが正しいとするならば、彼女達は人間によって造られた存在であり、これまでの通説だった。艦娘は艦の意思が肉体を持ったもの。という仮説は崩れる。不審げな俺を見て、飛龍さんは笑った。

「人間は材料を用意しているだけよ。製造過程には関わっていない。実際に製造に当たっているのは工廠の妖精さんだけ」

「しかし、それなら……」

しかし、彼女は俺の問いかけを制し、話を続けた。

「妖精さんに聞いたの、あなた達は何故、艦娘を…クローンを建造し続けるの…って」

「……」

「彼らは答えたわ。『ただ、艦の意思に従うだけだ。艦娘は自ら、生まれることを望んでいる』ってね。つまり、私達が今ここに生きている。それは、確かに私達に受け継がれた意思……かつての艦が生きたいと願ったから。艦の意思が、妖精さんを介して肉体に憑依したということなの。人間は、その意思が宿る肉体を用意しただけ」

なんて無茶苦茶な理屈、いや、もはや理屈とさえ呼べやしない。しかし、その妖精さん達の言が信用に値するのか、だなんて不毛な質問は出来なかった。

妖精さんは艦娘の生みの親。彼らの言葉を信じないというのは、専門家の意見を聞こうとしない素人と同じこと。どうにも信じ難い、通説よりもずっとオカルトじみい話。でも、艦娘と提督にとつて、これは曲げられない真理。いや、真理だと思われるモノ。

「彼女達……呉の第六駆逐隊を見ればわかると思うけど、同じ艦の意思を継いだ艦娘は全く同じ遺伝子情報を元に作られた身体を持っている」

「はい」

「だけど、私達が絶対に譲れないのは、たとえば同じ名、同じ艦装、同じ遺伝子を持って生まれた艦娘でも、互いに全くの他人であるってこと」

ずっと不安げにしていた第六駆逐隊が強く同意の意思を示す。木曾はただ黙って腕を組んだまま。

そうだ、そうだろう。全く同じ遺伝子を持つと言われてる一卵性双生児でも、その後の成長でかなりの違いが生まれる。まして、双子と違って全く違う地で生まれる彼女達だ。たとえば母体となる遺伝子が同じでも、その後の成長、経験による個性の差は大きく出るはずだ。

言われてみれば、崎矢さんが連れてきた第六駆逐隊は、柱島の第六駆逐隊と全然違う。

「私達はね、たとえ同じ艦娘が何人いようと1人の人間として自分を見て欲しいの」

そういった飛龍さんの表情は、普段見せるおおらかな笑顔とは似て

も似つかない真剣な表情。

「私達は量産された兵器なんかじゃない。いくらでも代わりのいる兵士なんかじゃない。少なくとも私達は、1人の人間としてこの世に生まれたかった。たった1人の艦娘『航空母艦飛龍』として、戦いたかった」

「飛龍さん……」

「だからね。あなたには、『個人としての艦娘』達と共に戦ってほしいの。もし、それが出来ないのならば、今ここで正式に提督になることを拒否して。実際に前例もある」

妥協を許さない様子飛龍さん。その隣に座る崎矢さんは先程から身動き一つとらない。彼は、これらの全てを知った上で、彼女達の全てを受け入れた。そして、それを後輩である俺にも求めている。

……いや、彼だけではない。今日日本で最前線を戦っている提督たちは皆、これを知っている。提督という人たちは、こんな過酷な現実を知った上で、あくまでも彼女達艦娘と共に戦うことを選んだ者達なのだ。改めて、先達提督たちの人間的な大きさを感じた。

そして俺も、今その提督達の端くれとなったのだ。それならば……
「俺は……戦います」

複雑な理屈なんて必要ない。だって、彼女達は俺を、俺個人を信頼してくれているから。だから、彼女達と同じ姿の艦娘がいくらいようと関係ない。

木曾、暁、響、雷、電、明石、大淀。

柱島所属の7人の艦娘達は、短い付き合いながらも苦楽を共にしてきた、まさに同じ釜の飯を食った戦友だ。

「俺は、彼女達と、柱島の皆と一緒に戦います」

飛龍さんが大きく溜息をつき、崎矢さんは深く頷いた。

「その言葉が聞きたかった。今日やって来た甲斐があつたよ」

そうだ。もう決心した。俺達はこれまで怯えてきた問題に正面から向き合って、そして乗り越えることを選んだ。

「彼女達は俺個人を信頼してくれています。だから、俺も『艦娘』としてではなく、柱島で戦友になった『友人』として彼女達を信頼しま

す」

それが、今出せる最適解。

* * *

——柱島泊地鎮守府中央棟3階応接室

僕は柱島泊地鎮守府所属、憲兵の美代少尉です。今、鎮守府は凄いいことになっていきます。

「もうダメ……俺が悪かった……」

「何変な声出してるんですか、まだまだ飲みますよ」

「だらしないね、司令官を見習いなよ。そんなので呉の提督なんて勤まるのかい？」

「本当だよ。もつと言つてやつて」

「許してくれえ……」

えーっと、今の状況を簡潔に説明すると、山村提督の中佐の辞令の受け渡しと共に、電ちゃん達艦娘の秘密を伝えに来た崎矢少将。彼は留守をとある戦艦娘に任せ、今日はここで一泊して帰るということで急に宴会を開くことになり、柱島の酒豪である山村提督と響ちゃんの2人と、同じくアルコール耐性抜群の呉所属の響ちゃんの3人が上官を酔いつぶしている……というわけです。

日本海軍No. 2ともあろう方をベロベロに酔わせる彼らは一体何なのだろう。上官っていう概念をよく分かってないのではないかな。彼らが飲み始めた時から見ていたが、崎矢提督も決して酒に弱い訳では無い。ただ、彼の部下である3人が強すぎるだけだ。

木曾さんは飛龍さん、明石さん、大淀さん、佐々木さん、回診から帰った坂下さんの6人で盛り上がったかと思えば、皆思い思いにどこかへ行ってしまう行方不明。ちなみに、航空巡洋艦の鈴谷さんはこの付近の水質調査団の護衛ついでに柱島に寄っただけらしく、宴会に参加せずに再出撃してしまった。

仕方なく未成年の僕は、残った柱島、呉両鎮守府の第六駆逐隊の子達6人と一緒に部屋の端っこでジュースと（柱島の子達はいくらかお

酒も飲んでいますが)お菓子を食べ散らかしている訳なんですけど……

「あら、呉では制服に入ってるラインが赤色なの？」
「これは『暁改二』の制服よ！　あなたも練度が上がればこれを着れるようになるわー！」

「はわわ……みんな背が高いのです！」

「私達の方が少し成長した状態で建造されたみたいなのです。呉の電も、すっかり牛乳を飲めば伸びるのです」

「えつと……美代君、困ったら私達に頼っていいのよ？」

「頼っていいのよー！」

なんだか3組の姉妹を見ているようです。

……僕は提督に同席して、飛龍さんのお話、艦娘のルーツについて知りました。

ですが、不思議とすんなり受け入れてしまったのです。『他人事だから淡泊に受け止められるのだ』、と非難されれば甘んじて受けませんが、本当に僕にとってそれは何も関係がないことなんです。

やや酔って、僕の腕に絡みついて離れない柱島の電ちゃん。それを「やれやれ、なのです」と苦笑して眺める呉の電ちゃん。パツと見同じ容姿だけど、確かに違う人格を持っている。そんな彼女達を蔑ろにするようでは駄目だと思っんです。柱島の皆はなかなか大人びていて同僚として仲良くしてくれるし、呉の皆もまるで妹みたいで可愛い。

……ふと我に返ると2人の暁ちゃん、雷ちゃんと、呉の電ちゃんがニヤニヤしながらこちらを見えています。

「えーつと……どうしたの？」

悪い表情のつもりだろう、可愛い顔で答えたのは雷ちゃんペア。

「いや、電を起こしちゃったら悪いかなくて」

「えっ？」

右を見やると、柱島の電ちゃんが僕の腕に絡みついたまま眠っているのが見えました。どうか近い！　顔が近い！

ほぼゼロ距離でその……美少女の顔なんて見せられてしまうとちよつと……いや待て待て！　僕にロリコン志向はないはずだ、落ち着け、こういう時は……

「あの、電ちゃんをソファに寝かせたいんだけど……」

「あら、そのままでもいいじゃない」

「ごゆつくりどうぞ」

「そ、そんなー」

笑って提督達の方に走っていく5人。2人残された僕達。いくら宴会とはいえ10代前半（と思われる）少女とベツタリ張り付いたままと言うのはマズイ。憲兵という職業上ますますマズイ。

「えへへ……電のホンキを見るのです……」

でも、これはこれで悪くないな、なんて電ちゃんの寝言を聞きながら思ったり。僕は駄目な憲兵です。

* * *

——母港

「すまないな、突然連れ出して」

「ンン、夜風に吹かれるのは嫌いじゃない」

「……お前は飛龍の話聞いていなかっただろう。隠すのは良くない。話しておこうと思う」

「ふーん……秘密つてのは隠しておいてこそ、カミングアウトした時にありがたみが出るんだがねエ」

「……それは冗談か？」

「半分本気」

「ふん……」

俺……木曾は今日の会議に業務で不在だった軍医の坂下を連れて母港へ出ていた。

「クローンなんだってよ。俺たち」

さり気なく、ただはつきりと伝えるべきことを伝えた。最低限必要な言葉しか口にしていないが、軍歴の長い彼なら十分伝わるだろう。

「そうか」

「……驚かないのか？」

「知ってたよ」

「……」

そうか。知っていたか。

膝から力が抜ける。が、倒れはしなかった。隣から優しく支える手が伸びてきたから。

「よっ。さつき雨降ったから、地面はドロドロだぞ」

「……」

この男は、俺達のルーツを知っている。それなのに……

「……気持ち悪くは無いか？」

「何がさ」

「俺達は人じゃないんだ。何人も、何人も同じ存在がいる」

それを、この男はただニヤニヤと見つめるだけ。

「ふーん、木曾ちゃんはそう言うけどね」

この俺をちゃん付けて完全に子供扱いだ。

「俺は軍歴が長い。素行が悪いせいで何度も何度も飛ばされた。もちろん行く先ざきで艦娘達にあった」

「……」

「そこにはキミと同じ艦の意思を継いだ艦娘……つまり木曾ちゃんもいたね。だけど、間違いなくキミとは別人だった」

「……」

「外見だけで人を見定めちゃいけないって習わなかったかい？」

「……いや」

「んじやア今教えておこう。人はちゃんと付き合って、もつと奥を見てやらなきや駄目だ」

……ああ、この男もか。

提督といい、憲兵といい、軍医といい、俺達をなんのしがらみもなく受け入れてくれる。憎たらしいはずのいつものニヤニヤした笑顔が、優しく微笑んで見えたのは気のせいだろうか。

「ちなみに、悠ちゃん……佐々木軍属もその事は知っている。ま、提督も憲兵も態度が定まったみたいだし、キミ達はこれまで通りでいいよ」

「……ありがとう」

彼らしくない、包むような優しい言葉に思わず礼の言葉が出た。だが、それに応じた彼の顔は既に冗談で満ちていた。

「おっ、これまでで一番可愛い顔したねエ」

「なっ！ ばっ馬鹿！」

「くはははは」

思わず平手打ちを食らわそうとした俺の左手を軽くバックステツプでかわす。

「おいおい、俺は提督や憲兵じゃねエんだ。本気で殴りかかってくるのはやめてくれよな」

「今かわしたじゃないか！ 絶対格闘戦得意だろ！」

「まぐれだよまぐれ。これは冗談じゃねエ。それに、仮に俺がそこそこ戦えたとしても、提督か憲兵位のレベルじゃなきや艦娘達の身体能力を上回ることは出来ねエさ」

言われてみれば、跳びずさった彼の足はややふらついていた。

「ったく……もしかしてこいつは俺たちを受け入れないのではないか、だなんて一瞬でも思った俺が恥ずかしい」

「おっ、褒め言葉かい？ 嬉しいねエ」

「褒めてねえ！」

本当に、この鎮守府には不思議な奴が多い。

* * *

——翌日、柱島泊地母港

「おはようございます、飛龍さん」

「あら、美代君じゃない。美代君も散歩？」

「ええ、まあそんなところですよ……あの、昨日の測定結果はもう届いたのでしょうか？」

改めて彼を眺める。背は成仁程ではないがかなり高い。パツと見れば185位はありそうだ。身長でいえば山村君もそれなりにあるはずだが、どちらかと言うと細身な山村君と違って均整のとれた筋肉質とも言うべき肉体が、実際よりも彼を大きく見せている。

「そうね……そろそろ届いてる頃だと思うけど、管理権限は私じゃないから成仁にあるの。今から行きましようか？」

「そうですね。是非お願いします」

「ぱあっ、なんて効果音を付けたいくらいに眩しい笑顔。結構楽しみにしているらしい。」

「ところで、飛龍さんも適正値を測ったことはあるのですか？」

「ええ、もちろん。呉の整備兵達がやれやれってうるさくてね」

「それで、適正値は？」

「軽く100を突破して『測定不能』だったわ」

「そ、測定不能!? それでは飛龍さんは今すぐ提督になる事も出来ると言うことですか？」

「一応ね。私は提督になるつもりはないけれど、実際今の提督に元艦娘もいるわ。でも、そんなに驚くことじゃないのよ」

「それはまた何故？」

「艦娘達は全員、人間とは比べ物にならないくらい適正値が高いの。実際に戦闘行為をするんだから当然といえば当然だけどね」

「そうなのですか……あつ、もう着きますね」

柱島鎮守府の3階、応接室の戸を押す。

「あ、飛龍さん。おかえりなさい」

「あら、早かったわね……って、美代君が連れてきたの？」

「ええ、まあ」

迎えてくれたのはまだ寝間着姿の山村君と軍属の佐々木さん。

「艦娘の皆はどうしたんですか？」

「ああ、ちょうど今皆でメシに行つたところだよ。すれ違つたんじやないかな？ 飛龍さん、見てません？」

「いや、私は見てないけど……」

今ここにいない艦娘達……柱島鎮守府所属の木曾、明石、大淀、第六駆逐隊。さらに、私が連れてきた呉の第六駆逐隊。彼女達は現在食堂のようだ。確か、今日のメニューはアサリの味噌汁と目玉焼きの朝食だった、美味しかったなあ。

そこでふと、1人の所在が分からないことに気づいた。

「あれ、成仁は？」

そう、あの人の姿が見えない。私が部屋を出た時には居たはずなのに……

「ああ、崎矢先輩なら」

クククツといつもの独特な笑い方で応じたのは山村君。

「さつき二日酔いで真っ青な顔して出ていききたしたよ。今頃トイレか給湯室の流しでしょうかね」

「全くもう……」

あの人は決して酒に弱い訳では無い。ただ、山村君と飲むと、部下に負けじと張り合っていていつも酔い潰される。いい加減自分の酒量をわきまえて欲しいのだが、未だにやめる気配はない。

まあ、`どこへ`行ったかは分からないけど、`何を`しに行っただかが分かったので一安心。探せばすぐ見つかるし、最悪帰ってこなければ彩雲を飛ばそう。

そう思った時、執務室の戸がやけにゆっくりと開いた。

「ああああああああ……気持ち悪い」

のっそりと執務室に入ってきたのは、山村君が言った通り真っ青な顔をした成仁。すかさず山村君が彼をからかった。

「お帰りなさい。気分はどうです？」

「最悪だ」

「それは良かった」

「お前、一応俺の部下だよな？ な？」

山村君はすまし顔で紅茶をすすっている。

「そろそろ俺達の提督適正值の測定結果が出た頃じゃないんですか？ 早く教えてくださいよ」

「上官使いの粗いやつだ……まあ心配しなくともお前の適正值は高いよ。それは測定前から知っている。既に充分艦隊戦で戦果を挙げたからな……つと」

ふらふらとよろめきながら、タブレットを拾い上げる成仁。

「んーと……これだこれだ。さて、適正值は………えっ」

「[[[~]]」

飛龍さんに連れられてやって来た執務室。崎矢提督に昨日測った提督適正値を聞いたのですが、「えっ」の一言を最後に、一言も発さない提督。一体何が……

「あのー……何か不具合でも?」

まるでそれまで大理石製の石像のように固まっていた崎矢提督がゆっくりと振り返る。その顔からは、さつきまでの青ざめた表情は吹き飛んでいった。

「信じられん……全員65オーバー、しかも美代君は87だと……!?」
さつきまでの二日酔いはどこへやら、厳しい表情で崎矢さんが尋ねてきた。

「君、海軍へ転属する気はないかい?」

「えっ」

「海軍としては、君くらいの適正なら少佐まで特進させてでも提督をやらせたいのだが……」

「ええええええええええええ!」

僕が!? 少佐!? 海軍!?

いやいやいやいや、落ち着け僕!

う……うろたえるんじゃないッ! 日本軍人はうろたえないッ!
僕は陸軍にちゃんと目的を持って入ったんだ。それを成し遂げずして海軍に転属なんて有り得ない!

「その……本当に申し訳ないですけど、僕は憲兵という職から離れるつもりはありません」

「そうか。では、あなた方は?」

「私達も」

「遠慮させて貰おうかな」

2人ともはつきりと答えた。

「俺たちは戦闘指揮なんて出来ねエ。いくら素質があってもそれじゃ提督は勤まらんだろう。それに、俺らは今の職を気に入ってるしな」
「そうか……」

彼の表情は明らかに「もったいない」と言っていた。確かに、持つ

て生まれた素質を捨てることになるかもしれない。でも、これは絶対に譲れない事情があるのだから仕方がない。

「崎矢さん、俺の適正值は？」

「えっ、あ、ああ、忘れてた。お前の適正值は96だ」

えっ？ 96？ それって僕達よりもずっと高い。しかし、崎矢提督、飛龍さんは特に表情を変えない。

「僕より山村提督の方が適正值が高かったのに、何故僕達の方にそんなに驚かれるんですか？」

僕達の結果には声も出ないほど驚いているのに、それよりも高い山村提督の適正值に驚かないのは不自然だ。もっと驚くなり、喜ぶなりしてもおかしくないのに。それに対して山村提督をつつきながら答えたのは崎矢提督。

「こいつが高適正者だってことは最初から分かっていたんだ」

「それは何故？」

「高適正者は大抵、過去に深海棲艦に対する恐怖を上回る恐ろしい体験をしている。だから、1度撃沈されるといふ艦時代の最も恐ろしい記憶を持つ艦娘達は適正值が軽く100を超えるんだ。そしてこいつも……」

「崎矢さん。その話は」

「うむ……」

山村提督は先程のおちやらけた雰囲気や嘘のような程真剣な面持ちで崎矢提督が言おうとしたことを遮った。きつと、彼は口にするのも嫌なくらい恐ろしい体験をしたのだろう。そして、崎矢提督自身も。

僕にそんな体験があるとすれば……あれしかない。

「確かに、僕にもそのような体験はあると思います」

「やはりそうか……」

「話した方がいいですか？ サンプルデータとして」

「え、ああいや、必要ないよ」

慌てて崎矢提督は答えた。いい人なんだな。やっぱり、山村提督が慕うだけはある。

「でもまあ、職員全員が高適正者つてのも悪くないな。呉^{うち}なんかはよく攻撃されるから、何度も内地に職員を返すのが申しわけないんだ。その点、この鎮守府は有利とも言える」

納得したように、坂下さんが唸る。

「なるほど、俺達はこの鎮守府が攻撃されていてもいつも通りに動けるって訳だ」

「良かったわ。ここは離島だからいちいち内地に戻るのが面倒なのよねえ」

そう、僕達の強みは今ここにいる職員全員で深海棲艦に対抗できるという事。確かに崎矢提督は素晴らしい提督だ。だけど、彼はいざ深海棲艦の襲撃に会えば、人間からの助けは何一つ得られない。もちろん艦娘達はあるが、彼女達は戦闘要員だ。

それに比べて、ここ柱島は僕達も山村提督を手伝うことが出来る。例えそれがどれだけ些細な力であろうとも、あの提督なら何倍にも増幅して吐き出してくれるだろう。それが、この鎮守府だけの強み。

僕は海軍に転属するつもりは無いし、今後もこの気持ちは変わらないと思う。でも、〃この鎮守府を守りたい〃という思いは何処の所属だろうと変わらない。だから、

「ここは本当に素敵な鎮守府ですね」

心からそう思った。

* * *

——午前10時……ヒトマルマルマル、柱島鎮守府母港

「それじゃ、俺達は帰るよ。達者でな」

「ええ、わざわざありがとうございます」

「山村君、〃建造は計画的に〃ねっ！ あんまりやりすぎるとあつとついう間に資材が消えるわよ！」

「わかってますよ。気を付けます」

私達は崎矢提督一行を見送りに母港へ出ていた。

「柱島の皆も頑張つて欲しいのです！」

「でも、危なくなったら呉の艦隊に頼ってもいいのよ！」

「本当に危険になったら私たちに任せてくれ。私達は……信頼してくれている」

「だって暁達は一人前のレディーですよ！」

呉の第六駆逐隊達も彼女達の母港へと帰る。既に練度90を超えているという彼女達だ、自分達より幼いからと言って甘く見ていてはならない。もし私達だけで鎮守府が守れなくなったら、彼女達の力を借りることになるのだから。私達よりさらに小さい胸を張る姿はこの上なく頼もしかった。

「よし、そろそろ行くぞ、お前ら」

「二はーい」

沖には昨日同伴で来ていた航空巡洋艦の鈴谷さんもいた。ここからだと顔は流石によく見えないが、手を大きく振っているのが見える。崎矢提督の乗ったディーゼル船のエンジンがかかった。それに続いて、飛龍さん、第六駆逐隊が海へと滑り出す。今回は母港からの出撃。というか、出航。

本来、任務などで出撃する時、艦娘は地下にある出撃施設から射出装置カタパルトによって高速で射出される。その滑走途中に自動で艤装の装着まで行ってくれるのでとても便利だ。

私達駆逐艦は関係ないけれど、航空母艦は艦載機発進のためにある程度母艦となる艦娘の航行速度が必要らしく、出撃した瞬間から既に加速しきっているカタパルト出撃はすぐに艦載機の発進が出来る良いのだとか。さらに言えば、低速の艦娘になると加速に時間がかかるため、出撃直後の隙が小さくなる。

そんないいことづくめのカタパルトだけれど、今回は周囲に敵は全く探知されず、さらに敵を殲滅することが目的ではないため、普通に母港から海へと降りる形での出撃となったという訳。

「またな！ 気が向いたら顔出すよ！」

「今度会うときは演習よ！ 友永隊の練度、見せてあげるんだから！」

崎矢提督と飛龍さんが朗らかに笑うと、彼らの艦隊は速度を上げ、大きな白波を立てて走り出した。

「こっちは任せてください！ お元気で！」

司令官が帽子を振って叫び返す。もう聞こえていないだろうけど、その様子から何を言っているのかは伝わったらしい。崎矢提督はニヤツと笑うと、船室へと姿を消した。

* * *

「私達の誕生日を決めたい」ですって!？」

「うん、ダメかな？」

——ヒトマルイチニー：午前10時12分、柱島泊地応接室

崎矢提督を送り出して戻ってきた、まだ片付けの済んでいない応接室。司令官が大事な話があると言うので、鎮守府一同が集まっていた。

で、彼が一同を見回して発した言葉が「艦娘達の誕生日を決めたい」だったという訳。

「決めるって……何のために？ 年齢付きで名簿でも作るの？」

私を含め、艦娘たちはキョトンと突っ立っているだけ。後ろの人間3人は微笑んでこちらを見ている。一体何なのだと言うのだろうか。それに済まして応じる司令官の答えはあきれたもので。

「だって、誕生日がなかったら祝えないじゃん」

……祝えない？

私達は艦娘だ。一部の人々の努力によって人権獲得にまで漕ぎ着けたが、それでも偏見のカーテンは未だに厚く、私達と人間達を遮っている。

私達は誕生日がわからない。したがって、普通の人間たちのように誕生日を喜ぶことも、嘆くことも叶わない。しかし、それを何故、彼が祝う必要がある？

私達はほとんど人間と変わらない存在だ。艦装との同期がなければただの一般人と変わらない。しかし、艦装を装備できるといふ圧倒的な力を持っている。

そして、力を持つものは恐れられる。今でこそ、艦娘と人間の、い

わゆる「普通の交流」が実現しているが、一昔前までは私達を人間兵器と見なす人も多かったと言う。私達はそれを知っている。それに、私達は己が何らかの遺伝子のコピー体である事も理解している。だから、別に人間達が私達たちの誕生日を認めなくても、気にも止めなかった。

……それを、本人達さえ諦めて考えるのをやめてしまったものを、彼は祝いたいと言うのだ。

「お前達は人間なんだろう？ それとも、深海棲艦の殺戮のために作られた兵器だと自分から認めるのかい？」

この2週間で見慣れた、おちやらけた笑顔。でも、その笑いはいつもの無邪気なものではなく、その中に否定を許さない硬さを持った笑顔だった。

「違うわ。私達は……」

「間違いない、人間だ。深海棲艦と戦う使命を帯びただけの、ただの人間だ」

木曾さんが尻すぼみになってしまった私の語を継ぐ。その目はしっかりと、司令官の目を見据えている。司令官は大きく頷いて、まるで遠くを眺めるように目を細めてこちらを覗いた。

「子供の頃から思ってたんだ。艦娘は身体を張って俺たちを守ってくれている、それなのに「人間」はその圧倒的な力を恐れて艦娘を人だと認めずに迫害する。そんなのおかしいって、ずっと思ってたんだ」

「……」
「今でこそ、人権も認められて、戸籍も作れるようになって、結婚だって出来るようになった。けれども、まだ差別は無くなりきっていない。その代表が……」

「誕生日……という訳なのね」

司令官は大きく頷いた。

「艦娘の迫害は、ある意味白豪主義アバルトヘイトと似た構造だと思うんだ。自分と異なる存在を恐れ、恐れ故に一方的に迫害する。だから、艦娘を蔑ろにすることは、悪しき歴史の再現になる、そう思うんだ」

ああ、やつぱり彼は……

「それなら司令官は……私達を、人間として扱ってくれるの？」
それはずっと、聞けなかった問い。

彼とは秘書艦任務の時などに色々な話をした。彼は優しく、面白くて、ちよつと不真面目な所はあるけれど、誠実に私たちに接してくれた。だからこそ、今までそれに甘んじていたのだけれどいざ彼の旗色を問うとなると怖くて言えなかった。

彼は艦娘たちに優しい。それはここにいる艦娘なら皆肌で感じていること。でも、もしかしたら。

もしかしたら彼は“兵器”として私たちを大切にしていたのではないのか。あくまで“軍の機密”として接していたのではないのか。そう思うと、彼に会うのが怖くなった。

でも、彼は今真剣な、やや怒ったような表情ではつきりところ言ってくれた。

「当たり前だ、馬鹿。そうじゃないでも思っていたのか」

……最初から、最初にあつた時から、いやそれ以前から、彼は艦娘を人として、一個人として見てくれていた。それだけでも泣きそうなくらいうれしいことなのに、そう思ってくれていたのは司令官だけじゃなかった。

どかつと私たちの隣に座り込んだ3人の“人間達”。

「ちなみに、俺達も同じ考えなんだぜエ？ 勘違いしないでくれよ？」

「僕も、忘れないでね」

「もちろんおぼちゃんもだよ」

後ろで微笑むばかりだった“人間”の3人組。中年の男女と若い青年の一見異色な組み合わせ。

そうなんだ……彼らも私たちの理解者になつてくれるんだ。

「この鎮守府に配属になった時点で、そいつはもう俺の、柱島艦隊の“仲間”だ。それでも満足できないって言うのなら“家族”でもいい。老若男女は関係ない。だからさ」

にっこり笑って立ち上がった司令官が言った。

「そんな泣きそうな顔するなよ。当たり前だろう？」

わしゃわしゃと私の頭を撫でてくる。あれだけ辞めてくれと言ったのに、もう子供じやないって言ったのに。

「私達は、『仲間』……………」

「そ、『仲間』。それに加えて『家族』って訳だ。柱島ファミリーってのも中々いい響きだな」

『家族』

たった二文字の言葉。

『人間』にとつては当たり前の言葉。

私たちには認められなかった当たり前。

ありふれた綺麗事。

普通なら鼻で笑ったであろう馬鹿みたいな綺麗事。

……………それでも、今の私たちにとつてこれほどまでに素敵な言葉はなかった。

「お前たちは2週間前、俺が柱島の港についた時点で……………」

司令官は今日、この馬鹿みたいな綺麗事を、私たちが憧れても得られなかった幸せを、

「俺の家族になつたんだ」

私たちに与えてくれた。

2章 私たちの鎮守府

1話 とある柱島の1日

——柱島鎮守府3階執務室

司令官さんが着任してから早一ヶ月半、私たちに誕生日ができた日からほとんど一ヶ月が経ちました。結局あの日崎矢提督さんが帰った後、司令官さんは私たちの誕生日についてこう決めました。

「誕生日は建造、ドロップした日でいいだろう。しかし、その日を0歳として数えるとしても不具合が生じる。だから、建造時点の年齢は工廠の妖精さんに判断してもらった身体年齢としよう」

こんなめちやくちやな基準なんて当てにならないし、そもそも艦娘に誕生日や年齢を決める必要なんてないということは皆百も承知なことです。でも、私たちはこんなでたらめなものでも、自分が生まれたことの証を得ることが出来たのです。

そして今週は電が秘書艦の週。新しく艦隊に加わった艦娘の皆と楽しくお仕事をしているのです。

「Hey提督ウ！ 紅茶が飲みたいネー！」

「あっ私も！」

「おお飲むか！ 任せとけ！」

と言っても、最近は深海棲艦に大きな動きはなく、大本営からの出撃命令もないので、ただのんびりしているだけなのですけどね。

それにしても、司令官さんは一体どこにあんなに凝ったティーセットをしまっていたのでしょうか？ 今どう見ても服の中から出てきたような気がしたのですが……

「電ちゃんも一緒にどう？」

「秘書艦も、Tea timeは大事にしないとネー！」

「ありがとう、なのです」

先程から気さくに話してくれるこの2人のお姉さんは、以前の建造で柱島艦隊に加わった巡洋戦艦の金剛さんと軽巡洋艦の阿武隈さんなのです。

この一ヶ月の間に建造された艦娘は8人。金剛さん、阿武隈さんの他に、正規空母の加賀さん、商船改装空母の隼鷹さん、重巡洋艦の足柄さん、睦月型駆逐艦の皐月ちゃん、文月ちゃん、望月ちゃんがいま。司令官さんはまだ物足りないようですが、以前の第六駆逐隊の駆逐艦4人だった頃に比べると随分と大きな戦力になったと思います。「んー我ながら美味い。今日はちよつと手を入れてレディグレイで決まりだ」

自画自賛する司令官さん、いつもの紅茶うんちくが始まろうとしたその時、大きな音を立てて扉が開きました。まあ、誰か大体予想はついていますが……

「レディが何ですって!?!」

「暁、お前な……」

「やっぱり。『レディ』という単語に引き付けられた暁ちゃんです。」

「丁度良かった。暁ちゃんも一緒に飲んでいかない?」

「小さなladyも休憩ネー」

「なっ! 小さい言うな!」

「まあまあ、キッズカップチーノでも作ってやるから」

「キッズ言うなー!」

……今日も鎮守府は平和なのです。

* * *

「ふう……やつと帰ったか。前々から思ってたけど、あいつら中々グレートでヘヴィーだぜ……」

「特に金剛さんなんてかなり濃いですよね」

「何が?」

「キャラが」

2人だけになった執務室でどつと笑います。

「あー愉快愉快……さて、そろそろ執務に戻りたいところだが……」
「どうかしたのです?」

司令官さんの方を見やると、こう言うのは何ですが、間の抜けたよ
うな表情をしています。

「任務が無くなりました」

「はい!?」

思わずこの前見た刑事ドラマの刑事さんみたいな声を上げてしまったのです。

「任務が無い?」

「正確に言うと、出来る任務がない」

そう言うと、司令官さんは受話器を取り上げてコールをかけました。

「あ、もしもし大淀かい?」

「はい、軽巡大淀です。どうされました?」

「今残ってる任務はどれ程あつたつけ?」

「任務ですか? それなら先程お渡ししたもので全てです。それ以外は解放海域の都合上出来ない任務でしたので、こちらで大本営に報告しておきました」

「うん、ご苦労様。それだけだよ、切るね」

受話器を置くと、司令官さんは呆れた時にするように肩を竦めてみせました。本当に仕事がなくなくなっちゃったようなのです……

「とまあ聞いたとおりだよ。何も仕事はないから大淀も今日はお休みしてもらっている。俺達も早めに切り上げるかい?」

「そんなあ……」

ここは孤島の鎮守府です。こんな中途半端な時間帯に仕事を終えても町に出ることも叶わず、変に暇な時間が出来てしまいます。出来れば何かお仕事が出来たらいいのですが……

「何かやる事は無いのでしょうか」

「やる事って言われてもなあ……あ、そう言えば、崎矢さんから送られてくる資料やラビデオやらがかさんでちよつと邪魔なんだよな」

執務室の隅に積まれたダンボールを見つめて考え込んでいた司令官さんがおもむろに口を開きました。

「という訳で、図書室を作ります」

「え?」

一瞬止まる思考。無理やり頭を回して聞き返す。

「図書室を? 作る?」

すまし顔で頷く司令官さん。この人、時々よく分からないことを言い出します。

「図書室って……またまた何故？ 資料の保管なら資料室を使えばいいじゃないですか」

「うん、そうなんだけどね。そのダンボールの中を見てみなよ」

「資料をですか？」

司令官さんが指し示す、以前から執務室隅に置かれているダンボール。ダース単位で数えなくては行けないほど沢山あるのです。開けてみると、中に入っていたのは……

「これは……」

「わかったろ？ ゼーんぶ俺が貰った本なんだ」

そう、中に入っていたのはありとあらゆる本。小説も、図鑑も、論文まで色々。しかもビックリするくらい多い。図書館とまではいきませんが、小さな学校の図書室位はありそうです。たしかに、私的な書籍は資料室に置くわけにはいかないのです。

「それに、ただ数が多いだけじゃなくてね」

やや呆れたような顔で1冊の本を引っ張り出した司令官さん。何やら厚さの薄い本みたいで……はわあ!?

「ほらね、こういうのも無作為に混じってる。ちよつと電には早かったかな」

クツクツと独特な笑い方で笑いながら本を置きます。

「……そういう本は笑いながら女の子に見せるようなものではないのですよ？」

「そうだろう？ だからちゃんと分類しておきたい訳だ。この様子だと、18禁成人向けコーナーも必要っぽいしね」

「痛いほどよくわかったのです」

「さて、この鎮守府の空き部屋はどれ程あるかな……つと。電、分かるかい？」

そう言って司令官さんが柵から引っ張り出したのは鎮守府の見取り図。

「確かこの階、つまり3階の角の部屋と、2階のこの部屋が空いてるの

です。どちらにしましょうか？」

「うーん……2階の方が広そうだけど、この部屋は北向きだね。やっぱり図書室は陽が入る方がいいし、3階の角部屋にしよう」

「こっちなら南向きに窓があるのです」

「おっ、いいねえ。じゃあ行ってみようか」

* * *

——柱島鎮守府3階、空き部屋

「うん、中々いい部屋だね。1ヶ月半の間使ってなかったのは勿体なかったなあ」

「そうですね。日当たりもいいし、暖かいのです」

ずっと使われていなかった3階の角部屋。ここはいいところなのです！ 司令官さんはタブレット端末の様なものを持参しています。これを使って家具の注文が出来るそうなのです。

「んー、やっぱり図書室だし書棚はたくさんいるよね。あとカーテンと机と椅子と……ん？ どうしたんだい？ 電」

「ああ、いえ。とっても楽しそうだなーって」

「楽しいさ。ほとんど遊んでるみたいなものだからね。こんな仕事で食っていけるって言うのなら提督業も悪くない」

「ちよっと不謹慎なのですよ」

「申し訳ない」

2人だけの空き部屋で、声を出して笑う。こういう、何も無い、平和な時間もとっても好きなのです。

* * *

球磨型5番艦、木曾だ。

最近……こう言っちゃ不謹慎だが、戦闘が無くてとても暇だ。決して提督が執務を放棄しているとか、艦娘たちがサボっているとかではない。ただ単に近海の深海棲艦が駆逐され、俺たちの出る幕ではなく

なつたというだけだ。

提督は金剛や加賀が建造されても燃費の良い水雷戦隊を重用してくれたから出撃は多い方だったのだがそれでも少ない。俺よりも出撃の少ない加賀などはきつともつとやるせなさを感じているだろう。

もちろん、人間達を守る俺たちにとって平和は喜ばしい事だ。例えば隣の離島に住んでる老夫婦。この前近海の警備をしていたらわざわざ茶まで出してもてなしてくれた。一昔前は艦娘の扱いには酷いものがあつたと言うが、あのような人もいるんだ。守らなくてはならない。

ただ、そうなるとどうしても……

「あー暇だー！」

暇になつてしまう。

「んー？ 真昼間から叫んでるのは誰だい？」

おっと、結構大きな声になつてしまった。声の方を見やると、空母に割り振られた部屋から顔を覗かせている隼鷹がいた。

「お前……酔つてるな」

「ええい！ 開口一番それかい？ アタシは酔つてないよ、素面だよー！ そんな訳があるか、顔が赤いし足元がふらついている。こいつは提督や響に並ぶ程酒に強い。俺もそこそこ強いはずだがまるで歯が立たなかつた。だが、隼鷹は提督や響とは違って、アルコールが入るとすぐ顔が赤くなる。まあ、そこから酔い潰れるまで信じられないくらい飲むのたが。」

「まあいいさ。加賀はどうした？ 姿が見えないが」

「あーあの人なら今近海警備のために彩雲を飛ばしてるよ」

なるほど。昔（と言っても一ヶ月前だが）は俺が水上機を飛ばして近海に深海棲艦がないか警備していたものだが、加賀が着任してからは彼女に任せきつている。

俺は速度の遅い「零式水上偵察機」を最大でも追加機装スロット1つにつき1機しか飛ばせないが、正規空母である彼女なら「零偵」など比べ物にならないほど高速な偵察機「彩雲」を最大スロットに積んで46機も飛ばせる。警備の質と時間効率が上がったのは言う

までもなく、偵察機の扱いが苦手な俺としては彼女に頭が上がらない。

「そうか、助かるな。で、お前は？ 手伝わなくていいのか？」

「アタシの追加艀装のスロットはあんまり搭載数に偏りが無くてさ……偵察には向かないのさ」

「へえ。知らなかった」

提督は艦娘の個性を重んじる。しっかりと把握した上でその個性を最大限に引き出す運用をしてくれる。

例えば以前提督が1―4を攻略した時、軽巡梓に俺ではなく阿武隈を編成した。俺の方がずっと練度が高かったというのに。その理由を聞いたところ

「今回は航空火力を活かして弾着観測射撃での殲滅に重きを置く。お前、水偵の扱い苦手だろ？ 知ってるぞ」

とすまして答えやがった。馬鹿にされたと思って 思わず突っかったが、奴は笑って答えた。

「何も苦手なことを恥じることは無いさ。その代わり、お前は阿武隈よりずっと魚雷の扱いが上手いじゃないか。水雷戦隊の旗艦に経験のある阿武隈ではなく木曾を据えてる理由はそれだ。知らなかったろう？」

ちなみに、〃提督の苦手なことは何か〃と聞いたら笑いを収めて妙な表情で「プレッシャー」と答えた。

「いやーあの提督はいい奴だよ！ 酒は飲ませてくれるし休みは多いし！ これで飛鷹がいりやあもつと楽しいんだが」

「今更気づいたのか。調子のいい奴だ」

「あ、アンタ今馬鹿にしたね？」

「馬鹿にはしてない。呆れただけだ」

「一緒じゃないか」

「違うね。呆れるのは馬鹿にするのとは違って相手を尊重しているからな」

そう言うと、隼鷹はらしくもなく敵襲があった時のように鋭い目はこちらを眺めた。いや、瞳の奥には冗談の光がちらついているから少

し違うか。

「それは褒め言葉なのかな？」

「飲んだくれには最上級の褒め言葉だと思っただが、どうだ？」

「……まあそういう事にしておくよ。アタシやこれで失礼するね」

「ああ、あまり飲みすぎるとなよ」

またふらふらと部屋に戻った隼鷹。一緒に飲もうかとも思ったが、休みとはいえないつ深海棲艦がやってくるかわからないからな。あいつはいくら飲んでもこたえないからいいが、俺は流石に酔った体で戦える自信がない。

「さて、加賀は索敵、隼鷹は酒。今日暇してそうなのは……足柄位か。チェスでも相手してもらおうかな」

足柄以外は皆忙しそうだ。提督始め職員たちはまだ勤務時間だから勝手に業務を離れる訳にはいかないし、金剛は神出鬼没だから全く何をしているかわからない。今頃提督相手にばーにんぐらぶ？ とやらをかましているかもしれないし、何にせよまともなチェスの相手になりそうにない。

阿武隈は練度上げも兼ねて皐月、文月、望月の3人と一緒に遠征へ出ずっぱりだ。『睦月型の子達が言うことを聞いてくれない』とこの前泣きそうになりながら相談に来たが、なんだかんだ懐かれていて見えて微笑ましい。したがって彼女達も暇とは思えない。

それに、睦月型達は艦艇時代の威厳がどこへ行ったのか皆幼い身体、精神で建造された。彼女達にチェスはまだ難しいだろう。

それでは第六駆逐隊の面々はどうかと言うと、電と暁を残して響と雷は呉の崎矢提督の元へ演習に出ており、残った電は秘書艦業務、暁は憲兵兼副官の美代少尉と工廠関係の任務をこなしている。明日はそれぞれ持ち場を交代し、暁と電が演習、響が秘書艦、雷が工廠担当何だとか。

……と、つまるところ今日暇なのは俺、金剛、隼鷹、足柄の4人だけ。その中でまともに俺の暇つぶし相手になりそうなのは足柄1人だけという訳だ。

「足柄は今朝会ったつきり見てないな。提督に聞きに行こうか」

提督はかなり大らかというか他人を拘束したがる人だ。艦娘達は、休みの日ならば自由に動けるし、限度を超えなければ金も自由に使える。もちろん、給料の範囲内で。

しかし、奴は艦娘に自身の位置報告だけは徹底させている。奴が皆に語った理由は、

「お前達は陸では普通の女性だ。当然日常お前達を狙った犯罪だってある。行方不明になったりした時に探しやすいからな」

との事。しかし、後でこっそり教えてくれた本当の理由と言うのは、

「本当はね、駆逐の子達の迷子防止なんだ。こういうと響や望月みたいにしつかりした子達は怒るかもしれないけど、駆逐艦娘って変なところで幼いからさ」

「……それは皐月や暁の事を言っているのか？」

「黙秘権を行使しまーす」

全く、気配りが上手なのか、からかい上手なのか。まあ、悪い奴ではないことは確かだね。さて、色々考えながら歩いていたら執務室前についてしまった。だが……

「これは……」

執務室の扉にはよく飲食店とかで見かける看板のようなものがかかっている。書いてある文字は……“Be out”（外出中）か。

「んー……どうしたもんか」

元来た道を帰ろうと足を向けたその時、廊下の端にある部屋が目に入った。

「ん？　なんであの部屋扉が開いてるんだ？　確かあそこは空き部屋のはずだが……」

もしか、提督の“外出中”の先はここなんだろうか。全く、この距離なら“角部屋にいる”とでも貼り紙をしておけばいいのに。

「提督？　いるのか……っつてうわあ!」

「ん？　ああ、木曾か。よく来たな」

「よく来たな、じゃねえ！　なんだその手に持ったうねうねしたものは?!　それに！　電は何処だ?!　一緒じゃないのか!」

提督は緑色の、ロープのようなものを手にしていた。それだけなら驚かない。なんせ空き部屋だから、荷造り等にロープを使うこともあるだろう。だが、そいつは動いているんだ。あの妙に規則的で滑らかな動きはまさか……

「ああ、こいつはさつき捕まえた蛇だよ。どうも、ここが空き部屋になってる間に住み着いちやっただけでね。確かに、角部屋は蛇にとって住みやすい条件だ」

「電は……」

「電？ 電ならさつきからそこにいるじゃないか」

提督が指さしたのは俺の横。慌てて振り返ると、青い顔の電が扉の裏で震えていた。小刻みに「なのです……なのです……」と繰り返している。

「とつ、とにかく！ 早くそいつを離せ！ 電が怯えてるじゃないか！」

「えー、蛇って可愛いのに。いつそこの部屋で飼おうと思ってるんだが」

「それは許さん（許さないのです）!!」

「……」

2人で全面拒否すると、流石に少数意見を押し切る気はないらしく、提督は窓から蛇を離れた。

「皆怖がりなんだから……あれ？ ところで木曾は何でここに？」

「お前らこそ、何やってるんだ？」

* * *

「なるほど……図書室を作るのか」

「いい案だろ？ 確か、木曾も読書好きだったな」

「そうだな」

俺はこう見えて結構本を読む。電に勧められた本は一応だが全部目を通したし、私室にはそこそこの数の本がある。ぶっちゃけ置き場に困っていたのだが、図書室ができれば預けてみてもいいかもしれない。俺は置き場所ができるし、鎮守府は蔵書が増えるから一石二鳥だ。

「しかし俺は物心ついてからずっと軍人目指して生きてきたからさ。図書館なんて行ったことないんだ。電ばかりにやらせるのも申し訳なくてな、もし良かったら手伝ってくれないかい？」

「いいぜ！俺とお前の仲じゃないか！」

「おっ頼もしいね。んじゃ早速始めるぞ」

「そう来なくっちゃな！本当の図書室ってヤツを教えてやるよ」

——柱島泊地鎮守府沖、海上

「艤装……航空甲板展開、発艦準備」

ただ1人、鎮守府正面海域に出撃した航空母艦……私加賀は、提督の指示で近海の索敵を担当しています。

と言っても、私が着任する以前に製油所地帯沿岸……通称1―3海域までを縄張りとしていた深海棲艦はほとんど駆逐されていたから、私は臨海の住民に被害がないよう警備をするだけ。だから戦闘はそう滅多にない。

「風向き良し。全機発艦」

風上へ向けて弓を引く。私達航空母艦の魂を受け継いだ艦娘は他の艦種の艦娘とは異なった特殊な艤装を持っています。

私の場合は、この大弓と矢筒、飛行甲板。本来発着艦は飛行甲板から行うものですが、艦娘となった今、発艦は矢筒に矢となって収まっている艦載機を弓の要領で飛ばします。

「第一部隊『九七式艦上攻撃機18機』、第二部隊『九七式艦上攻撃機18機』、第三部隊『零式艦上戦闘機二一型45機』、第四部隊『艦上偵察機彩雲』全機93機……」

1番多く艦載機を搭載できる第三スロットに艦戦を積んでいるのは、いつ南西諸島方面から敵空母がやってくるかわからないから。安全な海域の索敵とはいえ、妥協は出来ない。一航戦の誇り、失う訳にはいかないわ。

それに、山村提督は一般人を戦闘行為に巻き込む事が嫌いです。私

に何度か、索敵の重要性を話してくれました。航空母艦の私には釈迦に説法だとも思ったけれど、彼の熱意はとてもよく伝わったわ。期待には応えなければならぬわね。

私達航空母艦が搭載している艦載機は、他の艦娘たちの主砲や魚雷と同じように、航空機を妖精さんの力で人型サイズまで圧縮したものの。勿論、そのぶん爆発力は凄まじく、かつての海軍航空隊に匹敵する破壊力を持っている……いや、艦娘が扱い、より小回りが効くようになった事を考慮すれば、上回ったとも言えるかも知れないわね。

そして、その艦載機には妖精さん達が搭乗員として乗り込む。その事を提督に説明した時、彼はまるで私を睨むような目つきで問いました。

「搭乗員である妖精さん達は撃墜されるとどうなるんです？ まさか海上に放置されるんですか？」

正直驚いたわ。彼がお人好しなのはそれまでの言動でよくわかっていたけれど、まさか部下である私にも敬語を使うだなんて。まさか妖精さん達の生命さえも気にする人だなんて。少なくとも、こんな考え方をする提督は他にいないと思う。

「……大丈夫よ。彼らは艦載機に宿った妖精さんなの。機体が撃墜されると一時的に消滅するけれど、帰還して艦載機を補充すれば、自然とまた現れる」

そう伝えると、彼は大きく息を吐き出して俯くと、次に上げた顔はいつものどこかふざけたような柔らかい表情になっていた。

「そうですね、それなら安心です」

「そもそも彼らに生死の概念は無いの。存分に戦わせてあげて。皆優秀な子達ですから」

「うん。頼もしいですね。よろしく頼みます」

とにかく、彼は私達や妖精さんを駒のように使い捨てるような提督ではない。ただその一事だけでも、私はとても幸運艦なのだと思うわ。彼の指揮下なら、存分に戦うことができるから。もう2度と……沈みはしない。

「エンジントラブル2機、内訳九七式艦攻1機、零戦二一型1機……2

機は直ちに帰還。着艦後応急整備の後再度出撃。本隊の後背を狙う敵機を警戒……」

2機のトラブル機を整備し直し、再度弓につがえた時、偵察部隊から通信が入りました。

「……第二部隊から電文。九七式艦攻ね」

先程発艦した艦載機は九七式艦攻、零戦二一型、彩雲の三種類。その内零戦は単座戦闘機で、無線機も積んでいることには積んでいるけれど貧弱すぎて偵察には向かない。今は撃墜されやすい九七式艦攻の護衛をしている。

彩雲は3人乗りの偵察機で、整備の行き届いたベストな状態であれば時速700kmにも届かんとする高速の偵察機。俊足故に撃墜されることはほぼ無く、そもそも護衛の零戦ですら追いつくことが出来ないため、護衛は付けていない。

一方、今受け取った電文の送り主である九七式艦攻は最大速度でさえ時速400kmに届かない鈍足の飛行機。当然ね、800kgを超える重量の魚雷を積んでいるんだもの。電信と偵察用の機械類しか積んでいない彩雲に比べて足が遅いのは仕方が無いわ。

それに、彼らの本懐は偵察じゃない。艦船に対する最大級の破壊力を誇る雷撃こそが、彼らの真骨頂。この様子だと、彼らには今から働いてもらわなくてはならなさそうね。

「我敵艦隊二遭遇セリ……珍しい、もうのこのこやってくる深海棲艦なんていなくなったと思っただけれど」

私は一週間ほど前、隼鷹と護衛の雷、電で構成した機動部隊で近海の深海棲艦を全て討伐……徹底的な偵察と圧倒的な火力で文字通り“全滅”させた。この近海の深海棲艦は駆逐、軽巡、どれだけ強くてもせいぜい重巡クラス。私たちの航空火力があれば鎧袖一触だった。

途中で私たちに襲いかかってきた潜水艦も、雷電姉妹が全て追い払ってくれたわ。最初は護衛なんていらなそうと思っただけれど、もし彼女たちがいなくなったらと思うとゾツとする。慢心は禁物、気を付けなくてはなりませんね。

私たちが完膚無きまで叩きのめした成果あってか、最近は全く深海

棲艦が出現せず、正直持て余していました。

久しぶりの敵艦！ 久しぶりの実践！

「……流石に気分が高揚します」

本当は戦闘行為に入るためには提督の許可が必要だけど、私は敵が2隻以下なら無許可でも攻撃出来る。それが、索敵を命じる代わりに提督が与えてくれた特権。

「鎧袖一触よ。心配いらないわ」

自分に向かって吹き、高ぶりかけた心を沈める。焦りは驕りと同じ位危険なもの。いついかなる時でも平静を保つ事が、空母には求められる。

「敵艦捕捉。 駆逐艦2隻のはぐれ艦隊。 巡航速度で西へ航行中……」

接敵した艦攻隊の飛行隊長と視覚情報ビジュアルを共有し、指示を出す。

「九七式艦攻隊は全機、 雷撃進路をとって。 零戦隊は九七式艦攻の雷撃を援護、 彩雲隊は戦果確認のため一時待機」

大まかに指示を出した後は各部隊の飛行隊長に精密な指示は任せな。93機ある私の艦載機全てに、別々の指示を出すことは艦娘となつた今でも不可能なことに変わりない。けれど、指示はこれ以上必要ない。だって……

「皆優秀な子達ですから」

* * *

——柱島鎮守府中央棟3階空き部屋（図書室へ改装予定）

「……ん？」

「どうした？ 提督」

「いや、なんだか爆発音が聞こえた気がしたんだが」

「ああ、どうせまた明石が妙ちきりんな発明でもしたんだろう。あいつ、この前も無線機弄って木っ端微塵に吹き飛ばしてたからな」

ああ、そういえば今日も明石は漁船のスクリーンの性能をあげるんだーって張り切ってたな。大事無いといいけれど。

明石は決して技倆のない技術者ではない。この前木曾の言う無線

機改造の構想を教えてもらったが、緻密に計算され尽くされた設計で、ケチの一つもつけられなかった。にも関わらず、何故か明石の作った発明は爆発するんだからよくわからない。

そもそも無線機の設計に必要な資材で爆発物は一つも無いのに漫画みたいな大爆発が起こるのだ。もう才能としか形容しようがないと思う。触れたものを爆弾に変える能力でも持っているのかもしれない。

とにかく、明石の発明が爆発したのなら音はもつと近くで聞こえているはずだし、あの音はもう聞き慣れたからはつきり聞き分けることが出来る。

「いや、なんだか機械類の爆発音というより魚雷が命中した時の音みたいだった。電は聞かなかったかい……ってあれ？」

ついさつきまで一緒に部屋の書棚を整備していたはずの電がいない。

「こ、ここののです……」

バサバサと音を立てて、本の山の一部分が盛り上がった。綺麗な鳶色の髪が、窓から差し込む夕日に当たって艶やかに光っている。彼女が持っているのは……鎮守府近海の海図だ。

「すごいのです！ 精密な海図がずらりと……しかも、南西諸島、北方、西方海域まで！ 何故司令官さんはこんなものを？」

「ああ、崎矢少将がコピーをくれたんだ。彼は西方海域まで制圧してたからね。部下に制圧区の測量をさせたのさ」

深海棲艦が現れる以前は航空機や人工衛星などを使って測量し、精密な海図、地図を作っていたと聞かすが、今ではそんな手法は用いられない。否、用いることが出来ないの方が正しい。

深海棲艦は周知の通り人間が発明したありとあらゆる通信機器を攪乱する電波を発する。比較的近距离間であれば、無線機の改良で通じるようになったが、未だに宇宙との交信は出来ていない。故に測量は旧式の方法に頼らざるを得ないのだ。

「熱心な方なですねえ。こんなに精密なものを何枚も……」

「当たり前だよ。名将と呼ばれる指揮官に、地形の把握を疎かにした

者は1人も居ない。電、『天の時は地の利に如かず』って聞いたことあるかい？」

「はい……確か戦国時代中国の孟子が言った言葉でしたよね？」

「その通り。いかに天才的な用兵家が指揮をとっても、地形を理解していなければ必ず負ける。天の時、つまり攻め時、引き時……つまりタイミングを測れるものよりも、地の利、すなわち地形の利用が出来る者の方が強い。そして、『天の時』と違って、『地の利』は予め準備することが出来る。『海図』の形でね」

「なるほど……地の利ですか」

熱心な生徒の顔になる電。電には最近戦術のみならず、戦略戦も教えている。と言っても、俺も崎矢提督ほど洗練された戦略技術を持っている訳では無く、彼から学んでもいるから、電との関係は教師と生徒と言うより兄弟子と弟子と言った感じだ。

「勝つための条件を一つ、戦う前から布石として打っておけるんだ。勝つためにはやらない訳にはいかないだろう？」

「そうですね。戦闘は始まる前に8割が終わっているといます。地形を活かすことも戦略戦なのです」

「わかってきたね？ その通り」

戦場は過酷な場所だ。死ねばおしまい、次はない。そんな危険な場所に送り出す立場に俺はいるのだ。準備に妥協は出来ない。せめて彼女達に最上の環境を用意してやるのが義務というものだ。

「それにしても、さっきの爆発音は何だったんだろう」

思わず呟くと、電と話している間中黙りこくっていた木曾が伸びをして口を開いた。

「戦略がどうかとか、戦術がどうかとか、そんなこと今はどうでもいい。さっさとここを片付けようぜ」

2話 頭にきました

——呉鎮守府執務室

「……よし、遠征艦隊のセーリングは好調らしいな。近海警備も問題なしつと……飛龍、午後からの予定は何だっかな？」

「もう……それさつきも聞かなかつたかしら？午後からは山村君のところの響ちゃんと雷ちゃんに稽古をつけるって言ってたでしょう？」

「おお、そうだったそうだった。サンキューな」

いつもの執務室。いつものやり取り。いつも通りの笑顔を浮かべて親しく肩を叩いてくる彼……純白の制服を身にまとったおよそ日本人とは思えないほど長身の彼。彼は名を崎矢サキヤナルヒト成仁ナルヒトと言う。階級は少将。

この日本第2の規模を誇る呉鎮守府の主であり、過去何度も日本の窮地を救ってきた英雄であり、そして……

「いやーやっぱり持つべきものは良い妻だな！」

「全く……頼りにならない夫を持った妻はしつかりしなくちやいけなの」

……そして、私の夫である。

左手にはまった二つの指輪にそつと触れる。一方は大本営から支給された無地のリングに私の建造日が刻まれたもの。そしてもう一方は、まるで彼の性格を表しているかのように複雑で、繊細で、それでいて華やかな装飾が施されたもの。

どちらも、私……正規空母「飛龍改二」の存在を語るのに欠かすことが出来ない大切なものだ。二つの指輪を貰った時のことは今でもはっきりと覚えている。あの時は……まだ呉に山村君もいた。

「そつか……あの子もついに提督になったのね」

「山村の事か？もう1ヶ月以上経つんだ。いい加減慣れるよ」

「そうなんだけどね。やっぱりついこの間まで、ここで副官やってたあの子だなんて今でも信じられないわ。何て言えばいいかわからないけど、顔付きが変わった気がする」

「当然だ。人の上に立つつてことは、否が応でも人間を成長させる。

あいつだつてこの1ヶ月で色々学んだだろうからな」

そう。この前中佐の辞令と、建造ドックのキーを渡しに行った時、一昔前の、ここにいた頃の彼とは明らかに違う雰囲気を感じた。艦娘たちのルーツをなんのしがらみもなく受け入れてくれたのも、彼が成長したからなのだろうか。

「……立ち直れたみたいね。もう心配要らないかしら」

「……だといいんだが。あの件はちゃんと進めているか？」

「もちろんよ。彼にとって一番大切な願いだもの。叶えてあげな
きゃ」

「そうだな。予定より遅れているから、出来るだけ急いでやってくれ
……おつ、どうやら来たみたいだな」

執務室の扉がリズムミカルに叩かれた。

「柱島鎮守府所属、駆逐艦響」

「駆逐艦雷、到着したわ！」

「どうぞ、入りなさい」

忙しなく入室し、敬礼する2人の艦娘、柱島鎮守府所属の響ちゃんと雷ちゃん。

「うん、いい敬礼だ。もう楽にしているよ」

「はーん」

「了解」

呉の響ちゃん、雷ちゃんよりやや大人びた彼女達。パツと見13、4歳位だろうか。戦闘経験は浅いけれど、彼女達は良くも悪くも、幼い肉体で建造される駆逐艦娘。今後の努力次第でいくらでも成長出来るだろう。

「さて、今日は爆雷投射の訓練だ。ついてきなさい」

「えっ？ 今日演習じゃないの？」

「演習だよ。ただし、キミ達の相手は呉の潜水艦隊だ」

ニヤリと笑う成仁。慌てて響ちゃんが問い返す。

「でも、前に来た時は水上艦との殴り合いの訓練を2か月かけてやる
と聞いたよっ。」

「そうよ！ 何で突然対潜訓練に切り替えたの？」

「あれ？山村から聞いてないのかい？もしかしてあいつ、また1人で全部解決しようとしてるんじゃないだろうな……」

うーんと唸って頭をかく成仁。

「まあ色々事情があるんだが、一言にまとめて言えば、キミ達が守る海域……つまり柱島鎮守府正面海域に潜水艦級の深海棲艦が増えていくんだ」

「潜水艦が!？」

「なるほど、どおりで最近漁師さん達の船を見ないと思った」

呆気にとられる雷ちゃんとは対照的に、響ちゃんは気難しそうな表情を浮かべた。

「まあ増えている、と言ってもせいぜい全国平均の1割から2割増し程度。キミ達の鎮守府……柱島は駆逐、軽巡クラスの艦娘が多いから別段心配する事は無いよ。でも……」

「数人は対潜格闘技術を完成させておきたいんだね？」

「その通り。わざわざこ興つちに来なくても鎮守府内で練度を上げられるようになるわけだからね」

一通り問答して響ちゃんは満足したらしいが、雷ちゃんはまだ納得いかなさそうにしている。わかりにくいけど、どうも自分達が最初に対潜訓練を受けることを不安がっているようだ。

「でもなんで私達なのかしら？ 対潜技術は軽巡の阿武隈さんとかの方がずっと上手なのに……」

「いい質問だが、あえてこちらからも質問を返そう。今柱島鎮守府の対潜戦闘可能な艦娘は何人だい？」

「3人よ……あつ」

「気付いたかい？キミ達に頼るしかないんだ。頑張ってくれよ？」

そう。彼女達第六駆逐隊に任せるしかないのだ。これは事前に山村君と成仁でかなり長い間検討していたから間違いない。

山村君が申告している……つまり、柱島鎮守府に所属している艦娘は現在15人。内訳は巡洋戦艦1、正規空母1、軽空母1重巡1、軽巡3、駆逐7、工作艦1。しかし、軽巡大淀、工作艦明石はまだ艤装が完成していないため戦力外となる。

残った13人の内、対潜攻撃が出来るのは10人。軽空母の隼鷹は対空警戒という対潜よりも重要な任務があるため除外して9人。

しかし、その9人中7人は駆逐艦で、軽巡はたったの2人しかないのだ。その2人も、木曾は水雷戦隊の旗艦として主力艦隊から外れることはほぼ無く、阿武隈も遠征に出ずっぱりでほとんど鎮守府にいない。彼女達に更に対潜訓練を課すのは流石に酷というものだろう。

更に、駆逐艦7人の内でも燃費のいい睦月型の3人は阿武隈と共に遠征へ出て忙しくなってしまう。すると自然と、第六駆逐隊が残る。「駆逐艦の本懐は対潜性能にあると言ってもいい。訓練に妥協するつもりは無いから、死にものぐるいでついて来い！」

「私達がやらなければならぬ」という事実を再認識したらしい雷ちゃんは、さつきとは真逆の、決意で固まった表情を浮かべて応えて見せた。

「つまり、私たちが皆の先生にならなきゃいけない訳ね！ もっともーっと強くなって見せるんだから！」

「その意気だよ雷。私も……強くなるんだ」

本当に見えていて微笑ましい2人の駆逐艦娘。健気で、素直で、力強い。

「言っておくが、俺の潜水艦隊はブルネイやラバウルの艦隊ように貧弱では無いぞ。2人とも、殺す気でかかれ！」

——柱島鎮守府正面海域

「彩雲隊戦果確認部隊より電信……」
「我が航空隊、敵艦隊ヲ殲滅セリ」

静かな海上でほっと息を吐き出す。艦艇時代より繰り返してきた航空戦であることは間違いないが、決して緊張しなくなる事は無い。それは、艦娘となった今も同じこと。

「お疲れ様。飛行甲板に順次着陸して」

帰艦の間隔はまばらではあるが通信部隊を兼ねる彩雲隊によると

1機の損失もなく戦闘を終えたらしい。良かった、こちらの被害はゼロ。完全勝利ね。

「……零戦隊の練度が少し気になるわね。まだ実戦を経験していないからしかたが無いのだけれど。今度の演習に航空戦の項目を追加してもらおうかしら」

脚部の海上走行用のスクリューを第1戦速にまで落とし、帰投へと足を向けた。その時だ。

水中から高速で飛び出した何かが、私の艤装の脚部に突き刺さる。沈みかけた陽の光を受けて黒光りするソレは……

「これは魚雷!? しまった、回避を……」

気付いた時にはもう遅い。回避は不可能。盛大な水しぶきをはらんだ爆風が私を包み込む。

「ぐう……っ!」

横っ飛びに跳んでギリギリまでかわしたつもりだが、やはり被害は無視出来ない。鋭い角度をつけて海上に投げ出される。

「……ゲホッ。頭に来ました」

どうやら魚雷の爆薬が少なかったらしい。少々脇腹を抉られる程度で済んだ。もし、私が艦娘でなかったら全身木っ端微塵に消し飛ばされて跡形もなくこの世から消滅していた事だろうが、背負った艤装が最大限まで私へのダメージを吸ってくれている。

「航空甲板は無事ね。脚部艤装……軽微な損傷あり、航行速度低下。他異常なし……」

被害の状況は総評すると中破寄りの小破と言ったところか。航空甲板がやられていないから、まだ戦うことは出来る……!」

「第四航空部隊、彩雲12機発艦。敵の位置の特定を急いで!」

今喰らったのは魚雷攻撃。空に航空機は全く見えなかったから駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦の何れかである可能性が高い。爆薬の少なさから考えても、恐らくさつききの戦いで討ち漏らしてしまった敵の残党の攻撃だろう。

……しかし、一向に敵は彩雲隊の偵察網に引っ掛からない。

「……一体敵は何処に? 魚雷の射程ならこれ以上遠くにいるのはお

かし……!!」

そこまで眩いて気付いた。否、気付かされてしまった。己の立つ海面の下を走り抜けた巨大な影に。空母の天敵とも言える、あの艦種に……

「敵潜水艦見ゆ！ 最大戦速！ 取り舵一杯！」

逃げなくては……私では奴らに敵わない!!

「どうして……この前雷電姉妹が全滅させたはずなのに……」

思わず歯ぎしりする。迂闊だった。護衛の駆逐艦無しに出撃した空母は潜水艦に対して無力だ。それで沈められた前例はいくらでもあると言うのに私は対策を怠った。

「また……慢心が原因で沈むと言うの？」

答えは……否。こんな所で沈んでなるものか。せつかく授かったこのカラダ、ろくに戦わずに死んでしまっってはは提督にも、他の艦娘にも面目が立たない。必ず、この場を生き延びてみせる。

「このままでは不味い……とりあえず彩雲隊の内3機を鎮守府へ向かわせて救援要請を……いや、今更遅いわね」

一応向かわせてはみるが、いくら足の速い彩雲でもここから鎮守府へ救援要請を送ったとして、勝負が着く前に救援が到着する可能性は低い。その時私は沈んでいるか、逃げ切っているかのどちらかだ。

最大戦速で航行しながらもアタマは回転させ続ける。私は正規空母。潜水艦に対する攻撃能力は全く持たない。軽空母なら艤装に標準搭載されている特殊ソナーを用いて対潜攻撃が出来るらしいが、これほど軽空母になりたいと思っただけは無理。

「沈むわけにはいかない。まだ彼から許可は降りてないから」

* * *

——数週間前、柱島鎮守府執務室

「ねえ加賀さん。あなたは絶対に勝てない敵に出会ったらどう戦いますか？」

「……私達がそのような敵に出会わないように采配するのが提督の仕事」

事ではなくて?」

「加賀さんは手厳しいな」

階級は兵士である私達よりずっと上であるのに、私に対する敬語を崩さない彼。向こうが下手に回るものだから、ついいつも冷たい態度を取ってしまう。気をつけなくてはなりませんね。

「もし仮にそうなったらの話です。俺が常に正しい判断を取れるわけではありませんから、その時は加賀さん達に尻拭いしてもらう必要があるんですよ」

敬語はいくらやめろと言っても「歳上ですから」と流すくせに、態度はまるで同期、いや友人のようだからこちらとしては更にやりにくい。どちらかに統一してくれればいくらか楽になると思うのだけだ。

「で、どうなんです? 空母のあなたなら例えば航空隊が半壊状態での戦闘とか、全く攻撃の出来ない潜水艦隊とか……」

「自分がミスした仮定の話なのに随分と楽しそうですね」

「実践だところは行きませんが、考えるだけならタダですからね」

ククツと独特な笑い方で笑う。着任以来ずっと思っていたけど本当、不思議な笑い方ね。

「そうね……もしそうになったら潔く沈もうと思うわ。全力で渡り合って負けたのなら、抵抗は無意味。見苦しい抗いはしたくないと思ってるわ。もちろん、そんな状況になるのはごめんだけだね」

そう言うと、提督は笑みを浮かべて答えた。

「あなたならそう言うと思っただけです。だから今日お話がしたかったです」

「……?」

おもむろに立ち上がり、窓の外を見やる提督。私も自然とそれに倣った。

「俺はね、最後の一瞬まで見苦しく抗ってほしいんですよ。あなた達に」

「……」

「もし、絶対に勝てない敵に出会ったら」何があろうと生きて帰っ

てきて欲しいんです」

こちらに微笑みかける提督。しかし、目には決意の色が浮かんでおり、簡単に事を済ませる気は毛頭ないことを示していた。

「たとえ身体の一部が吹き飛んでも、たとえ全ての艀装が破壊されても、負け犬と世間から罵られようと構わない。生きて帰ってきて欲しいんです」

「……」

「例え勝てない相手でも、逃げることは出来る。俺が一番恐れるのは艦娘が……あなた達が、護るべき艦隊の仲間のために、あるいは掲げる誇りのために、自ら生命を投げ出すことなんです」

「それは、ある意味では賞賛されるべき行為かもしれないのに？」

そう言うとな提督は力なく笑って言った。

「俺はそうは思いませんね。自己犠牲の心が産むものは自己満足と喪失感だけだと思っています。しかし、世にはそれが賞賛されるべき行為だと考える人が多いのも事実です」

「それなら……」

「だから、これは命令します」

微笑む彼の目はもう笑ってはいない。しかし凍てついた眼差しをしている訳でもない。これは、拒否を許さない決意の目。

「この鎮守府において、提督の許可なく死亡、轟沈する事を例外なく禁ずる」

“提督の許可なく死亡、轟沈する事を禁ずる”

それが意味することは……

「……提督、自分が何を仰っているのか理解出来ていますか？」

「矛盾しているのは理解しています。無茶を承知でこうして命令しているのです」

……あきれた。なんて我儘な提督、いや人間なんだろう。

部下である艦娘を危険海域に送り出す立場にありながら、交戦して沈むことを許さない。それだけなら普通の艦隊司令官なら当然の事だ。それは艦娘を“戦力”として捉えた一般人の思考。

しかし、彼は私たちを戦力と見なしてそう言った訳では無い。あく

までも友人として、彼の個人的な感情から、私たちに死ぬことを禁じたのだ。

「……出来ますか？」

くだらない。本当にくだらない命令。彼がしているのは子供が鳥のように空を飛びたがるたがるのと同じ行為だ。絶対に不可能にも関わらずその無慈悲な答えを信じずに駄々をこねる。

しかし、彼はちゃんとわかっている。自分は決して空を飛ぶことは出来ない”と薄々感じずにはいられない子供と同じように、実現不可能な願いだとは理解している。それでいて尚、その答えを信じたくないのだ。

彼は、理想の空を見上げながら現実の道を歩いている。

「……呆れました」

「……」

「提督、あなたは艦娘を誰一人沈めないつもりでいる。でもそれは不可能な事。いくら強くても、いくらこちらが優勢でも、必ず沈む艦娘はいます。もちろん、それは私かもしれない」

「……」

「でも……」

一呼吸置いて彼の目を見つめた。綺麗な黒色の瞳が1対、押し黙ってこちらを見つめている。

「でも、あなたはこの到達不可能な“理想の空”に“現実の道”を歩いて到達しようと努力している。それは認めるわ、だから……」

だから、私の答えは1つ

「私にも、その馬鹿げた理想に歩み寄る事に協力させて欲しい」

* * *

「約束したから。彼の望む理想を共に作り上げると」

誰一人沈むことのない艦隊にする。その理想のためには、まず自分が生き延びなくてはお話にならない！

弓型の艦装を引き、新たな艦載機を矢として番える。

「第一、第二艦攻隊。二部隊合わせて九七艦攻36機、発艦。紡錘形に散開して近海の水上艦を警戒。決して私に近づけないで」

足が遅く、対潜攻撃も出来ない艦攻隊はこの状況下では役に立たない。だから私が逃げている間の時間稼ぎをしよう。

きっと私と敵対している潜水艦は既に深海棲艦の増援を呼んでいる事だろう。正規空母という格好の獲物が護衛艦も無しに単艦でいるのだ。奴らが簡単に逃がしてくれるとは思わない。だから、やって来る水上艦に艦攻隊をぶつける。

「第三航空隊、零戦二一型45機。内半数は艦攻隊の護衛に、残る半数は先行している彩雲隊と共に前方索敵」

零戦は彩雲に引けを取らないほど足が速い。索敵も十分にこなす良機だが、如何せん無線機が貧弱すぎて連絡が出来ない。それを、先行している彩雲隊との連携によって補おうという訳だ。また、半分を艦攻隊の護衛に当たったのは敵の空母対策のため。まさか、正規空母を攻撃するのに1隻の空母も伴わずにやって来るほど敵は馬鹿ではないだろう。

「あとは……私の騙しのテクニク次第ね」

足元の水面を睨みつける。艦娘は艦装を装着すると全身と海の間不思議な張力が働き、海上を陸上と同じように活動することが出来る。

しかし敵は潜水艦。この場合は艦娘の持つ張力が返って仇となる。艦装を装着した私は、潜って敵を探すことさえ叶わない。確か、以前提督が読んでいた漫画では主人公の青年が水中で大弓を射って敵を倒すシーンがあつたが、艦娘の場合、そのような真似は決して出来ないのだ。

「でもね、〃攻撃する〃事と〃戦う〃事は全く違うことって事教えてあげる」

そう、これも提督から教わった事。〃攻撃する〃事と〃戦う〃事は違う。今回の場合、私は決して潜水艦に攻撃することは出来ない。しかし、私はまだ戦う事が出来る。それは、生きて鎮守府に辿り着くこと。

「生きて戻れば、軽巡や駆逐の子達に助けてもらえる。生きて戻れば、また戦える……」

呪文のように唱え、最大速度で海を滑り出す。先行している彩雲隊から送られてくる地形データを元に針路を定めた。艦載機を発艦させた私の航行速度は低速の潜水艦を大きく上回る。普通に逃げればまず追いつかれることはない。とにかく、魚雷の射程から逃げなくては……

その時だ。前方に立つ美しい白波、しかし、明らかに不自然な波が1つこちらへ向けて迫ってくる。

「……危ない!!」

今度は先程と違って距離があつたので身を開くだけでかわせた。しかし前方から魚雷攻撃をされたと言うことは……

「知らない間に囲まれていたのね……いや、やる事は変わらないわ」
今更数が増えたところで何も状況は変わらない。ただ、生き延びて帰ること。今はそれさえ理解出来ていればいい。航行装置は全開、最大速度から落とすつもりは毛頭ない。止まることは即ち死を意味する。

「鎮守府までおよそ6海里……戻るより戦った方が楽ね。ただし……」

“もしさらに敵が現れなければね”と言うセリフを言うことは出来なかった。突如、正面の海中から新たな深海棲艦が現れたから。悪い事は繰り返して起こるもの。“泣きつ面に蜂”とはよく言ったものだと思う。

「……今日は厄日ね」

現れた敵は軽巡クラス。深海棲艦は潜水艦でなくても短距離間であれば自由に潜航することが出来ると聞いていたが、まさに今、その事実確認が出来たというわけだ。全く敵ながら天晴れと賞賛したほどの執念である。

しかし絶望した訳では無い。寧ろこの展開は歓迎すべきものだった。ここまでやって来ることが出来たのだ、この海域でなら、まだ“戦える”。

「……勘違いしないで、〃あなた達にとっての厄日〃だから
軽巡を喰りをつけて殴り倒す。」

「驚いた？ 艦載機を発艦させた空母は無力だと思った？」

自分より大きな凶体をした軽巡を引き上げる。その質量は見た目からは信じられないほど軽かった。

「残念。確かに私は空母だけれども、〃艦娘〃でもあるの。だから……」

柔道の要領で思い切り振りかぶって海上へと投げ出した。

「こんな事も出来るのよ!!」

もちろん、飛んだ先には上空を哨戒させていた九七艦攻が控えている。

「地獄に落ちなさい」

ほぼゼロ距離で発射された魚雷が軽巡に突き刺さる。撃沈どころか、木っ端微塵に消し飛んだだろう。

「戦果確認は彩雲隊……九七艦攻隊は帰投準備に入って……あ、そうそう」

数十メートル先の海中から爆発音が微かに響き、衝撃が足の航行装置に伝わってきた。

「その先〃浅瀬注意〃よ。前方に気をつけてね。それと、あなた達に謝らなくてはならない事があるわ」

乱れた服を整え、軽く敬礼する。

「私にはあなた達に攻撃できない」と言っただわね」

あれは嘘よ

3話 覚悟を決める

——柱島泊地鎮守府工廠

「よっ……と。資材はここで良かったかな？」

「ありがたい、美代くん。後は妖精さんが運んでくれるから任せて大丈夫よ」

鎮守府本館の東、やや横長のコンテナ状の建物の1階に柱島泊地の工廠はある。本館3階の執務室からは徒歩3分と言ったところだ。

「それは良かった……暁ちゃんは大丈夫？ 疲れてない？」

「ちよつと疲れちゃったかしら。でも、まだまだ大丈夫よ」

「いやいや、無理せず休もうよ。レディーにも休息は必要」なんじやなかったつけ？」

「ありがたい、それじゃあ開発任務のノルマをこなしたら、司令官の所でお茶でも入れてもらおうわ。美代くんも一緒にどう？」

「レディーのお誘いとあらば喜んで」
「全く……レディーの扱いが上手なんだから」

苦笑して開発任務の準備に戻る暁ちゃん。こうして笑う横顔を見ていると思ったより大人びていることがわかる。それにもかかわらず子供っぽいイメージが定着しているのは、多分彼女の信念らしい。一人前のレディーにこだわる点と、煽られるとつい見栄を張ってしまう性格のせいだと思われる。

特に姉妹の前だとそれが顕著で、響ちゃんに乘せられ、とんでもない事を言わされては後で真っ赤な顔で「ぶんすか！」するという光景はもう珍しいものではなくなった。でも、責任感の強い彼女の事だから、つい見栄を張ってしまうのも、妹たちにとって頼れるお姉さんでありたい”という願望の現れなのかもしれない。

「提督の入れる紅茶は絶品だからね。今から楽しみだよ。それに、いい加減手品のタネを暴かないと」

「そうね、本当あの司令官は一体どこからあんなもの出してくるのかしら。司令官が着任してからももう何度も見たけれど、何回見ても服の中から出してるように見えるのよね……」

“手品”と言うのは、提督が僕達に紅茶を振舞ってくれる時に決まって見せてくれるものだが、その内容が何とも馬鹿げていて、何も無い、丸腰の状態からティーセットを取り出す”というもの。

普通、手品と言えば “同じ手品を同じ相手に2度見せてはいけない” というのがセオリーだが、提督曰く、

「お前らが相手なら何度見せても見破られる気がしないね」
とのこと。

現に柱島鎮守府所属の全員がかりでも、未だにタネを暴くことが出来ていない。

「でもね、どうも服はトリックに関係ないみたいだよ」

「どうしてわかるの？」

「一昨日僕と提督が白兵戦の練習をしたの覚えてるよね。あの後シャワールームで下着1枚の時に同じ手品をしてもらったんだ」

「……まさか、出来たの？」

「そのまさかだよ。いつも通り、綺麗に手入れされたティーセットが出てきた」

「いつも服から出してるように見えたのは何だったのかしら……まさか、実は司令官はサイボーグで、お腹の中に隠してるとか？」

「まさか、それなら実際に拳を交えた僕が気付いてるはずだよ」

と、口では否定しながらも、あの人の戦歴なら “大怪我を負って全身サイボーグ化手術を受けた” と言われても現実味があると思っゾツとする。

まだ22歳になったばかりだと言っていたけれど、19歳の頃からずっと最前線で戦ってきた人なのだ。その3年間で生命を落とす者もいれば、身体の一部を失う者も沢山いる。

「でも、その仮説はありかもしれない。後で聞いてみようよ」

「そうね……あつ、準備出来たみたい。扉が開くわ」

暁ちゃんが指さす先は工廠に9つある大扉のうちの1つ。9つの大扉の先にはそれぞれ建造、開発、解体のための施設があり、出入口以外の扉は提督あるいは立会艦娘の許可がないと開くことは出来ない。一般人に悪用されることは決してないように配慮されたシス

テムだ。施設の内訳は建造ドックが6、開発施設が1、解体施設が1、出入口が1。建造ドックはうち4つが改装工事が必要な状態で使用不可となっている。

それとは別で更に、解体施設へと繋がる扉も封鎖されている。解体とはつまり、艦娘と艤装のリンクを断ち切り、一般人として生活できるようにするための過程。しかし、山村提督は配下の艦娘を1人たりとも手放すつもりは無いらしく、この施設は必要ないと完全封鎖してしまった。〃何故、解体をそこまで嫌うのか〃と聞いてみたところ、
「艦娘という存在はそもそも、かつての艦艇達の〃海を守りたい〃という感情が意思と身体を持ったものなんだ。胡散臭いことは重々承知だが、現に深海棲艦との戦いから逃げる艦娘は一人もいない。あの心優しい電でさえもだ。そんな艦娘たちを戦線から引きずり下ろす権利は、守られる立場にある人間俺たちに無いはずだ」

と、彼は答えた。しかし、〃それなら、艦娘本人が解体を強く希望した場合はどうするのか〃と聞くと、

「納得出来る理由があればやむを得ないね。まあ一番考えられるのは彼女たちが結婚して円満退職、って流れかな。戦艦や空母は特に、もう年頃の女性な訳だし……」

という苦笑混じりの答えが返ってきた。

とにかく、提督は解体施設を利用する予定は今のところなく封鎖中。実質稼働している扉は4つという訳だ。

「でも……あれ？ あっちの扉は出入口じゃなかったっけ？」

「そうなの？ でも、私は出入口なんて開けてないし……」

工廠のロビーは本当に何も無い。中央に大きな円卓、部屋の端に等間隔で並べられたソファを除いて内装は何も無い。しかも、ソファは左右対象に置かれているため、目印にすることは出来ない。そのため、ロビーの円卓で作業をしていた僕達は出入口がどこかさえ正確に把握出来ないわけである。

しかし、そんなことはこの際どうでもいい。扉の先に立つ人影を見た僕は、まるで何かに弾き飛ばされたかのように駆け出した。夕日を浴びてやや茶色がかって見える黒髪をサイドテールにした長身の

彼女は……

「加賀さん!? どうして……その傷は!」

「暁……憲兵さん……」

「喋らないで! 今ドックに……」

血を滴らせながら立つ加賀さん、柱島泊地鎮守府始まって以来一番の重傷であることは明らかだった。抑えた脇腹は抉れ、血は止まる気配がない。幸い傷はさほど深くはないとは言えど、内蔵をやられていた場合は一刻を争う。しかし、加賀さんを抱えあげた僕の肩に、力のこもった手が置かれた。

「……報告が先よ。ドック入りは後でも出来る」

「そんな、その傷では……」

「そうね、歩くのは辛いわ。だから、どうせ抱えてくれるつもりだったなら、そのまま執務室へ。急いで……お願い……」

本来なら……否、一般人としての感覚なら、例え彼女の要求を無視することになると、このままドックへ向かっただろう。しかし、ここは鎮守府。最前線の軍事施設だ。彼女が持ち帰った報告が戦況を左右する貴重な情報である可能性は十二分にある。海上で何が起こったのか、僕たちは知る由もないが、彼女が瀕死になって命からがら逃げ延びてきた所を見ても何か普通ではないことが起こっているはずだ。

「……わかりました。飛ばしますからちよつと揺れますよ!」

全力で執務室へと駆け出す。提督は今勤務時間だから執務室に居るはずだ。本館の執務室まで、彼女を抱えていけば約5分。

振り向きざま、暁ちゃんに向かって叫ぶ。

「暁ちゃんはドック入りの手続きをお願い! 万が一の時の為に軍医の坂下さんも呼んできて!」

「開発任務は……」

「緊急時により中止! 今回ばかりは仕方ないよ!」

「わかったわ! こっちは任せて!」

先程は不安そうにおどおどしていた暁ちゃんだが、にわかには表情を引き締めたかと思えば、驚くほどの速さでドックへの道を走り出し

た。やる事が明確に把握出来れば行動するのは速いらしい。流石艦娘、と言ったところか。

「暁ちゃんが角を曲がるのを見届け、僕も本格的に走り出す。」

「痛むでしょうが、少し我慢してください」

「大丈夫、構わないわ……だから出来るだけ早く……」

「わかってます」

「大丈夫」と答えた加賀さんの表情は苦痛で満ちていてとても直視できたものではない。女性をこんなに荒っぽく扱うことを強く恥じながら、走り続ける。

「それにしても……一体海上で何があったんです？ あなた相手に近海の深海棲艦が敵うはずもないのに……」

「潜水か、ゲホッ」

「大丈夫ですか!? すみません、もう、喋るな」なんて言っておいて……」

「大丈夫よ……敵は……潜水艦……何とか倒すことは出来たけど……帰投までの航行で血を流しすぎた……」

荒れた呼吸のために途切れ途切れだが、僕が状況を理解するのに必要な情報は伝えてくれた。

「しかし、潜水艦は以前の出撃で駆逐したと聞きましたが……」

「何故また現れたのか」はわからない……でも実際私は奴らに襲われている……」

そう、加賀さんの言う通り、追い払ったはずの潜水艦が再度増殖しだした「原因」はわからない。しかし現実問題、潜水艦が増加している事は確かな「事実」だ。そして、その「事実」は「原因」の時点とは違って物理的な損害を伴ってやって来る。

「もう……着きます……」

「……」

よたよたと自分でも危なかつかしいと思う足取りで3階への階段を登り切る。よろめきそうになる体に鞭打って、あと僅かな道程を走るべく顔を上げた、その時だ。

「……!! 何かあったみたいだな」

探し求めていた彼はそこに居た。しかし、すぐに誰かはわからなかった。別にいつもと違う服装をしている訳では無い。いつもと変わらない、提督に支給される純白の軍服に、同じく純白の布地、真っ黒な鍔に金色の装飾がなされた制帽。しかし、その間に収まった顔が、普段の彼からは想像もできないほど鋭くこちらを覗いている。

「提督……」

「……何がおこったんですか？ 話してください」

提督も、血塗れの加賀さんを見て素早く、彼女のみならずこの柱島泊地鎮守府……いや、柱島近海に大きな脅威が迫っていることを察知したらしい。重症の彼女を見ても動じずに、業務的に事を進めることを決めたようだ。しかし、それを彼が望んでいないことは時々申し訳なさそうに泳ぐ目を見れば明らかだ。

「近海に潜水艦……数は不明……少なくとも3隻以上、航空母艦加賀は……正面海域にて少数の敵艦隊と交戦……これを殲滅するも敵潜水艦より被雷……その後軽巡1隻、潜水艦3隻を殲滅し帰投……以上、報告に……」

そこまで何とか言い終えると、右肩にかかった加賀さんの手から力が抜けた。慌てて呼吸を確認したが、どうやら大量の出血と、報告をし終えた安堵感から気を失ったらしい。ひとまず生命に別状は無いだろう。

「加賀さん……ありがとうございます。ゆっくり休んでください」

提督は帽子を脱いで軽く加賀さんに頭を下げると、僕に向き直った。

「さて、美代。話は聞いたな？ これからお前にも働いてもらうぞ」「敵は潜水艦隊ですね……以前のソナーの開発を進めておいて良かったです」

“潜水艦” という単語を聞くと、提督は更に眉を釣り上げて言った。

「そうだな……それじゃあ美代はこれから加賀さんの入渠手続きを頼む。その後は作戦司令室に来てくれ」

工場を出る前に入渠手続きを頼んだ暁ちゃんの姿が脳裏を掠める。

きつと上手くやってくれているだろう、早く加賀さんを連れて行ってあげなくては。

「……………断だ」

「？」

再び慌ただしく駆け出そうとした時だ、おもむろに階段に座り込んだ提督が何かを呟いた。

「……………油断だ。遅かれ早かれこうなる事は分かっていたのに……………」

「提督……………」

「何も出来なかった。何が図書室だ。彼女だけを危険に晒してまあ良くも呑気に……………」

……………この人は本当にあの「山村中佐」なのだろうか。柔軟な対応力で今日この日まで何の危機もなく鎮守府を守り通してきた我が主は、こんなにも頼りない人であっただろうか。

「……………らしくないですね、提督」

「……………」

黒く沈んだ瞳が一对こちらを力なく見返した。その目は……………助けを求めている。いや、別に根拠がある訳では無い。ただその目は迷子になった子供の目ととてもよく似ている気がしたのだ。彼は出口を見失っている。それならば、僕が出来ることは決まっている。それは、彼の信念を再確認させること。

「“何も出来なかった”なんて甘えた事を言っていてどうするんです。まだ戦いは始まったばかりですよ？」

「……………！」

「その“何か”はこれからすればいい。それを信じて、加賀さんも必死で戦った。そうでしょう？」

「……………」

あくまでも、負の思考から抜け出すのは彼自身にしか出来ないことだ。僕にはその手助けをすることは出来るが、代わってやることは出来ない。こちらが手を差しのべることが出来ても、その手を掴む権利は彼にしか与えられていないのだから。

そして彼は……………掴むことを選んだ。突然帽子を目深に被り直した

かと思うと堪えられないかのように口を抑えて笑い始めた。

……もちろん、いつもの独特な笑い方で

「クツ……ははっ！ 俺らしくもないか！ そうだよな！」

提督は笑いを収めると、先ほどと同じ鋭い表情……いや、先ほどの表情とは違って、自信によって引き締められた、それでいて不敵に口角が持ち上がった表情で立ち上がった。

「怪我人の前で不謹慎だが、幸いまだ誰も死んじやいない。お前の言う通り、今から“何とか”してみせるさ。殴られっぱなしのケンカは気持ちのいいものじゃない」

「その通りです。僕としても、奴らに一杯食わせてやらないと気分が良くありません」

「そうだな、じゃあそつちは頼むぞ。俺は鎮守府にいる艦娘達を集めてくる。これから忙しくなるぞ！」

「了解！」

内心彼の切り替えの速さに驚きながらも、やはりこうでなくては、と言う安心感が満ちてゆくのがわかる。やはり彼には楽しそうに笑って指揮を執る姿が最もよく似合う。

「さあ、僕は僕の仕事をしなくちゃ」

ずいぶんと長話してしまった。大怪我にも関わらずずっと放置していた事を加賀さんは怒るだろうか。まあ何にせよ、彼女には色々申し訳ないことをしてしまったから、今度流行りの“間宮アイス”でも奢ってあげよう。電ちゃんによると意外と甘いものが好きらしいし、きつと喜んでくれるはずだ。

今後への期待と不安も加賀さんと一緒に抱えあげ、ドックへの道を走り出した。

* * *

——数分前、柱島泊地鎮守府医務室

「……誰もいないわね。やっぱり出張かしら」

私、駆逐艦暁は重傷を負った加賀さんの入渠手続きを済ませ、医務

室を訪れていた。まあ手続きと言っても、施設内のコンピュータに艦娘の名前を打ち込んで修復にかかる予想時間を算出し、今後の入渠予定と被っていないか確認するだけなので作業は数分で終わったけれど。

……一般の人の知識であれば、ここで「何故入渠で治癒が可能な艦娘の為に軍医を呼ぶ必要があるのだろう」と疑問を持つだろう。しかし、入渠と艦娘の仕組みは本当に複雑で簡単なものではない。

艦娘の出現から数年、数多の提督が取ったデータを元に研究が進められた結果、どうやら艦娘自身ではなく、「艦装本体」に秘密があるらしいのだ。そして現在軍部関係者の中で最も広く受け入れられている仮説が、

「艦装は常に艦娘の肉体の情報を記録し続けており、戦闘などで大きな損傷をした場合かつ40℃前後の塩水に浸かった場合に、記録された直近の「完全な状態の肉体」の情報を引き出し、それをもとに身体を復元する」というもの。

これだけでもまだ情報不足なのでもう一つ付け加えると、ここでいう「完全な状態の肉体」と言うのはあくまで「肉体と言うパーツで見た時」の「完全」を言うのであって、健康と言う意味で見た時の「完全」では無いということ。

つまり、入渠によって身体は完全に修復する事が可能だが、精神や健康状態まで治すことは出来ないのだ。具体的な例を挙げると、以前電が夏風邪を引いた時、入渠ドックに入っても治すことは出来なかった。ガンなどの肉体に直接的な異変が起こる病気に対しては例外的に効くみたいだけれど、その範囲はごく限られたものだ。

……要するに、私達は加賀さんの身体の修復自体に不安を感じているのではなく、入渠前に怪我が原因で感染症にかかってしまったりすることを懸念しているのだ。私達は艦娘とはいえ陸ではただの人間。病気にだってなるし、その脅威は人間と変わらない。いざかかってしまったら、あとは医者に頼るしか術はないのである。

「医務室にはいないとなると鎮守府にはいない可能性が高いわね……」

美代くん、こうなる事分かっていて「軍医さんと呼んでこい」なんて言ったのかしら……」

柱島泊地鎮守府所属の軍医である坂下大尉は、勝手気ままにぶらつく司令官や隼鷹さんより見つけ出すのが難しい。それは決して彼の勤務態度が悪いからと言うわけではなく、寧ろその逆、彼がとても忙しいからこそ見つけられないのだ。

今から17年前、日本の……いや、世界の人口は深海棲艦出現によって大幅に減少した。特に高齢化の進んでいた日本ではその影響が大きく、深海棲艦最初の侵攻から逃れられなかった高齢者や、中堅労働者層の多くが亡くなった。深海棲艦出現前は46歳ほどだった日本人の平均年齢は今や27歳前後と発展途上国並のレベルまで落ち込み、否が応でも戦線を20〜30代の若者達で支えざるを得なくなった。

……そして、中堅労働者層を失った事による影響は、「医者不足」と言う形で最も如実に現れることになったのである。

坂下大尉は今年47歳。深海棲艦の大侵攻のあった当時30歳であった彼は、深海棲艦によって失われた多くの医者たちの貴重な生き残りなのだ。彼に学ぼうとする医者卵は多く、かなりの頻度で講習に呼ばれているらしい。

またそれだけでなく、軍医は大本営から一般人の診療を受け持つ事を命じられている。憲兵の美代が、一般の警察業務も兼任するのと同様、人員不足のために軍の機関が民間の機関を代行せねばならないのだ。当然坂下大尉を頼る傷病者は増え、仕事は民間の医者よりかなり多いと言える。しかし、彼に「仕事は辛くないのか」と聞くと、

「何、俺は元々人を治せる医者になりたかったんだ。大本営でだから研究続けるよりアずつと生き甲斐を感じるねエ」

とすまし顔で答えるのだ。彼は怠慢な勤務態度を理由に辺境である柱島泊地に左遷されたと着任時の報告書に書いてあったが、それは大本営での仕事が彼の性分に合わなかっただけなのだろうと思う。実際、彼は気だるそうな見た目とは裏腹にかなりフットワークが軽く、彼を待つ傷病人達の為に走り回っている。「適材適所」と言う言

葉があるが、きっと彼にとって柱島はまさに「適所」だったのだろう。柱島に来てからは、何故左遷されたのかわからないほど勤勉に働いている。

そんな医者 of 鑑とも言える坂下大尉だが、一つだけ問題点があるとすれば……

「もう！　なんで肝心な時にいないのよ！」

……本業であるはずの軍医としての仕事が疎かになりがちな所だ。しかし、こればかりは「民間の医療も担当せよ」との命令を出したのが大本営であるし、何よりこれが彼の生き甲斐と言うのであれば、山村司令官の性格上文句を言うことは出来ず、とりあえず彼の好きにやらせていると言う状況だ。

鎮守府にはいないと思うが、念の為コールをかけてみようかと通信室へ向かおうとした時、この部屋のもう一人の主が通りかかった。

「あら……珍しいお客さんね。怪我でもしたかしら？」

エプロン姿にほうきを持って微笑む彼女。坂下大尉、美代くんと共に柱島泊地に配属された軍属の佐々木さんだ。職種は事務官で、主に艦娘が使用している寮の管理をしている。

……しているのだが、彼女はとんでもない事務処理能力の持ち主であり、寮の整備などあつという間に済ませてしまう。『ちよつと掃除してくるわー』と言ったかと思えば、20分程で何食わぬ顔で帰ってきて、しかもあの広い廊下はピカピカになっているのだ。

物理的に不可能な事をやってのけるあたりある意味司令官のマジックに通ずる不思議さがある。実用性が全然違うけれど。

……とまあそんな訳で、彼女は基本的に主が不在である医務室で軍医代行をやっている事が多いのだ。何でも、坂下大尉と長らく付き合っているうちに医療に興味を持ち、数年前に医師免許を取ったのだとか。

「いいえ、加賀さんが重傷で坂下大尉に診てもらいたいの……佐々木さんは見てない？」

「重傷」と言う語を聞くと佐々木さんは医者らしく表情を厳しくした。

「あの人ならまだ出張ね。確か6時頃には帰るって言っていたけれど……急ぎなら私が行きましようか？」

午後6時……時計を見やるとまだ4時45分を少し回ったところだ。このまま坂下大尉を待っていても、良かれ悪かれ、事は済まされている事だろう。

美代くんも「念の為」と言っていたし、佐々木さんだつて医師免許を持っているのだ。別に坂下大尉である必要は必ずしもない。

「それじゃあお願いするわ。着いてきてー！」

「私、外科はあまり得意じゃないのだけれど……でも、小さなレディーのご期待に添えるよう、頑張るわ」

「ありがとう……って小さい言うなー！」

入渠ドックへの元きた道を、今度は二人で走り出した。

4話 追加任務

——午後4時58分、柱島泊地鎮守府入渠ドック

「……あつ来た！ 美代くん、こつちよ！」

「2番ドックだね！ わかった！ 準備は？」

「もう出来てるわ！ 許可が降りてるなら高速修復剤パケツも使える！」

「許可ならもらった！ 可能な限り急いで！」

「わかったわ！ ほら！ 佐々木さんも！」

「これは想像以上ね……」

ドタバタと騒々しく駆け込んできた美代くんを2番ドックへと誘導する。ドックは艦娘にとつてお風呂とほぼ同義であるから、本来ならば裸で入るものだが、美代くんは脱衣所など目に留めることなく通過した。加賀さんが重症だから、と言うのは勿論だが、流石に彼に歳上の女性をを脱がせる度胸はないようだ。

「ごめん、こんなに重症の艦娘を介抱した事なんてないから……湯に浸からせるだけで良いのかな？」

「大丈夫よ。損傷部に湯が触れていけばいいけれど……出来れば肩まで浸からせてあげて。すぐバケツ使用の準備に移るわ」

「わかった……」

大げさに見えるほど優しく加賀さんを浴槽に横たえる美代くんは、形のいい眉をひそめて呟いた。

「それにしても、あの加賀さんがここまでやられるだなんて一体敵はどれほど……」

その真剣な眼差しは確かに加賀さんに対する絶対的な信頼に拠るもので、彼がただ単に同僚として、艦娘としてのみならず、大切な友人として私達を見てくれていることがひしひしと伝わってくる。そもそもこんなことは憲兵である彼にとつて指定業務外の仕事なのだ。それにも関わらず、重症の加賀さんをまるで自分の事のように必死に考えて、走り回ってくれた。本当に、本当に彼が柱島の憲兵でよかつたと思う。

「バケツか……初めて見るけど一体どんなものなんだろう……」

ぼんやりと思いを巡らせていると、美代くんが不安そうに視線を送ってきた。運動や数字には滅法強い彼だが、得体の知れないものに対する恐怖心は人1倍強いようだ。どんな事でも怖いもの知らずで首を突っ込みたがる司令官とは全く逆の性格をしているとも言えるだろう。

「まあ見てて。口で言うよりはずっと早いと思うわ……ほら、もう準備が出来たみたい」

ガコンツと派手な音を立ててドック天井の扉が開いた。現れたワイヤーに吊るされているのは、私達はもう見慣れた“修復”と書かれた緑色のバケツ。しかし、隣を見やると美代くんはまるで初めて車を見た赤ん坊のようにそれに魅入っていた。

「これが高速修復剤……艦娘達の負傷を急速に回復させ、戦線へと復帰させる艦隊維持力の要……」

バケツになみなみと汲まれた緑色の液体が加賀さんの入渠する浴槽に注がれる。すると浴槽上にかけられたタイマーが目まぐるしい勢いで減り出した。それをため息を漏らして見つめる彼とは対照的に、佐々木さんは特に表情を崩さず……いや、さっきより厳しくして浴槽を睨みつけていた。

「佐々木さんは高速修復を見た事があるの？」

「ええ、伊達に長く軍属やってないから……それより見て」

ゆっくりと佐々木さんが加賀さんの方を指さす。高速修復剤によって急速に傷が塞がれていくのが見て取れるが、どこか違和感を感じる。一体何故？ この違和感は……

「加賀さんの表情が和らがない……っ？」

「そう。傷は塞がって意識が戻りつつあるのに、かなり苦しそうな表情をしているわ。私を呼んだのは賢い選択だったかもしれないわね」

タイマーが00:00:00を指すとほぼ同時、3人で加賀さんをドック内に備え付けられたベッド（なんとこれ、脚の向きを変えると担架にもなるらしい）に運ぶ。

「……うあ……暁……？ ここは……」

「良かった。意識は戻ったみたいね」

ベッドに降ろした衝撃で加賀さんが目を覚ました。艦娘が入渠で治せるのは肉体の修復のみという事は既知のことだが、極端な例で言うと修復前の傷が原因で発症した感染症のために2度と目を覚まさなかつた艦娘だっているのだ。

その艦娘はもともと体調が優れない日の出撃だった上に合併症まで引き起こしたというから加賀さんとは状況がまるで違うが、それでも方が一、加賀さんが目を覚まさないなんて事になれば鎮守府の戦力は大きく低下するし、何より山村司令官が一体どう思うか……

もし加賀さんが復帰できなければ、彼なら責任を感じて司令官を辞めかねないだろう。そんな事はして欲しくない。この柱島泊地鎮守府は彼を核^{コア}にして成り立っていると云っても過言ではないのだ。確かに他の仲間達も柱島艦隊の重要な構成員である事に間違いはないのだけれど、彼だけは決して欠けてはいけない存在だということもまた、私達の共通認識なのだ。そう、彼が居なくては……

ふと目を上げると佐々木さんの茶がかかった黒い瞳がこちらを覗き込んでいた。その目はなんと見えばいいか、この緊迫した場にふさわしくないおどけた雰囲気を持ったものだった。

「ど、どうしたの?」

「今提督さんの事考えてたでしょ? 当たってる?」

「どうして?」

「いいえ、何でもないわ……それじゃ、始めるわよ。かなり痛いだろうけど我慢してね、加賀ちゃん」

佐々木さんは「大人の微笑」とでも形容したくなる程柔らかい笑いを収めると、すつと目を細め「医書の表情」をその顔に浮かべた。「腹部の外傷が原因となると……ここはどうかしら?」

「う……それほど痛くは……」

「じゃあこうすれば?」

「痛ッ! うぐああああ!!」

佐々木さんが無造作に……少なくとも私にはそう見えた手つきで抑えたポイント。医学の心得がない私にはさっぱりわからなかったけれど、佐々木さんが何か動きを加えると加賀さんは悲痛そうな叫び

を上げた。よく目を凝らすと、どうやらそのポイントを上から押さえつけているらしい。よく観察すると様々な疑問が産まれてきた。

「何で……押しした時じゃなくて引いた時に痛みが来るの……？ 腹部の病気なら普通刺激すれば痛はずなのに……」

すると、押し黙って診察を見ていた美代くんが呟いた。

「これはもしかして……『ブルンベルグ徴候』と呼ばれるものでしょうか？」

「そうね。腹膜炎になりかけていると見ていいと思うわ。内臓の損傷と処置が遅れた事が原因かしら」

「それは……治るの？」

「この状態なら手術は要らないわね。抗生物質の投薬で治せるわ。ただし、1週間は絶対安静。戦うなんて以ての外よ」

「1週間……」

「加賀さんが治る」ということが分かってほっと胸をなでおろすのも束の間、下された診断は柱島泊地艦隊にとって無慈悲なものだった。

「加賀さんが1週間も動けないだなんて……」

私、暁は駆逐艦だから航空戦には詳しくない。でも、艦装スロットの艦載機数がそのまま空戦能力、攻撃力、さらには鎮守府の防御力に影響する事くらいはわかる。柱島の空母はまだ隼鷹さんがいるが、彼女1人の制空能力では、新海域の制圧どころか鎮守府正面海域からの航空攻撃を防ぐ事さえ難しいだろう。

「でも良かったわ。すくなくとも命に関わることは無いからね。美代くん、そのガーゼ取ってくれる？」

「どうぞ。氷とベッドの用意をした方がいいですね。先に準備してきます」

「あら、よくわかってるじゃない。これから高熱が出るだろうから頼もうと思っていたの」

「わっ私はどうすれば……」

佐々木さんと美代くんがてきぱきと環境を整えていくのを見て私はただおろおろしていることしか出来なかった。私だって、加賀さん

の力になりたいのに……

すると、佐々木さんが真剣そうに（それでもやや笑いを含みながら）言った。

「暁ちゃんには1番大切な仕事があるじゃない」

「えっ?」

答えを求めて美代くんを見ると、彼は笑って答えた。

「加賀さんがやられたのは潜水艦、それも複数体。暁ちゃん、君の艦種は?」

「決まってるじゃない、駆逐艦……あつ」

「ほら、早く提督の所へ行つてあげなよ。きっとそわそわして待つてるよ」

「そうね、緊急時こそレディーの助けが必要ですよ!」

駆け出そうとした矢先、ふと足を止める。振り返ると美代くんが笑いを噛み殺そうと必死になっているのが見えた。

「何を笑っているの?」

「いや……何でもないよ」

「……そう? それじゃあ行つてくるわ!」

今度こそ、鎮守府本館への道を走り出す。響と雷が遠征に出ている都合上、対潜戦闘力は1人でも多く欲しいところだろう。早く司令官の元へいかなきゃ……

* * *

——鎮守府本館1階艦隊司令室

「……よし、だいたい揃ったな。後は暁だけか」

「俺が呼んでこようか? それとも、このまま加賀の介抱に就かせるか?」

「いや、多分美代あたりが気を利かせてよこしてくれるだろう。その内……ほらな」

ドタバタと慌ただしく、当鎮守府の現在最高練度を誇る少女が駆け込んでくる。

「遅くなつてごめんなさい！ 敵潜水艦は？」

「まだ大丈夫だ。潜航速度はすつとろい奴らだから迎撃準備にかかる時間はたつぷりある」

「良かった……」

へたりと座り込む暁。対して長い距離ではないが、全力で走つてきたらしい。

暁が揃ったところで改めて作戦司令室に集まった艦娘達を見回す。練度順に暁、電、木曾、隼鷹、金剛、足柄の6人。丁度1個艦隊分の人数だ。

本来ならここに阿武隈、皐月、文月、望月、響、雷の6人を加えて2個艦隊分の戦力が動かせる筈だったが、阿武隈と睦月型の3人は南方へ向かうタンカーの護衛任務で遠征に行つてしまい、響と雷は崎矢提督の元へ演出へ向かつている。今日のような対潜水艦戦闘を見越して演出にやったのだが、どうもタイミング悪く彼女たちの不在時に敵潜水艦がしかけて来たらしい。

「大本営から早速指令が出された。『鎮守府正面海域に多数の潜水艦を発見、これを貴艦隊をもって撃滅せよ』との事だ」

「つまり、対潜哨戒任務というわけだな」

「そうなるな。まあこれを見てくれ」

大本営からの指令書に添付されていた1枚の紙を指揮卓に広げる。

「これは……」

「見ての通りだ。この近海の海図、それも対潜水艦戦を見越して改変されている。どうやら大本営は今回の侵攻を危険視しているらしくてな、鎮守府正面海域の危険度を1から5に引き上げて新たに1―5海域が設置された」

「1―5……!?!?」

「Extra Operation……追加任務つて事訊だ。大本営も中々面倒な事をしてくれる」

「まあそう言うな提督。今までは武勲を立てることさえ出来ないほど平和だったんだ。こう言っちゃ不謹慎だが、久しぶりの戦いにゾクゾクしてきた！」

「平和が一番なんだけどなあ……」

木曾は自他ともに認める武闘派だ。近隣の敵艦は駆逐して最近出撃が少なかったこともあり、フラストレーションが溜まっているのだろう。今から出撃が待ち遠しいのもわかる。でも、やっぱり出撃が無いことが鎮守府として最もいい事だと思っただけだ。いくら身体が修復出来るとはいえ、彼女たちをただいたずらに傷つけるような出撃は絶対に嫌だ。

「まあ善し悪しはともかく、敵が眼前に迫っているのは事実。迎撃せざるを得ない」

「もちろん、全員出撃するのよね？ 私は重巡だから対潜攻撃は出来ないけれど……」

「勿論だ足柄。暁、電、木曾の3人が爆雷攻撃に集中できるように近く敵戦力を相手してもらおう。加賀さん曰く敵は増援を呼んだらしいからな。対潜哨戒任務とはいえ、水上艦に対する注意を怠ってはならない」

足柄は策士ではなく戦士タイプの人だ。難しい小細工は苦手な分、弱点を見抜く力も、それを冷静に判断する力も持っている。しかし、性質上どうしてもタイムマンでしかポテンシャルが引き出されにくい。だから今回のような彼女の苦手とする多方面からの防御はいい訓練になるだろう。

「私達に任せるネー！ 水上艦は全部追い払うワ！」

「頼もしいな。しかし、後で説明するが、深追いだけは決してするな。あくまで今回の出撃の目的は潜水艦の駆逐だ。水上艦の処理は後で戦力が整ってからでもできる」

金剛は普段の言動からは考えにくいバランスタイプ。今はまだ練度が低いから器用貧乏な印象が強いが、彼女には第二改装という大きな強みがある。もちろん、今でも柱島艦隊唯一の戦艦として立派に働いてくれている。彼女に関しては、他の娘たちとは違ってとやかく口出しせずに戦わせた方が良さだろうか。

「よし、対水上艦隊の指揮は金剛、お前に任せる。対潜水艦部隊は木曾だ。今回は鎮守府正面海域での作戦だからある程度の指示は俺が出

すが、現場の変化によつてはお前達にすべて任せることになるかも知れん」

「構わない。腕がなるぜ！」

「Follow me！ 皆私についてくるネー！」

実戦指揮官の2人は気合十分。練度はまだ心許ないが、加賀によれば敵にeliteやflagshipはいないとのこと。そうそう簡単にやられるとも思わない。

「よし、各自艤装の準備に移れ！ 既に追加艤装はスロットに装着させてある！」

「いつの間に……いや、そんなこと今はどうでもいいな。暁！ 電！ 出撃港に向かうぞ！」

「私たちも向かうネー！ 足柄！ 隼鷹！」

ドタバタと駆け出す艦娘達。騒々しい現場だが、それがかえって俺の感覚を刺激する。

艦隊司令官たるもの、戦いには常に冷めた目を向けるべきであるが、胸を内側から打ち付ける鼓動がそれを許さない。何より、感情の高ぶりを抑えきれない自分がここにいるのだ。

「クツクツ……さて、敵さんたちをどう追いつめたものか……」

* * *

——数分後、柱島鎮守府出撃港

「……これは！」

「どうした、隼鷹？」

「足柄、これを見てくんないかい……いや、あんたにはわからないか」「なに？ 艦載機の事かしら？」

隼鷹が装着した艤装パーツをこちらに手渡す。どうやら戦闘機のようなだが、普段観測機しか扱わない私には何故隼鷹が驚くのかはわからなかった。

「これがどうかしたの？」

「前まで使ってた零戦とは塗装の色が違うだろう。これは52型だ」

「52型……改良型ってことかしら？」

「簡単に言えばそうなるね。あの提督……ふらふら遊んでばっかかと思っていたけれど、きっちり戦力増強はしてみたんだ」

そう感心したようにメンテナンスする隼鷹を見てふと私も艤装に目をやる。

「私の主砲はいつもと同じ、20.3cm砲ね……あらっ？」

主砲の確認と一緒に自然に覗いた第3スロット。そこにあったのは……

「これは……『零偵』じゃない!？」

普段ならここやに収まっているはずの零偵——正称零式艦上偵察機。しかし、今私の手に収まっているこれは明らかに違う艦載機だった。

「これも強化の一環、ってことかしら」

「おっ『零観』じゃないか。そいつは速いよー。零偵使ってたあんたならびつくりするかも知れないね」

「……速くなるのはいいけれど扱いにくそうね」

「まあ艦娘なんだ。実践で慣れればいいさ」

隼鷹の言う通り、今は時間が無い。実践で慣れるより他ないだろう。

ふと周りを見渡すと、皆追加艤装に何らかの強化がなされているようだった。聞くところによると、暁、電、木曾の対潜水艦部隊3人は九三式水中聴音機が三式水中聴音機に、金剛は私と同じように零偵が零観に兵装変更されており、これまでより有利に戦闘を進められることに間違いなさそうだった。しかし……

「これ……私達に扱えるかしら……」

暁が不安そうに呟く。当然だ。私と金剛は形は違えど水上機、操作に大きな変化は無いけれど、彼女達3人の兵装は扱いが以前と全く異なったものになるからだ。

九三式水中聴音機はいわゆる『パッシブソナー』と言い、水中で起こる音を拾って敵を感知するが、三式水中聴音機は『アクティブソナー』、つまり、こちらから音波を出し、その反射を利用して敵を探

知するのだ。

パッシブソナーには敵が動かずにじっとしている場合に発見できないという弱点があり、それを改善した三式水中聴音機に換装されたと言うことは強化には違いないとはいえ、アクティブソナーを初めて使う彼女たちに実践で慣れる、と言うのはいささか酷ではないかとも思う。

「大丈夫なのです。司令官さんはきっと私達ならすぐに使えるようになる」と信じてこれを積んでくれたのです」

「そうだぞ暁。こんなもん俺だって使うのは初めてさ。皆で慣れていこうぜ」

「うん……」

まあ木曾がいるから大丈夫ね。彼女はああ見えて年下の娘たちの扱いが凄く上手だ。末っ子という事もあつて妹に憧れがあつたのだろうか。まるで姉のように駆逐の娘たちに慕われている。普段は口数の少ない響や望月も、彼女相手になら饒舌になるほどだ。電もお姉ちゃんを励まそうと一生懸命な事だし、暁の不安も多分すぐに無くなることだろう。

『あー、あー、こちら作戦司令室。応答願う』

「艦隊旗艦、金剛。こちら、全艦娘出撃可能状態で待機中。いつでも出れるワ！」

『よし、編成を発表するよ……と言っても、艦種クラス順に並べただけだけどね』

やや腑抜けた声の出撃前コールがかかる。彼が今マイクの前で頭をかいている姿が目には浮かぶようだ。なんでも第六駆逐隊の子達いわく、彼は困った事があるとすぐに頭をかく癖があるらしい。

出撃港壁面に取り付けられた液晶に編成が映し出される。

第1艦隊

旗艦 金剛 Lv. 13

二番艦 足柄 Lv. 12

三番艦 隼鷹 Lv. 15

四番艦 木曾 Lv. 17

五番艦 暁 L.V. 18

六番艦 電 L.V. 17

まだ誰も第一改装を終えていない状態での出撃。提督は、「本当は脆い駆逐、軽巡の3人だけでも改装してから応戦したかった」と廊下で愚痴を漏らしていたが、時間がそれを許さなかった。

まあそれでも、近海に現れた敵は全て通常種、elite戦艦でも現れない限りは、改装前の私達の火力で何とか応じることは出来るだろう。

『今回の作戦は基本的に対潜部隊を中央に据えた輪形陣で行ってもらう』

気を取り直したように声を引き締めた提督の声が、より精密な指示を出していく。それにすかさず食いついたのは電。

「何故輪形陣なのですか？ 潜水艦への攻撃は単横陣による絨毯爆撃が最も効果的なのです。輪形陣によって中途半端に砲撃、対潜火力を落としてしまうと水上と水中から挟み撃ちにされてしまうのです」

そういえば電は戦術論に興味がある、とかこの前話してくれた。それを提督から教わっているということも。生徒として、疑問に思ったことは全部質問して、吸収するつもりなのだろう。

『確かにその脅威は大きい。しかしだ。対潜艦が3人しかいない今、単横陣はどれだけ効果を発揮できる？ 潜水艦は倒せるだろうが、水上艦に押されてジリ貧になるのは確実だ。それより、輪形陣の形を思い出してみる。何か見えてこないか？』

「……あ」

『……気づいたみたいだな。陣形指示はお前に任せただぞ』

……輪形陣の形？

電にはわかったみたいだけど、私には何のことやら全くわからなかった。艦娘として、また重巡として、こういうことも分かるようにならなくてはいけないのに情けない。

しかし、逆に苦手な役回りを託せる仲間がいる、という事でもあるのかもしれないわね。電はずいぶんと年下ではあるけれど、砲よりアタマを使って艦隊の勝利に大きく貢献してくれる自慢の仲間だ。彼

女のような娘達がいるのだから、私は私なりの戦い方をすればいい、
という気さえしてくる。

『……さて、もつとのんびり紅茶でも飲んでいたいところだが残念な
がら敵がかなり接近してきている。そろそろ出撃といこうか』

「Hey! 提督ウ! 帰ったら皆でTea Timeはどうかナ
?」

『たっぷりスコーン焼いて待つといてやるよ』

提督の苦笑いから発されたであろう声で、逆に皆の気持ちが引き締
まる。帰ったらティータイム。それはきつと“全員生きて帰れ”と
いう思いも少なからずあるはずだと思うのは私の勘違いだろうか。

『さあ、長らく出撃のなかつた柱島艦隊が一体どれだけ成長したのか。
敵さんたちに見せてやろうぜ』

「Roger! さあ、出撃するヨー!」

1-5海域Extra Operation、鎮守府近海対潜哨

戒”作戦が始動した。

5話 守るために戦う

——鎮守府正面海域海上、第3海域

「……………いい風ね」

「どこかで聞いたような台詞だな。暁、誰かの受け売りか？」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

柱島泊地第一艦隊、近海の敵艦隊を搜索中。

「加賀が交戦したのは第7海域。鎮守府正面海域と南西諸島海域を結ぶ航路だ」

「そうね。敵が機動部隊や水雷戦隊ならいざ知らず、潜水艦隊ですもの。侵攻してきていると言ってもせいぜい第5海域くらいでしょう」

鎮守府正面海域はさらに細かく8つの区画分けがされています。母港前から南西諸島海域に向かって昇順に並んだこの区画は、敵の侵攻速度の測定や、大まかな位置の特定に役立っているのです。

「しかし、このソナー本当に便利だな。九十三式とは大違いだ」

「そうね。思ってたよりずっと扱いも簡単だし、性能だけじゃなくて操作性も上がってるみたいね」

「大きさも小振りになって、私達でも扱いやすいのです」

使ってみてはつきりとわかった装備の強化。もちろん、私たち自身の能力だって上がっているのです。負けるわけにはいかないのです。

艦載機が改良型に変わった対水上艦隊の3人も、きつと新しい装備について語らっているのだろうと視線を送ると、そこには厳しい表情で言葉を交わす3人の姿があった。

「そろそろ第4海域に入るデース。接敵はまだ出来てマセーンけど、念の為追加艤装の展開は済ませておくネー！」

「隼鷹！ あなたの索敵機に報告は入ったかしら？」

「……………ないね。こりや返って不気味だよ。もう第6海域まで彩雲を飛ばしてるってのに、はぐれ駆逐の一体もいやしない」

「そうね……………私の零観もまだ一体も見つけられていないわ。これって……………」

「私達掃討艦隊を恐れて逃げたか、あるいは主力が出てくるのを舌な

めずりして隠れているか。まあ二択だろうね」

「出来れば前者であれば楽なんだけど」

「全くだよ」

どうやら接敵がまだ出来ていないらしいのです。私達駆逐艦は水偵を積めないのが彼女達の焦りはわからないのですけれど、いつもならもう起こってるはずの出来事が起こらないのです。誰でも不安になるでしょう。

その時、けたたましい音とともに鎮守府からの無線呼び出しがかかりました。

「こちら、艦隊旗艦金剛デース。何かありましたカー？」

『なあ……もしかしてお前達、まだ索敵には成功していないのか？』

「どうしたんデースか？ 確かにまだ接敵できていマセーンが……」

無線機から流れ出たのは、何時もの陽気な司令官が放ったとは思えないほど冷たく乾いた声。

暁ちゃん、木曾さん、私の3人はこの声を何度か聴いている。私達の正体について崎矢提督から聞いた時と同じ。つまり、彼に余裕がなくなつた時の声。

『してやられた……艦隊！ 直ちに鎮守府方面へ引き返せ！』

「Why!?! 敵はどうするんデースか！ このまま何もせずには帰投は出来マセーン！」

『違う！ その敵が鎮守府正面……第2海域に現れた！』

「……！」

第2海域……!? もう鎮守府の目の前なのです！

慌てた表情で木曾さんが無線機に叫びます。

「おい！ どういう事だ！ 潜水艦の速力じゃそんな所まで行けるはずがない！」

『潜水艦じゃない！ 機動部隊だ！ 奴らは加賀に撃退されたあと空母と高速の護衛艦でここまで急行してきたらしい』

「そんな馬鹿な……機動部隊だと……!?!」

『とにかく早く戻ってきてくれ！ 俺達軍人は構わんが、近隣の住民達が危険だ！』

機動部隊ですって？ このタイミングで空母が出てくるなんて……

隼鷹さんの方を見やると、珍しく神妙な表情で海を見つめています。その方向は……第2海域。

「……アタシなら戦うよ、提督。加賀に比べたら戦力不足だろうけどね」

『頼む。今ばかりはお前にやってもらうしかない。だが本来お前の戦うべきではない状況だ。無理だけはしないでくれ』

「了解。帰投後に宴するなら許してやんよ」

『絶対開いてやる。だから……』

「だから、生きて帰ってこい。全員分かってるよ、ワガママ提督さんよ」

『つたく……誰がワガママだ』

不機嫌そうに呟く司令官さんですが、否定しないところを見ると、自分の命令がワガママである事は承知の上でやっているようです。

『おおまかな指揮は俺が直接出す。微調整は金剛に任せるから臨機応変に対応してくれ』

「俺達対潜部隊はどうする？ ソナーと爆雷しか積んでいないぞ」

『それは大問題だな。ここまで考えて敵機動部隊が動いているとすれば恐ろしい……』

司令官さんが恐れるのはもつともなことなのです。敵は複数の潜水艦で加賀さんと接触しました。ですから当然こちらは対潜部隊を出さなくてはならない。

それを見越して潜水艦部隊を撤退させ、代わりに水上艦隊で最強と言われる空母機動部隊を鎮守府正面に急行させてきたとすれば。

もし、敵機動部隊がこれを指示されて行ったとすれば。

それは深海棲艦側にも高度な知識を持った“提督”に近しい存在がある事を意味します。

これまでも高い知能のある深海棲艦が戦術及び戦略、つまり“作戦”を立てた上で艦隊を率いて攻め込んでくる、という事は度々ありましたが、どれも“作戦らしいもの”レベルのもので、戦略戦、戦術戦

のスペシャリストである提督達と渡り合えるものではありませんでした。

しかし、今戦っている敵のまだ見ぬ指揮官は、戦闘のプロフェツシヨナルである山村司令官を初手において出し抜いたのです。

もし、本当にそんな存在があるのなら、それは私達人間サイドの者達にとって新たな、そして強大な敵となる事でしょう。

『だとすると相当厄介な……まあ仕方ない、対潜部隊はとりあえず艦隊の中央へ。スマートな戦法ではないが、基本艀装の砲で装甲の薄い艦を狙ってくれ』

「わかった。だが、戦果は期待するなよ」

『当然だ。元はと言えば俺のミスだからな』

やる事がはつきりと定められれば、艦娘達の動きは素早いのです。金剛さんがすぐさま速力を上げる。

「Follow me! 付いて来るネー!」

見たところ最大速度、いくら私の速度が彼女を上回っているとはいえ、ぼんやりしているとあつという間に置いていかれることでしょう。

「電の本気を見るのですっ!」

「デーン! あまり気張ると危ないヨー!」

「でん!」じゃないのです!」

その時、再度無線機から呼び出しがかかります。

『各員、とりあえずは金剛の指揮で敵艦隊に遭遇次第戦闘開始。鎮守府は任せろ。俺たちで支えてみせる』

「支えるったって……防御方法なんてありやしないだろ」

『んく木曾ちゃん俺の底力知らねえな? まあ見てろよ』

「一体何を……?」

『俺が戦う』のさ。んじや、そっちは任せたよ』

瞬間、艦隊全員の表情が固まりました。あの金剛さんでさえ、いつもの笑顔が崩れるほどの衝撃。『戦う?』? 彼が?」

真っ先に反応したのは木曾さん。

「戦うだと……? 彼奴は人間だぞ?! 無事で済むはずがない! 今

すぐにも連れ戻さなければ……」

「ダメですネ。向こうの無線が応答拒否に設定されていマス」

「クソッ！ あのカツコつけが！」

そう吐き捨てて速力を更に上げる木曾さん。でも、彼女にもきつとわかつているのです。

提督が重症の加賀さんを防衛に出撃させることは決してないこと。そして、彼が考え無しに突発的な行動を取ることは決してないと。

艦隊のみんなに伴って速力を上げる中、思い出すのは数週間前の司令官との会話。

* * *

——数週間前 深夜、柱島泊地執務室

「深海棲艦は上位個体になればなるほどより容姿が人型に近づくことから、知能もそれに伴って高くなっていくという事は既に海軍関係者の間では通説になっているな」

「空母ヲ級、戦艦夕級など、ほぼ完全に人型を取っている種は、人を超える知能を持つ個体もいるのではないかとも言われていますね……」
「これ、字面だけだとあんまり危機感感じないかもしれないけどとんでもない事だからなあ」

「それはまたどう言う……」

すると司令官さんは苦笑して両手を拡げて見せました。

「ストップ、電。落ち着いて、乗り出しすぎ」

我に帰ってよくよく見ると、私は執務卓に大きく乗り出し、司令官さんは大きく身体を仰け反らせていました。

「はわわ！ ごめんなさい、なのです！」

「謝らなくてもいいよ。ほら、紅茶でも飲みなさい」

「ありがとうございます……って何処から出したのです!？」

「教えな——い」

差し出されたのはぴかぴかに磨かれたティーセットと、完璧に注が

れた紅茶。この色は、既にミルクと砂糖も入れてあるようなのです。

「美味しいのです……」

「好みはもう覚えたよ。いい塩梅だろ？」

「確かに凄く美味しいのですけど、一体いつの間に……」

「だからあ、前にもマジックの応用だつて言つたじゃない」

確かに以前から司令官さんはこの手品を披露していました。でも、鎮守府所属の誰もタネを見破れなかったのです。

一瞬の間に、まるで魔法でも使つたかのように現れるティーセットは今や司令官の鉄板ネタになつてしまいました。宴会の時などにするのは別に構いませんが、今回のように所構わずするものだから落ち着かないのです。

「それにしても不自然すぎませんか？ 1回瞬きする間に淹れたての紅茶が出てくるなんて物理的におかしいのです」

「まあまあそれは置いといて、知能のある深海棲艦の話だっけ？」

強引に話を引き戻す司令官さん。自分が不利なるとすぐに逃げるのはズルいのです。

「あえて質問を返すけど、仮に深海棲艦に知能があつた時、電は何を1番脅威に思うと思う？」

さつきまでのおちやらかなった雰囲気嘘のような真面目な表情に変わった司令官さん。

彼は以前、崎矢提督が来訪した時に、〃崎矢先輩は戦略を語る時は先生の顔になる〃と、嬉しそうに話していましたが、その〃先生の顔〃というのは弟子である司令官さんにも受け継がれているのです。生徒である私を楽しそうに見つめています。

「仮に深海棲艦に知能があつたとすれば、最も脅威になるのは……敵に戦略的な動きが出てくる事では無いでしょうか？」

それに、司令官さんは満足気に頷き、私の頭を撫でました。これは私を、いえ、私達暁型姉妹を褒める時の彼の癖。

「うん、いい答えだ。敵と戦略戦を戦わなくてはならなくなるのはかなりキツイ。これまでは戦略的に圧倒的有利な状況で戦ってきたわけだからね」

「前提条件から覆されてしまう分、被害も大きいと思うのです」
「それに関しては俺も全く同じ意見だ。だが、もう一つ心配な要素がある」

もう一つ……？

「それは一体何なのです？」

「色々言い方はあるだろうが、一言で言うなら『情報漏洩』ってところだな」

なるほど、人語を解する個体によってこちらの作戦が傍受される可能性がある、ということですね。

「でも、それなら心配ないのです。通信ネットワークの強化やジャミングで対策は出来るのです」

「単純に傍受されるだけならね」

ニヤリと笑いを返されてしまいました。これではまるで司令官さんが敵みたいなのです。

「更に怖いのは直接潜入されてしまうこと……まあ言わばスパイだね」

「と、言いますと？」

「どうなると思う？ 自分がスパイになったと思つて考えるんだ」

この問にもまた質問返し。司令官さんは私に自分の頭で考える事を求めているのです。

「ええと、まず大本営に潜り込むことは現実的ではないのです。なので潜入しやすい鎮守府に潜り込んだと仮定します」

「いい仮定だ。確かに大本営に潜り込まれる時は、日本が負ける時だろうからね。続けて」

「そうですね……例えば修復材をただの水に入れ替えてドック入りを阻むとか、資材を少しずつ捨てていってジリ貧に追い込むとか、それから……」

「電は優しすぎよ」

司令官さんは優しく笑って立ち上がり、私のおでこに指を突きつけました。

「俺なら直接提督に銃を突きつけてバーン……で終わりだろうね。仮

に失敗しても死ぬのは一人だけ、被害は最小限だ」

……確かに、血も涙もありませんが鎮守府は司令塔を失い、崩壊するでしょう。鎮守府というのは、指揮系統の混乱を防ぐために上下関係は厳しく分けられています。

そういった規律を嫌う山村司令官の下だからこそ、私たち艦娘や他の職員さんも気兼ねなく動けるわけですが、それは生活面での話。

戦闘という観点から見ると、山村司令官の次に階級が高いのは戦闘指揮経験のない阪下大尉なのです。つまり、柱島泊地艦隊は、山村司令官一人を失えば機能しなくなってしまう。もちろん私達艦娘もある程度戦術指揮は出来ませんが、戦局を見渡す事の出来る司令官を欠くことは大きなデイスアドバンテージになります。

「電、君は優しすぎるよ」

呟くように、司令官さんが繰り返します。

「響から聞いたよ。〃戦闘が終わる度に電が悲しそうな顔をする〃つてね」

「響ちゃんがそんな事を……」

「深くは聞かない。でもね、戦争をするという事は、〃いかに味方陣営を生かし、敵陣営を殺すか〃という事であることを忘れちゃいけないよ」

「……」

わかっているのです。

戦うことは敵を殺すこと。戦争とは生命を奪い合う無慈悲なゲームのこと。

わかっているのです。生半可な気持ちでは生き残れないということとは。

「今日はもう寝ようか」

語を継げない私を優しく撫でてくれる司令官さん。彼と私で決定的に違うことは、〃敵の死を割り切れるかどうか〃。

この問題に自分の中で決着を付けなくては、彼に追いつくことは出来ない。

「……司令官さん」

「……なんだい？」

部屋を出ようとする彼を引き止める。今なら言える。彼にだからこそ言える。姉妹は勿論信頼しているけれど、彼女たちに話してどうにかなる問題ではないのです。

「初めて出撃した時、私たちは砲撃で軽巡を沈めました」

「あの時は無茶をさせちゃったね。その時にどうかしたの？」

「あの時、すぐに重巡迎撃に動こうとした時に、軽巡の呻き声が聞こえたのです」

「……それで？」

「振り返ったら軽巡がもう半分位沈んでいたのです。でも、その顔が……」

ずっと、ずっと忘れられない。あの光景。

「泣いているように見えたのです……」

「……」

出撃の度に頭を掠めるあの表情。

「私はこれまで何度也被弾しました。どれもとっても痛かったのです。でも、深海棲艦だって痛いはずなのです。沈むとしたら尚更……だから……」

もし私が今沈むとしたら、きっと彼女のように無念のうちに涙を流すだろうから。

「だから、沈んだ敵も出来れば助けたいのです……」

甘い考えなのは承知なのです。今は戦時中、私達は兵士。互いに殺しあわねばならない立場にあります。それなのに、敵の生命を救いたいと言うのです。

「戦争には勝ちたいけど、生命は助けたいって……おかしいですか？」

こんな弱気な台詞を吐くなんて、兵士としてあってはならないことなのです。でも、司令官さんは怒るでもなく、またさっきのように撫でてくれるのでした。

「俺はね。人を守るために軍人になったんだ。軍人は人を殺して出世する職業なのにね、おかしいだろ？」

「でも、今の司令官さんは深海棲艦と戦っているのです」

「今は、ね」

力無く笑う司令官さん。『今は』と言ったところを見ると、彼も過去に何か辛いものを背負っているのでは無いでしょうか。でも、彼はそれを乗り越えて今を柱島泊地で戦っています。

「ちなみに、美代は憲兵の横暴で母を失ったにも関わらず今はあいつ自身が憲兵だ。これまたおかしいだろ？」

「美代くんそんな過去が……」

「人間、何か一つの目標を達成するためにはいくつかの矛盾にぶつかるものだよ。寧ろそっちの方が自然だ。だけどね」

突然司令官さんは、自身の胸を強く拳で叩きました。

「美代は芯の通った精神と、憲兵組織を内部から変えるという大きな目標がある。その為に、あいつは仇とも言える憲兵に自らなることを受け入れた。なよなよしく見えるが、あいつは心が強い」

「彼にそんな目標が……」

秘書官である私達をいつも手伝ってくれる柱島泊地の憲兵兼副官の美代くん。凄く仕事が出来るといつも頼りなさそうに頭をかいているあの美代くんが、こんな複雑な事情を抱えていたなんて初耳なのです。

「人間生きていれば矛盾だらけなのさ。俺も美代も、それを割り切つて今を生きている。電はどうだ？」

「私は……」

私は……彼らのように生きれているだろうか？

「……なんてね」

司令官さんは一つ笑うと、ドアノブに手をかけました。

「こうやって悩むことができる時点で、電はもう充分この矛盾に向き合っているよ。それは多分、他の艦娘も一緒だろうね」

「私は、まだ……」

「俺は、敵を助ける兵士がいてもいいんじゃないかと思うよ。それはその兵士が、自分の抱える矛盾と向き合った結果なんだから」

自分の抱えてる矛盾と向き合った結果……

「ゆっくり考えればいいよ。あわてて答えを出せるような問題でもな

いさ」

* * *

「……つたく。やるからには成功させるんだろうな……」

木曾さんの声で我に返る。

「木曾さん……」

「大丈夫だよ。あの提督は5回は殺さないと思わないようなタフな男だからね」

「そうそう。あの人が死ぬのは私たちが死んだあとよ。今は彼より自分達の心配をするべきね」

年長者の隼鷹さんと足柄さんもそう言っているのです。そう、相手は機動部隊。下手をすると彼より先に私たちがやられるかもしれないのです。

「……電の本気を見るのです」

「電？ 置いていくわよ！」

「今行くのです」

それは、悩み続けた『過去の電』への決別の言葉。

「私には守らなくてはいけない人がいる。その為には、戦わなくてはいけない」

敵も出来れば助けたい。その想いは変わることは無いのです。では、それでいて何故戦場に立っているのか。そう問われれば、今の私なら迷うことなく答えられる。

「電は、大切な人たちを守るために戦うのです……！」

自分の中にも、司令官さんや美代くんのような芯になるものが産まれたことを確かに実感した。

* * *

——ほぼ同時刻、柱島泊地鎮守府作戦司令室

ガチャリといかにもな音を立てて定位置に戻った受話器。これが

ら酷使することになるだろうが、ひとまずこの機器がすべき仕事は終えた。

「さて、重ね重ね申し訳ないですが、もう少しだけ付き合ってもらいますよ。加賀さん」

「ええ、構わないわ」

加賀さんを支えつつ足を向けるのは柱島泊地の工廠。いつもなら明石が離れの詰所にいるはずだが、今回は美代も暁も彼女に知らせる余裕すらなかったらしい。先程直接コールをかけると慌てて無線機の調整に入ってくれた。

「……さて、重症患者を呼び出したのには訳があります」

「わかってるわ」

そう、彼女に無理をさせてまで連れてきたのには訳がある。

無人の工廠の戸を開け、建造ドックの前へ立つ。

「私が1週間戦えない状況で敵機動部隊が現れた。これに対応するためには航空戦力の増強が必要……そういう事ね？」

「御名答」

つまり、加賀さんが変わる航空戦力、すなわち空母クラスの艦娘を建造する。それしか今は突破口が見当たらない。

「でも、正規空母の建造時間は平均5時間。軽空母でも2時間はかかるわ。今から建造しても……」

「残念ながら、今回は呑気に待っている暇はありません。ですが、あなたの事です。知っているでしょう？」

「高速建造材」を

「……！ 成程、あれを使うのね」

「高速建造材」。『バケツ』の異名をとる高速修復材とならぶ不思議な資材。

建造担当の妖精さんが装備し、建造ドックに高熱の火炎を吹き付けることで、どういうメカニズムかはわからないが、建造時間の大幅短縮を実現させる夢の様な技術である。

これもまた高速修復材と同様に、見た目から『バーナー』の異名をとっている。

「資材投入は351/30/502/351。結構重たいですが、こ

の際資材なんて気にしちゃいけませんね」

「……一般的な空母レシピアじゃないわね。数もキリが悪いし」

「ええ、ひねくれ者なのであえて崩してみました。まあ願掛けみたいなものですよ」

「全くこんな時に……」

病気による痛みの影響もあつてか加賀さんは不機嫌そうだ。いや、あるいは彼女自身の責任感のせいだろうか。

彼女の事だ。自分が始めた戦いを途中で新参の空母に引き継ぐのは相当悔しいと思っっているだろう。

「悔しいでしょうが我慢して下さい。加賀さんには復帰後に病人の方がマシに思えるほど働いていただくので」

「酷い。美代君が黙っていないわよ」

「ひっ、それは怖い」

柱島泊地の憲兵である美代は誰の目から見ても好青年だが、時々頭が固いというか、悪くいえば馬鹿真面目だ。俺もこの1ヶ月と少しの間に既に何度もお咎めを貰っている。下手な事をすればいくら仲が良いとはいええ、容赦なく大本営に突き出されるだろう。

まあこれまで美代に怒られたのは全部俺のセクハラじみた行動が原因なので何も言えない、というかこの程度で済んで良かったと思うべきか。別の鎮守府なら上官の転覆を狙う輩たちにあつという間に陥れられていたところだろう。

とは言え、それらは「艦娘側の配慮不足も大いに影響した事故」である事がほとんどであつたし、美代も大目に見てくれたつといいと思うのだ。

「……変態」

「へっ?」

不味い、顔に出ているらしい。加賀さんに関してはまだ何も起こつてはいないが、不慮の事故には十分に注意しておいた方が良い気がする。部下の矢で射殺されるのは御免だ。

「全く……いつもいつもよく懲りないわね」

「まあ男ですし、若いですし」

「冗談じゃなくて……いつもあれだけ手痛い反撃されてるのによく辞めずにいるわよねってこと」

「いや……そういうのほとんど駆逐の子達が無頓着すぎるせいで起きてますからね。不可抗力というか」

「あなたがロリコンなのも駆逐艦達あの子達に意識が足りないのも分かってるけど、もう少し回避する努力をしなさい」

「なっ！ ロリコ……それ本気で言ってます？」

「言われなくなかったら行動で示す事ね」

痛いところを……そもそもこの鎮守府には駆逐艦娘が多いのだから割合的に事故率も高くなるのも仕方無い事だろう。

「まあ持って生まれたラッキースケベ属性は大切にしていこうと思いますよ」

「またすぐそう……いや、もういいわ。あなたに言っても無駄ね」

やれやれ、という声まで聞こえそうなほど面倒臭そうに首を振る加賀さん。これは黙認という事だろうか。

「許してませんか」

「あれ、声に出てました？」

「あなたの考えてることくらいわかるわ」

「恥ずかしいなあ。夫婦みたいだ」

「馬鹿な事言わないで。あなたの思考がピンク色一色だからわかりやすいだけよ」

むう……これでも結構真面目な事も考えているんだけどな。特に今は……

「……！ 建造が終了したわ」

「おっと、もうそんなに経ちましたか。加賀さんは新しい子のメンタルケアをお願いします。建造直後は不安定になる子が多いですから」

「わかってるわ。戦力になるといいけれど」

* * *

「彩雲の索敵網に引つかかった！ 敵艦隊編成……正規空母2、重巡2、駆逐2！ 正規空母を中心に輪形陣を取っている！」

「正規空母2!? そんな……あなたの零戦で制空出来るの？」

「まず難しいだろうね。まあやるだけやってみるさ」

隼鷹は山村提督によく似ている。不利な状況下でも不敵な笑みを浮かべて、それでいて己のやるべき事をしっかりと把握している。しかし今回ばかりは彼女の額に汗が伝っているのが見えた。余程辛い状況だろうが、今は彼女1人の制空力に頼るしかない。

「さあ、仕掛けるよ。アンタ達も対空砲火の準備を！ 呑気してる余裕なんてないよ！」

「任せるネー！ 対空砲用意！」

金剛の掛け声で全員が対空砲を構え直す。毎度大袈裟な掛け声だとは思うが、彼女のお陰でこの艦隊は混乱したり、迷ったりすることがない。ブレない彼女の精神は確かに柱島艦隊の支えになっている。

「第一陣……来るよ！」

隼鷹が声を上げるや否や、やって来たのは敵艦載機。かなりの高高度からやって来たらしい。ほぼ直上だった。

「やっぱり零戦18機じゃあ制空権争いは互角がやっただ！ 落とすきれない分は……避ける！」

「避ける？ この状態でか!？」

珍しく冷静な木曾が抗議の声を上げた。無理もない。ソナーしか積んでいない彼女の不安は計り知れない。もちろん、暁と電も。

私も20・3cm連装砲で可能な限りの敵機を落としているが、これはもともと対空兵器ではない。落とせる量など高が知れている。本当に避けるしかない、と言った状況だ。その時、隣にいた電がつぶやいた。

「射線を見るのです」

「えっ？」

「魚雷は少しだけ私たちの艦装に反応しますが、高速で打ち出された場合ほとんど直線にしか進みません。だから射線さえ抑えれば……」

電は、至近の敵艦攻が投下した魚雷……ではなく、海上を睨みつけ

るや否や大きく身をかわした。

「……ほら、怖くないのです」

成程、流石は水雷戦隊。木曾や暁もまるで魚雷の方が避けていくかのように魚雷を回避している。私たち中量重量艦が砲撃による攻撃を重視するが故に疎かにしがちな雷撃に対する対策を彼女達は持っている。

「ぐうう……ナメないで！ ワタシはこの程度で……やられないワ！」

隣では魚雷回避に失敗した金剛が重たい音を立てて動く主砲を、第2海域に小さな点となって見える敵艦隊に向けていた。彼女は戦艦、魚雷が当たったが小破で済んだらしい。

「射程内……入ったワ！ 砲撃開始！」

腹にずつしり響く音を立てて金剛の35.6cm連装砲が火を噴いた。彼女の主砲の射程は重巡の私よりずっと長い。そして敵艦隊には戦艦がない。つまり、両艦隊合わせて最も長射程なのが金剛という訳だ。こちらから先制攻撃を仕掛けることが出来る。

「バーニング……ラアアアヴツ！ 鎮守府には近づかせないネー！」

「足柄！ そろそろ中距離砲撃戦の距離だ！ 砲を構えろ！」

「ええ、わかつてる！」

木曾の喚起に応じ、砲を構える。もう中距離砲撃戦、私の距離だ。

「10門の主砲は伊達じゃないのよ！」

私の砲は20.3cm連装砲。流石に火力は金剛の大口徑主砲に劣るが、駆逐艦程度なら難なく吹き飛ばす破壊力を持っている。

「んーナイスショットだ足柄。彩雲が駆逐級の撃沈を確認したよ」

「よし！ 弾幕を張るわよ！」

「足柄さん、かっこいいのです！」

「暁たちも負けてられないわ！」

知らぬ間に艦隊は既に近距離砲撃戦の距離。暁と電も加え、全員で砲弾の雨を降らせる。

「Muh……流石に弾着観測が出来ないと辛いネ……」

「すまないね。今の制空状況じゃやっぱり無理か」

「辛いわね……とても観測機を飛ばせる制空状況じゃないわ」

零観は優秀な偵察機だ。生半可な戦闘機に落とされるような機体ではないが流石に制空拮抗状態で発艦させる訳にはいかない。ただいたずらに機体を消耗させるのは、長期戦を見越せば賢い戦い方とは言えないだろう。

だがそれを考慮した上でも私たちの方が優勢。恐らく敵は手負いの加賀を仕留めるために最速で出撃してきた。装備も編成もごちゃまぜの雑多艦隊。先程から連携も何も見えない。

制空に關しても、隼鷹曰く敵の艦戦は間に合わせの最弱クラスのものらしい。普通に考えて、正規空母2隻の艦隊と軽空母1隻の艦隊が制空拮抗状態になるのは不自然だ。敵の練度がいかに低いかかわかるだろう。気づけば敵は残り1隻にまで減っていた。

「重巡撃沈！ さあ！ どんどんいくネー！」

「後は旗艦のヲ級だけだ！ しかも中破！ 仕留めろ足柄！」
「任せて！」

20.3cm連装砲をゆつくりと、そして確実にヲ級へ向ける。奴は中破状態、もう戦えない、言わばただのカカシ。

しかし、何かが引つかかる。一般に艦娘と深海棲艦は表裏一体の存在。それぞれ正と負の感情の具現だと言われている。つまり、奴らは知能こそ低くとも、私達と同様感情を持つはず。それなのに何故……
「……何故、そんな目をするの？」

死を目前としているのに、その恐怖に臆するでもなく、まるでこちらを挑発するような、
「これで終わりと思うなよ」とでも言いたそう
なこの不敵な目は……

「……立派ね。その態度、美しいとさえ思えるわ」
「……」

「この艦隊で良く戦ったと思うわ。だけど、もう海へ還りなさい」
引き金を引く、脳天に向かって放たれた弾丸が、彼女の頭を貫くまでの数瞬。彼女は確かに「言葉を発した」。

ヲロカモノメ

「愚か者め」。確かにそう言った。

「きつ、聞いた!? 今の!」

「ああ、確かに……」

「聞いたのです! でも、言語を使いこなす深海棲艦なんて前例がありません!」

「少なくとも、暁たちが倒してきた駆逐、軽巡クラスは呻き声を上げる位で言葉なんて……」

これまで深海棲艦同士はテレパシーのようなもので簡単な連携を取ることはわかっていたが、所謂“人間語”を使ってコミュニケーションを取ることが出来る個体は発見されたことが無かった。

しかし、以前から存在が噂されていた言語を解する個体が、今、この海上で発見された。しかも、その個体は通常級ノーマルである。

それらが意味することは、言語を理解するほど高度な知能を持つ個体群が、人間語によってネットワークを形成しているということ。下位個体でさえ人間語を解するのだから、この個体より上位に当たる個体も全て言語を解すると考える方が自然だろう。

そう言えば以前提督と電が、〃深海棲艦サイドにも提督に近い存在があり、高度な知能をもつ個体が戦術指揮を取っているのではないか〃、という内容について夜通し議論していた事があった。

「……! 嘘だろ……」

色々と考えを巡らせていると、警報音と共に隼鷹が絶望したような声を上げた。

「3時の方向に新たな敵艦隊発見……正規空母2、戦艦1、重巡1、駆逐2!」

「もう1艦隊。しかも正規空母に戦艦だと……!?! さつきより重い編成じゃないか!」

「もう燃料も弾薬も少ないワ……これじゃあ……」

艦隊が半ば諦めたような空気に支配された時だ、電が声を張り上げた。

「残り弾薬が少ないのです。いつそ魚雷で攻撃してみたらどうでしょう!?!」

「それよ! 私達には魚雷があるじゃない!」

電の提案でみんなの表情に僅かに光が差した。確かに、先程の戦闘では魚雷を使わなかった。

砲戦に偏重した性能の私の艦装では大したダメージは与えられないだろうが、雷装値の高い水雷部隊3人なら、充分有効打となりうるだろう。

「OK、キソーは水雷部隊を率いて前へ！ 全速力で敵艦隊の至近まで寄って雷撃！ 私達は砲撃で援護するヨ！」

「伸ばすな！ 木曾だ木曾！」

「木曾だキソー？」

「木曾だ！」

こんな切羽詰まった状況下だったけれど、水上部隊と水雷部隊それぞれの旗艦による茶番で私達は笑った。

何時だったか提督は言った。 “辛い時ほど不敵に笑え”。みんなもきつと思いついて出しているはずだ。優勢だろうと劣勢だろうと、いつも笑って、相手を疲れさせろ。こちらが疲れを見せたら敵の勢いに吞まれてしまうと。

冷静さを欠いてはいけない。ヤケを起こしてもいけない。闘志が燃え上がっていても、アタマまで熱くなつてはいけない。笑ってココロを落ち着けて、冷えたアタマで考える。

「まだまだいけるわ！ ナメないで！」

みんなが笑っていられる間は大丈夫。まだまだ戦える。

5. 5話 呉鎮守府

——柱島艦隊が潜水艦迎撃のために出撃した数時間前

「さて、改めて。遠路はるばるようこそ、呉鎮守府へ」

「遠路、と言うほどでも無いけどねー!」

雷がそう言うと、崎矢提督はいたずらっぽく笑った。山村提督がよくなる、あの笑みだ。

「そうかいそうかい、元気で結構。こいつなんて最近は近海の遠征でさえ面倒だ面倒だと煩くてな……痛てえっ!」

「余計なこと言わない」

「はい……」

隣につきそう彼の奥さん……つまり正規空母、飛龍さんから肘打ちが入る。日本国中に名の轟く崎矢少将殿も飛龍さんには頭が上がるまいようだ。

「コホン……それでだな。今回は急遽君たちに呉の潜水艦隊と演習してもらおう事になった。それはいいね?」

「Da(うん)。了解したよ」

崎矢提督は背が高い。柱島の山村提督は170cm台後半。憲兵の美代君は180cm超えと、2人とも高身長だったが、そんなものじゃない。190cmを軽く超えているだろうと思われる。

しかし、前述の二人のように大きく感じないのはその細さ故だろうか。飛龍さん曰く、70kg台であると言う。もはや病気では無い心配してしまう細さだ。

「うん?どうした。不思議そうな顔して」

私の視線に気づいたようだ。いや、まあじつと見つめ続ければいつかは気づくだろう。

「俺の顔になにか付いてる?」

「いや、崎矢少将は背が高いね。話してると首が痛くなるよ」

「おっと、すまないね。これでいいかな」

提督は膝を抱えるようにして私を覗き込むような姿勢をとった。その顔は、いたずらっぽく微笑んでいる。

「流石にこれは恥ずかしいな」

「そりやそうだ。で、何か用かな？」

「演習の相手だよ。私達は2人。まさか6人フルメンバーの潜水艦を相手するとは思えないからね、どんな編成なのか興味があるのさ」

「意外とせっかちな所があるねキミ」

クスクスと笑う提督。だがそれはすぐに彼らしい、いたずらっぽい笑顔に変わった。

「ご期待に添えず申し訳ないが、今回の演習は対多数を想定したものだ。従って、君たちにはうちの潜水艦及び潜水空母6人を相手してもらおう」

「……え？」

驚いた。崎矢提督麾下の潜水艦隊だ。練度は低く見積もっても80、いや90でもおかしくはない。

その潜水艦達6人、つまり一個艦隊を練度20にも届かない私達2人で相手しろと言うのだ。どう考えても普通じゃない。

きつと私は悲痛な表情をしていたのだろう。見かねたように提督が付け足した。

「もちろんハンデは付けるさ。潜水艦隊側にはうちの工作艦^{明石}特製〃練度抑制装置〃を付けさせる」

そう言つて崎矢提督が鞆から取り出したのはサイコロ程のサイズの立方体。人間である彼が持つていられるということは、妖精さんの不可解な力を利用した装置ではないらしい。

「これを艦娘の艤装核のポケットに取り付けることで、艤装の出力を抑制できる……まあ一言でいえばリミッターだな」

「とんでもないネーミングセンスだね」

あまりに率直な名前に思わず返した言葉に、崎矢提督はやや拗ねたように応じた。

「む、名付け親は夕張なんだが……まあいい。名前はともかく、艤装核に直接連結させるデリケートなものだから開発にはとてつもない時間が必要だったんだ。今ここで取り出すまでに色んな人間の努力がこのサイコロに込められてきた事を分かってくれ」

「……軽はずみな事を言つてすまなかつた」

提督は笑つて手を振つた。

「こちらこそ。そんな改まった話なんてするつもりは無かつた……あ、そうだ。この装置はうちが独自異で開発したものなんだ。だから、決して口外しないように」

「そんなこと私達に話しても良かったの？」

私と提督が話している間ずっと黙り込んでいた雷がここぞとばかりに問い返す。長いこと私が話していたので退屈していたのだろう。

「まあ君達や君達の司令官が漏らすとは思わないし、いつか量産に成功したら柱島にも必要数送ろうと思つていた」

それはありがたい。制御装置があれば、練度が離れた艦娘同士の演習もより効率が良くなるだろう。しかし、隣を歩く雷の顔はどうにも腑に落ちないといったものだった。

「ねえ、そんな便利なものを開発したのに、なんで大本営に報告しないの？ きつと他の提督達の役に立つのに……」

提督は少し驚いたように雷を見つめると、悲しそうな表情で話し始めた。

「新技術なんてものは軽々しく扱つていいものではないのさ。利は必ず害を伴う」

「害つて……」

「簡単な話だ。コイツにちよいと手を加えてやれば、君達を人間以下の戦闘力にまで弱体化させることだって可能。つまり、形式上海軍の指揮下に入つているとはいえ、対等な協力関係にある君達を服従させることも可能になる。お高く止まった政府の連中共が、艦娘を完全な支配下に置きたがつてるのはよく知つてるからな」

そう吐き捨てる様に一息で言い切ると、彼は不機嫌そうに煙草を取り出して火をつけた。彼が喫煙者だと言うことは少し意外だった。

日本国の将官らしからぬ安物のライターは駆逐艦がやったらしいデコレーションで埋め尽くされ、何とも持ちにくそうだ。きつと彼はプレゼントに貰つたソレを大切に、大切に使つているのだろう。

彼が部下に愛されていることはよく分かるし、知つてもいたが、彼

が上官。更にいえば文官に嫌悪感を抱いているということは知らなかった。

そういえば山村司令官も政府について悪評を垂れていた事があったが、その思想も彼から受け継がれたものなのかもしれない。

「さて、余談が過ぎたな。そろそろ演習場だ。飛龍、演習艦隊は？」

これまでずっと無言だった飛龍さん。話に参加したくなかったのではなく、ずっと事務仕事を続けていたようだ。歩きながらは危ないと思ったが、その手はしっかりと崎矢提督の腕に回されていたので何も言わないでおくことにした。

「問題ないわ。ちよつと168がやる気が無いみたいだけど、概ね体調に問題なし。何時でも出れるわ」

「うーん、168の演習嫌いはまだ治らないのか。出撃はあんなに楽しそうに出るのに……まあ間宮アイスでも奢ってやるか」

「私も食べたい！」

「だめ！ 昨日外食連れてってやっただろう？」

「ちえー」

目の前で展開される夫婦漫才に思わず雷に向って肩をすくめてみたら、向こうも同じ仕草でこちらを見ていた。姉妹共々、こんな夫婦に憧れはしてもなりはしないと心に決めた。

* * *

—— 呉鎮守府演習場出撃港

「これはすごい。三式対潜セットに探照灯、見張り員、水上爆撃機、オートジャイロ……対潜装備は何でもありそうだ」

「すごい！ ねえねえ、これ使ってみてもいい？」

雷が嬉しそうに二式爆雷を取り出す。今年開発に成功した新兵装なんだそうだ。

「ここにある物は基本何を使ってももらっても構わない。普段使い慣れている兵装を使うもよし、より性能の高い新兵装を試すもよしだ」

「私はベターに三式セットにしようかな……って雷、なんだいそれは

？」

「えへへ、これ一回装備してみたかったんだー！」

雷の基本艤装の肩部分に連結された装備……これは……

「ん？ ああ、それか。ええと、なんと叫ぶたかな……」

「22号対水上電探改四」

すかさず飛龍さんのサポートが入る。

「そう、それだ。小型の水上電探では最高峰の精度を誇る。量産は未だに成功していないからうちにもまだ3台しかないんだ」

「まあ貴方達駆逐艦が戦闘に出る時は基本対空電探の方が採用されるだろうけどね。さ、早く準備なさい。そんなに時間がある訳でも無いのよ」

「はい」

* * *

——その頃、柱島鎮守府

「ん？」

「どうした、提督」

「いや、何でもない。ふとあいつらが気になっただけ」

「ああ、響と雷か。まあ響はもちろん、雷もああ見えてしっかりしてるから大丈夫さ」

木曾は男らしい言動からは想像出来ないほど面倒見がいい。俺よりずっと彼女たちの事は把握出来ているだろう。その木曾が言うのだ。きつと大丈夫。

「それより、さつきから何作ってるんだ？」

「ん？ ああ、これかい？ ティーフインカクテルだよ。ティーリキュールはストレートでも美味しいが、ちよつとミルクを足すとこれがまた最高なんだ」

「お昼からお酒なのですか……まあ司令官らしいと言えばそうですけれど」

電が飽きたような声を上げる。ちよつと前までは飲むとする

たびに止めに入られたものだが、最近は諦められたのか、飽きられる程度で済んでいる。

「ティーリキュールと言いますが、普段司令官さんが紅茶にブランデーを注いでいるのとは違うのですか？」

「違う違う。全く別のものだよ。あれは紅茶、これはお酒。出汁巻きと目玉焼きくらいには違うね」

「例えが全くわからないのです」

「ははは、そうかそうか……はい、ミルクティー」

「やれやれなのです、とでも言いたげに首を振る電に素早くティーセットを差し出す。ミルク2杯、砂糖3個が彼女の好み。」

「……ありがとう、なのです」

「木曾には緑茶な」

「突然お洒落のおの字も無くなったな。まあいいが……」

口ではああ言っているが、実は木曾はコーヒーも紅茶も苦手らしい。無理に勧めるよりも、普段飲みなれているものの方がいいだろう。いずれは彼女の好みも探らなくては……

「それにしても……お前今どうやってこれ出したんだ？ 手元にはティーセットしか残ってねえし、いきなりこんな温かい茶が出るなんて……」

「うん、そりや気になるだろうな。ちなみに木曾、この質問はお前で1人目だ」

「11人」

「それだけやってまだタネがバレてないのですか……」

「どうやら木曾は俺の特技を知らなかったらしい。彼女とは紅茶よりも酒を飲むことの方が多から不思議なことでもないが。」

「俺の特技だよ。手品の技術を応用して瞬時に望みの飲み物を給仕する。仕組みを見破った者には有給1週間をやる約束になってるから、興味があるならタネ探してもするといいいよ」

「それまた御大層な……で、まだ11人全員が見破れずにいると」

「そういう訳なのです」

「まあそんなことより早く飲みなよ。冷めちゃうぞ」

呆れたような、圧倒されたような、やや毒気の抜けた顔で木曾が首を振って見せた。

「おいしいのです」

「んっ、普通に美味しい」

「よかったよかった。さて、何をしてたんだっけな……」

いけない、気を抜きすぎて忘れてしまった。

「海図の整理、なのですよ。部屋の一角に海図をまとめて保存するって、言い出したのは司令官さんなのです」

「そうだった。悪い悪い」

あわてて海図を数枚拾い上げる。これは……鎮守府正面海域のものだ。興味深そうに木曾が覗き込んでくる。

「お前、これ読めるのか？」

「当たり前だ。一応士官学校出てるんだぜ？ 最低限度指揮に必要な能力は持ち合わせてるよ」

「へえ、俺も読めないことはないが……まあ出来れば見たくないな」「それはまた何故？」

木曾はしかめっ面で腕組みすると呆れ口調のまま続けた。

「海図は戦術戦よりも戦略戦において重要なシロモノだ。つまり、運用の責任は指揮官……つまり提督、お前にあるはずだろう？」

「ごもつとも。お前達が海図とにらめっこせずに済むように艦隊を動かすのが俺の仕事だ」

思わずため息をつく。木曾はよくこの世が見えているというか、核心を理解している。いつもブレない価値観、それに基づいた判断力は信頼しているが、その分かかなりの合理主義者だ。彼女の取る行動、思考に無駄はない。

いや、語弊がある。〃合理主義者になれる素質〃を持っている、と言った方が正しいだろう。彼女は義務的に合理主義を取っているが、決してそれを好ましく思っていないからだ。

ある意味、日本人らしい仕事の割り切り方だと思う。今の木曾の姿は正しく〃キャリアアウーマン〃というやつだろう。

「ほーら、分かったら仕事だ仕事。ぐうたら酒飲むためにここに来た

訳じゃないんだろう？」

「へいへーい」

訂正、やっぱり合理主義者かもしれない

* * *

——呉鎮守府演習場

「……っ！ やられた、どうしてこんなに……!!」

崎矢少将率いる呉艦隊、その潜水艦部隊。日本中に名の知れた名艦隊であるが、正直ここまでとは思っても寄らなかつた。

「私は南を見張る！ 雷は北だ！ 死角を作ったらやられる！」

「わかつてる！ わかつてるのに……」

そう、〃わかつているのに〃恐ろしい。本来潜水艦というものは相手に気づかれず接近し、不意討ちの一撃を喰らわせることを基本スタンスとしている。

潜水艦は何処にいるのか、何をしているのか、何時動くのか、そもそも何隻いるのか、進軍したのか、撤退したのか。その全て情報が相手に知られる事はなく、協力無比な武器になる。

故に潜水艦は、その存在を認識された瞬間、その脅威が大幅に減衰してしまう。情報を武器として戦場の駆け引きを戦う艦種なのだから、情報が知られる事は即ち槍兵が槍を、弓兵が弓を折られることに等しい。

今回の演習のように、予め敵の存在を認識した上での戦いなど、本来ならば私たちの圧倒的な有利。しかも対潜装備をフル装備している、むしろ負ける要素の方が少ない。

〃それなのに〃だ。字面だけを見ればこんなにも私達が有利なのに、現実私たちはどこから飛んでくるとも知れない魚雷に身動きが取れずにいる。

「敵は東の岩陰に1人、対角に2人、北と南にそれぞれ1人。残る1人は不明……」

「完全に包囲されてるわね……それに、なんて戦にくい地形なの！」

全然ソナーが役に立たないじゃない！」

「それを含めて出し抜かれたんだ。知らず知らずのうちに押し込まれていたんだろう」

私達がいる海域は、ちようど柱島の沖のように複数の岩礁、浅瀬のある比較的波が穏やかな海域。潜水艦に「隠れてくれ」と言わんばかりの障害物だらけだ。

「いいかい、雷。私達は今、ちようど敵が組んだ輪形陣の真ん中に閉じ込められたような状態だ。おまけに1人は位置を把握出来ていない」
こくりと頷く雷。近接戦闘となると頼もしい大暴れを見せてくれる彼女だが、こと情報戦となると大人しい。

「無難に考えて包囲が最も薄い所を突破し、離脱後に1人ずつ相手をしたいところだ」

「でも、その『包囲が薄い点』が全くわからない……」

あえて答えず、目で肯定の意を示す。そうだ、一体どこが薄いのがわからない。

これが実際の艦隊戦だった場合、私達は単純に敵の頭数が少ない地点を狙って突破を試みただろう。だが、私達は艦娘。しかも敵は6人の小隊規模。

各地点の戦力は敵個々の戦闘力に依存する事になるが、私達は彼女達の力を知らない。

「強行突破するとして、それが可能なのは大まかに東西南北の4方向。中途半端に包囲の間を抜けようとすれば、挟まれて一瞬でお陀仏だろうね」

「誰とも戦わず逃げるんじゃないやなくて、あえて1人と対峙することで、挟み撃ちを防ぐのね?」

「その通りだ。東西南北に布陣する敵のいずれか一方を正面から叩き、殲滅する」

そうすればその場の戦闘では2：1の人数有利を取れる。残り三方向からの救援は、距離的に間に合わない。上手く行けば突破できるはずだ。

ただし、4方向のいずれを攻めたものか……

「私達を中心にちょうど北、東、南に1人ずつ、西に2人。無難に考えて東に逃げるのがベストだと思うけど……」

「思うけど……何?」

そう、さつきから気になっていたこと。

「……奇妙に思わないかい? これだけ岩礁があるのに、敵6人の内5人は隠れようもしない。常にソナーで捉えられる位置だ」

「……それがどうかしたの?」

「彼女達は崎矢少将の指揮下で経験を積んだ、まさに熟練兵だ。そんな彼女達があえて姿を晒してるのは、手加減をしているか、あるいは……」

「あるいは、〃相手の虚を作り出すため〃」

一瞬、全身が凍りついた。何故って……

「私達の作戦を完璧に看破した事は褒めてあげる。でも遅すぎるわ、わかりやすく誘ったんだからあと3分半は早く気付きなさい。実践なら死んでたわね」

あろうことか、私と雷の背後から敵が現れたから!

「雷! 爆雷投射を……」

「だから、見てから反応してたら遅いって言ってるの!」

そう叫ぶなり、目に焼き付くようなピンク髪を持つ少女……潜水艦伊168は身を翻した。背中の魚雷発射管からは何も発射されない。彼女は一体何を……

私の頭が働いたのもそこまでだった。

「きゃー!」

「うぐう……!」

目がちらつく程の閃光と爆風。しかし不思議と痛みは全くない。機装から流れ出す機械音を私は理解出来ずに立ち尽くした。

『駆逐艦響、駆逐艦雷、轟沈判定。兵装の戦闘機能をロックします。即座に演習海域を離脱してください。繰り返します……』

「轟沈判定……」

雷と顔を見合わせるが、彼女も私と似たりよつたりで、こちらを見つめる目は忙しなく、口が開きっぱなしだ。

呆ける私たちを他所に、伊168は勝ち誇るでもなく通信機を取り出した。

「報告。伊168、駆逐艦響、雷の2名を撃破。これより帰投します」

* * *

——呉鎮守府執務室

「たはははは、負けちまったか！」

「かすり傷ひとつ与えられなかった……せつかく演習に応じてもらったのに、申し訳ない……」

「浮上してくるまで気付くことも出来なかった……」

雷が悔しそうに地団駄を踏んでいる。五感に優れた彼女は、潜伏する敵の察知にかけてはかなり自信があったらしい、先程からずっとこの調子だ。

「イムヤは手加減つてもものを知らないからな。まあこうなる事は予想していた」

崎矢少将もお人が悪い。

「ま、これでよく分かっただろう？ あいつらの強さは、練度に依存していない」

「そうだ、彼女たちは例の『練度抑制装置』なるものを装着して戦っていたのだ。」

練度とはすなわち、艦娘の伎倆や経験値に合わせて、艦装が徐々にリミッターを外していくシステム。前線で艦装が記録しうる限界値近くまで経験を積んだ彼女たちの練度は50、60などと生温いものでは無い。恐らく80……いや、90を越えていることだろう。

その彼女たちは今回、練度を抑制した状態で私たちと戦い、完封した。つまり、完全に技術、経験の差で敗北したのだ。

「ここまで明確な差があると、流石に落ち込むな」

「そんな事言うな。あいつらより強い潜水艦隊は早々いないし、あいつらと同レベルの敵と渡り合う技術を盗ませるために君たちを呼んだんだぜ？」

「そう……そうよね！ 私たちならやれるわ！」

「その意気だ……とここで」

やや忙しなく立ち上がる少将。そう言えば、先程から彼の半身が見当たらない。が、ふと表情を緩めるとまた椅子に座り直した。

「……いや、大丈夫か」

「何がだい？」

「足音だ。この歩調と音の響きは間違いなく……」

バンツ、と高らかな音を立ててドアが開いた。

「大変よあなた……じゃなくて提督！」

駆け込んできたのは勿論飛龍さん。

「すごいわ！ 足音だけでわかるなんて、流石ね！」

「伊達に夫やってないからなー。まあ執務室で何年も働いてると自然と身に付くものだが……」

「あれっ、なんでそんなキラキラした目でこっちを見るの……？ あ

あいやいや、そんな場合じゃなくて！」

飛龍さんはキョトンと立ち尽くしたかと思えば大慌てで一枚の紙片を差し出した。節操がないようにも思うが、艦娘らしい切り替えの速さだ。

「何だこれは」

「加賀さんからの報告書！ ああもうあの人几帳面に書き込むから

……ほら！ ここ見てここ！」

飛龍さんが指し示す文を覗き込む。

「……！ 崎矢少将！」

目に飛び込んできたのは、飛龍さんが大雑把に引いたマーカーで塗りつぶされた文

〃柱島泊地鎮守府正面海域に敵影を確認。担当鎮守府の艦隊の出撃、及び交戦を確認。救援の必要を認める〃

「つかー！ してやられた！ まさかこんなに早いとはな……」

「崎矢提督？」

崎矢提督はその長身を翻し、制帽を直して私たちに向き合った。

「いいかい、今日君たちが呉に来たのは〃柱島泊地近海に増えつつあ

る潜水艦への対抗戦力を育てるため」という事はさつきも言ったね？」

彼らしくない、やや焦りを孕んだ表情が問いただす。その時、私の頭をひとつの可能性が掠めた

「その〃潜水艦隊がもう柱島を襲っている……？」

「ご名答。いや、めでたくもないが……これは俺の過失もある。直ちに救援の艦隊をよこそう。君たちも同行してくれるね？」

答えはもちろん肯定。柱島泊地は私たちの家だ。私たちが行かなくてどうするというのが。雷の方を見ても、異論はなさそうだ

「よし、至急山村に連絡を。敵の編成と状況だけでも聞き出せ」

「もうやってるわよ！　でもあの子全然出てくれなくて……」

「ああもう仕方ない！　今居る艦娘のリストをよこせ！」

飛龍さんから提督へ、艦隊編成用の端末が投げられる。こんな重要な機器を投げるなんて褒められたものでは無いが、まるで練習したかのように美しく繋がったパスに思わず見とれた。

「旗艦を榛名、旗下霧島、雲龍、天城、潮、島風。以上6名で支援艦隊を編成しろ！　島風は艦隊に先行して最速で向かわせろ！　到着次第偵察、様子を見て交戦させるんだ！」

「了解！　装備は!？」

「汎用があるだろう、それに従え！」

「了解！」

鋭い指示を飛ばす崎矢提督は、おもむろに動きを止めるところちらに向き直った。

「悪いが君たちに護衛を付ける余裕はなさそうだ。さつき言った支援艦隊と併走して交戦海域に向かってくれ。装備は呉ウチのものを使ってくれて構わない」

思わず息を呑む。まさかこんな事になるとは

「司令官、通信に出なかったのよね……？」

珍しく青ざめた顔の雷が呟く。

「大丈夫。きつと大丈夫さ。あの人のことだ、きつと何か策があつて動いているんだろう。今は出れない状況にあるだけさ」

「うん……」

去勢だ。私だって怖い。提督が通信に出ない。それはつまり敵の攻撃の激しさゆえ手が離せないか、執務室を離れて作戦行動を取っているか、あるいはもう……

「冗談じゃない。彼は死なないさ」

半分自分に言い聞かせ、立ち上がる。私たちは、今私達ができることをするだけだ。